

# 第一部

## 一、南京への道

日本人の行為を理解しようとするときに、ある非常に単純な疑問が真つ先に頭に浮かんでくる。人間の行動を律する制約を、あれほどまで完全に逸脱した日本軍の兵士の振る舞いが放置されたのは、いかなるものの崩壊の結果なのだろうか？ なぜ、日本軍の士官はそのような崩壊を認め、あるいは奨励したのだろうか？ 日本の政府は事件にどのように関わっていたのだろうか？ 最低限、政府は、事件について、自らの情報筋から知りえた報告、さらに海外の報道などから得られたものに対してどのように対応したのだろうか？

これらの疑問に答えるためには、日本の歴史を簡単に概観しなければならない。

二〇世紀の日本人のアイデンティティーは、軍事的な抗争によって確立維持されてきた千年来の制度によって造り上げられていた。古代のこの島では、強力な豪族たちが絶え間ない相互間の戦闘を担う私的な軍隊を雇っていた。中世には、これらの軍隊は日本特有の侍、武士階級に進化した。この武士階級の掟が「武士道」と呼ばれるものだった。主君への奉仕のために死ぬことは、侍、武士が生きるときに成就することができる最高の名誉である。

確かに、このような名譽の規範は日本文化の發明ではない。すでに、ローマの詩人ホラティウスが、青年の支配者に対する責務を定義している。— *Dulce et decorum est pro patria mori.* (祖国のための死は甘美で正しい)。しかし武士道の哲学は、軍事的な奉仕の定義にふさわしい水準をはるかに超えて肥大化し、それは非常に苛烈なものになり、武士が奉仕の義務を立派に果たせなかった場合には、自ら命を絶つという著しい特徴を持つにいたつた。自殺は、最高度に様式化され極度に苦痛に満ちた儀式である切腹によつて遂げられる。武士は、立会人の眼前で、ひるまずに自分の腹を引き裂いて死に向かうのである。

一二世紀に、今日では征夷大將軍と呼ばれる、支配的な(かつ最強の)豪族の頭目が、天照大神の直系の子孫として崇拜される天皇に対し、軍事保護の提供と引き換えに、支配階級すべてにおける統治權を認めさせた。この措置は貫徹された。その後、当初は人口のごく一部の割合でしか通用していなかつた武士の掟が日本の文化を深く貫き、すべての青年の行動の名譽を律する基準となつた。

言葉としての「武士道」が初めて使われたのは一八世紀だが、時間は武士道の倫理の強度を腐食させず、近代においてその極限状態にまで発達していった。第二次世界大戦での有名な神風特別攻撃は、日本の青年が天皇のために自らの命を犠牲にする強い覚悟を西欧人に劇的に印象付けた。日本の飛行士は戦闘機もろともアメリカの艦船に体当たりするよう、儀式的な訓練を受けていた。しかし、降伏よりも死を選ぶという考え方を保持していたのは、一部のエリートたちだけではなかつた。連合国軍の部隊が降伏するときには三人の戦死者に対して一人の割合で捕虜になつたのに対し、驚くべきことに、日本軍の部隊の場合には一二〇人の戦死でやつと一人が捕虜になつたという。

日本の特殊性をもたらしたもうひとつの要因はその孤立性であつた。この孤立は、地理的な原因によ

るものでもあり、また自らの政策によつてもたらされたものでもある。日本では、一五世紀末から一六世紀初頭（実際には一六世紀末から一七世紀初頭——訳者）にかけて徳川家の支配が確立され、徳川幕府は日本を外国の影響から封鎖する政策を採用した。広い世界からの安全を得ることを目的とした鎖国政策は、ヨーロッパで起こった産業革命の新しい技術から日本の社会を隔絶し、逆に日本を脆弱な安全保障の状態に置くことになった。二五〇年の間、日本の軍事技術は、弓矢、刀剣、火縄銃の水準にとどまり、大きく発展することができなかった。

一九世紀になると、日本の制御能力を超えた事件が鎖国の繭の中の日本に衝撃を与え、日本は不安定で排外的な騒乱に包まれた。一八五二年、貿易港開港を拒否し続ける日本に苛立ったアメリカ合衆国大統領ミラード・フィルモアは、当時、ヨーロッパの拡張主義を合理化するために共通に信奉されていた「白人の責務」を果たすべく、その島国にマシュー・ペリー提督を派遣して、日本の鎖国政策を終わらせようとする決定を下した。ペリーは注意深く日本史を研究し、アメリカの強大な軍勢力を誇示することによつて、日本を屈服させることにした。一八五三年七月、彼は黒煙を吐き出す軍艦の小艦隊を東京湾に送り、日本の人々に初めて蒸気機関の威力を見せつけた。剣と拳銃で武装した六、七十人の屈強な部下に囲まれたペリーは、將軍の首都に向けて分け入り、日本の高官との会談の開催を要求した。

ペリーの来航を眼にした当時の日本人について、たとえば、彼らが驚愕したと書いたぐらいでは、とてもそのときの状況を言い表すことはできない。歴史家サミュエル・エリオット・モリソンはこの出来事について書いている。「これと同じような状況を言うならば、宇宙飛行士が、地球外の宇宙からの奇怪な宇宙船が地球に向かって進んできていると発表したようなものである」。恐慌状態に陥つた徳川幕府

は、戦鬪を準備し、貴重なものを隠し、狼狽の中で会合を持った。しかし、結局のところ、アメリカの軍事的な優位性を認め、彼らの任務の要求を受け入れる以外の選択肢はなかった。この一度だけの訪問で、ペリーは徳川幕府に条約を締結させただけでなく、イギリス、ロシア、ドイツおよびフランスというような他の国々に対する日本の貿易の門も開放させたのである。

この誇り高き人々の感じた屈辱感は、激しい恨みとなって残された。一部の指導的なエリートは秘密裡に西欧列強との戦争を主張したが、他のものが戦争は外国をではなく日本を弱めることになると思得した。後者の考え方を採るものは、指導層が侵入者を懐柔し、彼らから学び、静かに報復を計画するべきであると主張した。

器械ニ於テハ彼ニ及フヘクモ有サレハ外邦エ通シ操法術策等ヲモ熟練シ四海ヲ家ノ如クニシテ諸外邦ニ往來シ戰功ノ恩賞ニハ外國ノ内ヲ宛行フヘシトセハ兵士キノ奮戰ヲ為スト云程ニ至リテ後ニ戰爭ノ端ヲ開クモ遅キニ非ス（我々は機械技術では外国に劣るので、外国と交流し、彼らの教練法と戦術を参考にし、周りの海を自分の家のようにして諸外国と往來し、海外に出て、戦鬪で活躍したものに外国の土地を与えれば、兵士は競って奮戦するだろう。戦争を宣言するのはそれからでも遅くはない）

このような考え方は広く浸透はしなかったが、この言葉は日本人が従うべき戦略のみならず、個人ではなく国家の成長をにらんだ長期的な視野を述べており、予言的である。

明確な展望を見出せない中で、徳川幕府は情勢を眺め、時期を待つことにした。しかしこれは、彼らの統治の時代の終焉を自身が承認するものだった。幕府のこの融和的な政策は、幕府に忠誠を誓っている支持者に対して幕府が要求してきたものと余りにも食い違っていたので、多数の支持者の心を離反させ、幕府の慎重な姿勢を野蛮な夷狄に対する奴隸的な屈従としか見ない強硬な反対勢力に攻撃材料を与えた。幕府が委託された統治権を遂行する能力を失ったことを確信して、討幕派大名は幕藩体制を覆し、天皇に大権を奉還させるための同盟を結成した。

一八六八年、明治天皇の名の下に討幕運動は勝利し、日本を独立した藩の寄せ集めから、強力な近代国家に造りかえる革命が燃え上がった。彼らは太陽の女神である天照大神を崇拜する神道を国家宗教に格上げし、藩ごとの氏族意識を一掃してこの島国を統一するための象徴として天皇を利用した。西洋に對する最終的な勝利を実現するために、帝国政府は侍の倫理である「武士道」をすべての臣民の道德に採用した。外国の脅威の危機感がこの島の強いカタルシスとして作用した。歴史上、明治維新と呼ばれるこの時代の日本では「尊皇攘夷」とか、「富国強兵」というような民族主義的なスローガンが叫ばれた。日本人は驚異的な速度で、科学的にも、経済的にも軍事的にも、近代の時代に突入していった。政府は、最良の学生を海外に送って西欧の大学で科学技術を研究させ、自国の産業の支配権を握って軍事産業の工場を建設し、地方ごとに統制されていた封建的な軍隊を徴兵制に基づく国民軍に置き換えた。また、アメリカ合衆国とヨーロッパ諸国の防衛状況を注意深く分析し、特にその中でドイツの軍事制度に傾倒した。しかし、外国で学んだ留学生が持ち帰った西欧の技術や防衛戦略は、日本の軍事的な優位性の旧来の確信を打ち砕き、将来の西欧との対決における勝利の必然性についての深刻な不安を残した。

日本は、一九世紀末には成果を發動させる準備を終え、アジアの近隣諸国に対して自らの新たな力を試すことにした。一八七六年、明治政府は朝鮮に二隻の砲艦と三隻の輸送艦で構成された海軍艦隊を派遣し、朝鮮政府に通商条約の締結を強要した。これは、ペリーが日本に強要した忘れがたい記憶の転嫁であった。

ついで、日本は朝鮮をめぐる中国と衝突した。一八八五年の条約は朝鮮を中国と日本の共同保護国と規定していたが、一〇年後、日本の超国家主義者が後ろ盾になって発生した朝鮮の暴動を中国が鎮圧しようとしたときに戦争が勃発した。一八九四年九月、宣戦布告からわずか六週間後に、日本は平壤を占領しただけでなく、海戦で中国の北洋艦隊を壊滅させた。清国政府は屈辱的な下関条約に署名することを強いられ、この条約により中国は二億<sup>テイル</sup>両の戦争賠償金を支払い、台湾、澎湖諸島、東北地方の遼東半島を割譲し、さらに四つの港市を開放させられた。これは歴史上、第一次中日戦争（日清戦争——訳者）と呼ばれる。

日本にとってこの勝利は、西欧列強があとで横槍を入れて台無しにしなければ完璧なものになるはずだった。戦後、日本が戦争によって獲得した最大の成果である遼東半島は、最終的には、ロシア、フランス、およびドイツの三国干渉によって放棄させられた。ここで繰り返された、遠方のヨーロッパ諸国の政府が日本の行動を牽制するという構図は、西欧の圧迫者に対する軍事的な優位性を獲得しようという日本の決意を強固にするものでしかなかった。一九〇四年までに、日本は軍隊の規模を倍増させ、武器を自国で生産する十分な能力を獲得した。

間もなく、この戦略は報われることになる。日本は戦場で、中国だけでなくロシアをも打ち負かすこ

とができたのである。一九〇五年の日露戦争で、日本は遼東半島の旅順港を再度占領し、対馬沖での海戦の勝利によって、サハリン島の半分を獲得し、「満州」での商業権益の優位性を認めさせた。これは、西欧諸国の屈辱的な扱いに五〇年間苛立ち続けてきた誇り高き国にとって、陶然たる出来事だった。勝利に浮かれた日本の学者は、日本は「海外に拡張して他国を支配するよう運命づけられている」と宣言したが、これはこの国の心情を要約しているものだった。

主にこの成功のために、二〇世紀初頭は日本にとって幸福な時代だった。近代化によって、この国は、軍事的な威光だけでなく、前代未聞の経済的な繁栄をも得ることができた。第一次世界大戦は、日本の繊維製品や国際貿易の他に、鉄鋼製品に対する巨大な需要をもたらした。株価は高騰し、一夜にして大富豪が生まれ、国中が浪費に眩惑された。伝統的な男権社会の中で奥に閉じ込められていた女性さえもカジノや競馬場で賭博に興じる姿が見られた。

多分、この繁栄が継続していれば、日本に確かな中産階級が形成され、帝国主義的な軍部の影響力をチェックする力を人々が得ることができたのだろう。しかし、そうはならなかった。やがて日本は、近代史におけるもつとも悲惨な経済恐慌に直面することになる。恐慌は、日本がそれまでに獲得したものを吹き飛ばし、日本を飢餓の瀬戸際に追いやり、戦争の道に駆り立てることになった。

一九二〇年代には、日本における繁栄の黄金時代の幕が降りた。第一次世界大戦の終結により軍需物資に対する飽くなき需要が消滅すると、日本の軍需工場は閉鎖され、何千もの労働者が職を失い、路上に放り出された。これに加え、一九二九年のアメリカ合衆国の証券市場崩壊とそれに続く不況によりア



アメリカの奢侈品購入が縮小し、そのために日本の絹製品の輸出货量が減少した。

重要なのは、日本が第一次世界大戦で連合国側にいたにもかかわらず、戦後の一〇年間、多くの国際的な経済人や消費者が日本製品を遠ざけようとしたことである。ヨーロッパ諸国も日本も、第一次世界大戦の戦果として国外の属領を拡張したが、日本の拡張は同じようには見られなかった。西欧の経済人は、新世紀の最初の一〇年間の日本の中国に対する攻撃的な姿勢に拒否反応を示した。戦後措置の結果として、日本はかつてのドイツ植民地を管理するようになったが、ここで日本が試みた西洋流の植民地主義に対する反応はさらに強烈だった。そのために、これら経済人は中国への投資を加速させるようになった。一方、中国は、山東半島におけるドイツの権益を日本が獲得することを許したベルサイユでの決定に憤激し、日本製品の広範な不買運動を組織した。これらの展開は日本の経済をさらに深く傷つけ、日本が再び国際的な陰謀の犠牲になっているという確信を民衆に広く植えつけることになった。

経済の低迷は日本の地域社会を荒廃させた。会社は倒産し、失業者数が膨れ上がった。困窮した農民や漁民は娘を売春宿に売らなければならなかった。インフレーションの進行、労働争議に加え、一九二三年九月に発生した大震災により、暗い世相は悪化していくばかりだった。

不況の中で、人々の間には、飢餓を避けるために日本は新しい領土を征服しなければならないという議論が広がっていった。明治維新の時期に三千万人ほどだった人口は、一九三〇年代には約六千五百万人に膨張しており、日本にとって、国民に食物を供給することが、次第に困難になっていった。日本の農民は多大な努力を払い、単位面積あたりの収穫高を限界にまで引き上げたが、一九二〇年代には農業生産は頭打ちになった。継続的な人口増大の結果、日本は毎年輸入する食糧に強く依存せざるをえなく

なり、一九一〇年代から一九二〇年代にかけて、日本の米の輸入量は三倍になった。かつては、織維製品（たね）の輸出をもつて輸入の支払いに当てていたが、輸出は外国の需要の減少、激しい競争、そしてしばしば課せられた差別的な関税によつて制約されていった。

一九二〇年代、日本陸軍の急進的な青年たちは、国家の生存のために軍事的な拡張が絶対条件であると議論するようになった。陸軍少佐橋本欣五郎は彼の書『青年に贈る』の中で次のように書いている。

さきにわれらは、日本が人口過剰（じんこうくわじょう）の壓迫（あつぱく）より免るゝ途は、三つしかないことを記した。……これを脱れ出る門扉（もんび）は、海外移民（かいぐわいいみん）と、商品進出（しやうひんしんしゅつ）と、領土擴張（りやうどくわくちやう）の三つしかない。しかるに、第一の海外移民（かいぐわいいみん）といふ門扉は、諸列國の日本移民排斥（しよれつこく につほんいみんはいせき）によつて、ピタツと釘付（くぎづけ）にされてしまった。第二の商品進出（しやうひんしんしゅつ）といふ門扉も、高率関税の障壁（かうりつぐわんせい）と、通商條約の破棄（たうしやうてうやく はき）によつて、逆に押しかへされつゝある。

三つの門扉のうち、二つまで鎖（と）ぎされた日本は、どうしたらいいか。

日本の別の論客は、他国の広大な領土に触れ、それと比較した不公平さに不満を述べ、特にこれらの国々の土地のほとんどの部分で、日本の農民が実現している単位耕地面積当たりの高い収穫率が達成されていらないことを指摘した。彼らは中国の広大な土地資源に対してのみならず、西洋諸国のそれに対しても羨望の目を向けた。軍の宣伝担当者であった荒木貞夫は問いかける。なぜ六千万人の口を養う日本は、多くが不毛の地である一四万二、二七〇平方マイルに満足し続け、オーストラリアやカナダといった

国々では六五〇万人の人口に対して三〇〇万平方マイル以上を領有しているのだろうか？ この不均等は不公正だ、というわけである。超国家主義者から見れば、アメリカ合衆国は最大の利益を享受していることになる。荒木は、アメリカ合衆国は三〇〇万平方マイルの本国領のほかに七〇万平方マイルの植民地を保有していると指摘する。

「太平洋に向う領土拡張が十九世紀アメリカの自明の運命だったとすれば、中国は二〇世紀日本の自明の運命なのだ。優れた人格よりなる等質な国民が、社会的に断片化され政府の支配が散漫な空間である中国を、自らの使用と開拓に供しようとすることは、ほとんど必然的である」と。日本の強欲の目標はアジアだけに限定されてはいなかった。日本がアメリカ合衆国、大英帝国、フランスおよびイタリアとの間の主力艦制限協定に参加し、世界第三位の海軍力を保有するという顕著な地位を認められてから、わずか三年後の一九二五年に、国家主義者の大川周明は、アジアを「解放」する日本の運命だけではない、日本とアメリカ合衆国間の世界戦争の必然性を主張する書物を著した。その最終章では、二つの強国の運命的な闘争を黙示録的に予言している。このときの彼は、自分自身が自覚していた以上に預言者的である。「東西両強国の生命を賭しての戦が、恐らく従来も然りし如く、新世界出現のための避け難き運命である。この論理は、果然米国の日本に対する挑戦として現れた。亜細亜に於ける最強国は日本であり、欧羅巴を代表する最強国は米国である。この両国は……相戦はねばならぬ運命に在る。日本よ！ 一年の後か、十年の後か、又は三十年の後か、そは唯だ天のみ知る」。

新たに獲得した技術的な能力を使用してよりよい社会を建設することを望む人たちと、近隣諸国に対する国家の軍事的な優位性を用いて対外征服のプログラムに乗り出すことを欲する人たちとの間の影響

力強化の競争が進んでいく構図の中で、一九三〇年代の日本の政府は、自らが抜き差しならない泥沼状態に陥つていくことに気づいた。拡張主義的なイデオロギーは、私有財産の制限、資産の国有化、そしてアジアの支配を実現するための軍部の独裁を要求する右翼超国家主義者たちの熱烈な支持を得た。このような考え方は、地方出身で若く、東京の政治家に生来の不信任を持ち、権力への即時参加を性急に求める軍部青年将校たちの野望を燃え上がらせた。将校たちは互いに争っていたが、社会を改造し、ヨーロッパに意趣返しをしてアジアを支配するという、彼らが信じている日本の神聖な責務を阻害する官界、財界、政界のすべての障壁を取り除くべきだという、似かよった使命感を共有していた。

干渉主義者たちは政府の穏健派に対して、一步一步、譲歩を強要していった。しかし、事態がなかなか進展しないことに失望した彼らは政府の打倒を共謀するようになった。一九三一年に叛乱が計画されたが、この計画は放棄された。一九三二年、東京で海軍将校たちがテロ襲撃事件を起こし、犬養毅首相が暗殺されたが、戒厳令を敷くことはできなかった。

一九三六年二月二六日、青年将校の集団が大胆なクーデターを引き起こし、この事件で何人かの政治家が命を奪われた。反乱軍は東京市街を三日以上も麻痺させたが、最終的には失敗し、首謀者は投獄されあるいは処刑された。政府内で、権力は極論主義者からもっと慎重な派閥に移行したが、重要なのは、この派閥でさえも、アジアにおける日本の支配的な役割に関しては、青年将校の狂信のほとんどを共有していたことである。

やがて、日本の超国家主義者の一部は、中国を支配しようと思うのならば急いで行動しなければなら

ないことに気づいた。一八九五年の日本の要求には屈従を強いられた中国に、民族の自強を目指す兆候が見られたからである。この兆候に、日本の拡張主義者は、自らの使命実現への切迫感を募らせた。

実際に当時の中国は過去二〇年間で費やして、分裂した帝国から戦闘的な国民国家へと、自らを変貌させようとしていた。一九一一年、反乱軍が清帝国の軍隊を打ち負かし、二世紀以上に及んだ満洲族の支配を終わらせた。一九二〇年代には蒋介石が率いる国民革命軍が中国北部の軍閥に対する北伐を成功させ、国家を統一した。彼らはまた、外国の列強が清朝に押し付けた不平等条約の撤廃を最終目的とするとして、蔣の運動が勢いを得ると、日本の満蒙の権益が脅かされることになった。征服の目的である中国が強力になりすぎる前に、急いで、何らかの手を打たなければならなかったのである。

日本政府の承認の下、軍部は中国の情勢に今まで以上に好戦的に干渉し始めた。一九二八年、軍部は「満州」を支配する軍閥の首領張作霖が日本に従順でなくなったときに、その暗殺を企て、実行した。この殺人行為は中国人民をいっそう激怒させ、日本製品の不買運動がさらに強力に組織された。

一九三〇代に、日本は中国に対する宣戦布告のない戦争を發動した。一九三一年九月一八日、日本軍は日本が所有する南満洲鉄道の線路を爆破し、騒ぎを煽り立てようとした。爆発後、急行列車は脱線せずに通過したが、日本人は中国兵を射殺し、世界の通信社に向けて、中国側による破壊工作の筋書きででっち上げた。日本はこの事件を口実に「満州」を強奪し、満洲国と名前を変え、満洲王朝の継承者で中国最後の皇帝溥儀を傀儡の支配者に就任させた。しかし、「満州」の強奪は中国の反日感情を生み出し、民族主義者の活動家はその感情に訴え、煽り立てた。一九三二年、双方の敵愾心が高まる中で、上海の群集が五人の日本人僧侶を襲撃し、一名が死亡するという流血事件が発生した。直後に、日本は報

復攻撃として市街を爆撃し、何万人もの民間人を殺害した。上海におけるこの大量殺人が全世界からの批判にさらされると、日本は国際社会から自国を隔離することでこれに応じ、一九三三年に国際連盟を脱退した。

中国との避けられない戦争に備えて、日本は数十年間をかけて、男子国民に戦闘訓練をほどこしていた。青年を日本の軍隊に奉仕する型にはめるしつけは、人生の早い時期に始まる。一九三〇年代には、少年期のすべてが軍国主義的な色彩に染められた。玩具店は兵器庫を思わせ、兵士、戦車、鉄兜、軍服、小銃、高射砲、ラッパ、曲射砲などのおもちゃが並べられ、戦争神社のようなありさまになった。当時を知る人の回想によれば、思春期前の少年たちは街路で竹の棒を小銃に見立てて戦争ごっこをし、あるいは、「爆弾三勇士」の英雄談を想像し、背中に丸太を縛り付け自爆攻撃のまねをして遊んだ。

日本の学校の機能はミニチュアの軍事部隊のようなものになった。実際に、教師の一部は軍の将校であり、学生たちに、神聖な使命たるアジアの征服を日本が遂行すること、さらに世界の国々に対し、いずれにも劣らない国民として立派に立ち向かうこと、これらの遂行に貢献する国民の義務を教えた。彼らは、低学年の少年には木製の模型で銃の取り扱い方を教え、高学年の少年には本物の銃で扱い方を教えた。教科書は軍国主義宣伝の道具になった。ある地理の教科書は、日本列島の島の形状までも対外拡張の正当化の言説に結びつけた。「わが国はアジアの最先端にあり、勇敢に太平洋に向かって進んでいるように見える。同時に、アジア大陸を外敵からの攻撃から護っているように見える」。また教師たちは、中国本土に対する将来の侵略に心理的に備えるべく、少年たちの心に中国人への憎悪と侮りを植え付け

た。ある歴史家は、一九三〇年代の日本の学校で起きた気弱な少年の逸話を紹介している。彼は蛙を解剖するように言われて動揺し、泣き出してしまった。教師は拳骨で彼の頭を叩き、怒鳴り声を上げた。「お前はなぜこんなちっぽけな蛙のことで泣き出すのだ？ お前が大人になったら、百人二百人のチャンコロを殺さなきゃならないんだぞ」。

(しかし、この心理教育プログラムについての事情は、やや込み入っている。「中国に関して、日本社会には根深いアンビバレンスが存在していた」。オックスフォード大学の歴史学者ラナ・ミッターは指摘する。「朝鮮人に対する場合とは異なり、中国人に対する日本人の感情は種族的蔑視ではなかった。日本人にとって、中国は自らが強く心酔してきた文化の源泉だった。彼らが憤慨していたのは、二〇世紀初頭の中国の混乱、だらしのなさだったのである。一九三一年の満州事変の立役者である石原莞爾は、一九一一年の辛亥革命の熱狂的な支持者だった。辛亥革命の前後の時期には、孫文や袁世凱を含む多数の中国人が日本からの援助や日本による訓練を期待した。また、日本は義和団事件の賠償金を中国のための奨学金や同人会病院の資金として提供したし、『橋本ときお』のような学者は、中国文化を正しく評価していた。日本の外交官や軍人の中国専門家の多くは、中国に対してよく訓練され、博識だった。しかし、このような博識や洗練が通常の兵士に影響することはほとんどなかった)

日本の学校における軍国主義の根源は、歴史的には明治維新に遡る。一九世紀末に日本の文部大臣は、学校は学生の利益のためではなく、国家の利益のために運営されるのであると述べた。小学校の教師たちは軍隊の新兵のように訓練された。師範学校の学生は兵舎のような宿舎に入り、厳しい規律に縛られ詰め込み教育を受けた。一八九〇年には教育勅語が発布された。これは軍人勅諭と同様の規範を民間人

に適用したもので、権力に対する完全な服従と天皇に対する無条件の忠誠を至上の価値とするものだった。日本の学校では、天皇の肖像と一緒に教育勅語が祀られていて、毎朝、それが取り出され朗読された。勅語の言葉を言い間違えた何人もの教師が、神聖な文書への償いとして自殺したと噂された。

一九三〇年代には、日本の教育システムは組織化され、ロボット工場のようになった。日本の小学校への訪問者は、数千の生徒たちが整然と一列に並び、旗を振りながら行進する光景に驚き、これを賛嘆した。明らかに、その訪問者は訓練と秩序を見たが、それを造り上げ維持するための虐待は見なかったのである。教師たちがサディスティックな鬼軍曹のように振舞うのはありふれたことで、彼らは子どもたちの頬を往復ビンタし、こぶしで殴りつけ、あるいは竹刀や木刀で打ち据えた。生徒たちは重苦しく押さえつけられ、長時間正座させられ、雪の上に裸足で立たされ、グラウンドの周囲を力尽きて倒れるまで走らされた。このような待遇に憤激して来校する人はほとんどいなかったし、生徒の両親でも学校を訪れることはほとんどなかった。

学校の生徒が兵役につくと、権力への服従の圧力はさらに苛烈になった。悪意的ないじめと残酷な上下の順位付けにより、ほとんどの新兵の個人主義的精神は残らず押し潰されてしまう。服従が最上位の徳目であると執拗に教化され、個人の自尊の感覚は大組織の小さな歯車としての自覚に置き換えられた。このような個人意識から全体価値への昇華を実現するために、下士官や古参兵は、何の理由もなく新兵を殴り、木製の棍棒で手ひどく打ち据えた。入谷敏男によれば、上官はしばしば私的制裁を次のような言説で正当化した。「きさまが憎くて殴るんじゃない。きさまのためを思えばこそ、こんなに手を赤くしてまで殴るんだ。酔狂でこんな真似ができると思うか」。青年の一部は、残酷な環境の中で死亡し、



他の一部は自殺した。しかし、大部分のものは、軍隊という人生の新しい目的を注入する容器にはめ込まれていった。

訓練は、大志を抱く士官に対しても、負けず劣らずに過酷なものだった。一九二〇年代当時、すべての陸軍士官候補生は市ヶ谷の陸軍士官学校を卒業しなければならなかった。定員を超過した兵舎、暖房のない教室、粗末な食事、それは学校というよりも監獄と呼ぶほうがはるかにふさわしいものだった。日本の訓練の猛烈さは、ほとんどの西欧の士官学校を上回るものだった。イギリスでは、士官は一、三、七二時間の教室での学習と二、四、五時間の私的な学習を課せられていたが、日本の標準は三、三、八二時間の教室の学習と二、七、六五時間の私的学習だった。士官候補生たちは、身体の教練と、歴史、地理、外国語、数学、科学、論理学、製図および書道の教科をこなす厳しい日課に耐えていたのである。このカリキュラムのすべてがああ目的の完成と勝利に向けられていた。何よりも、日本の士官候補生は「敗北を知らない意志」の獲得を求められた。怖いことに、士官候補生の落第の試験結果は、自殺の危険性を減らすために、すべて秘密にされていた。

学校は、外界から封印された孤島のような感じだった。日本の士官候補生には、プライベートもなく、個人としてリーダーシップのスキルを磨く機会もなかった。彼らが読む文献は注意深く検閲され、余暇時間は存在しなかった。歴史と科学は優越民族としての日本人のイメージを創出させるように歪曲された。「人生の多感な時期に、彼らは外界のすべての楽しみ、興味あるいは影響から隔絶されていた」。西欧の記録は語る。「彼らが活動する狭い溝のような空間の雰囲気は、特殊な国家主義、特殊な軍国主義の宣伝が充満していた。我々がすでに心理的に遠ざかっているこの国民は、彼ら自身はるかに我々から遠く離れた

地点にまでいつているのである」。

一九三七年の夏、日本は最終的に中国との全面戦争を引き起こすことに成功した。その年の七月、条約によって中国の都市天津に駐留していた日本軍の連隊が、古跡盧溝橋付近で夜間演習を行った。休息中に何発かの銃弾が暗闇から日本軍に向けて発砲され、一人の日本兵が直後の点呼に応じず、行方を確認できなかった。この出来事を地域に対する軍事力行使の口実にして、日本軍の部隊は盧溝橋に近い宛平県に進み、門を開けて入城させ兵士を搜索させるよう要求した。中国の指揮官が拒絶すると、日本軍は砲撃した。

七月末までに、日本は天津北京地区全域を確保し、八月には上海を侵略した。このようにして、第二次中日戦争は引き返せない段階に踏み込んでいった。

しかし、中国の征服は日本が予測していたよりも難しいことが明らかになった。上海の中国軍だけでも兵士の人数は日本海軍の一〇倍に達していたし、国民政府の指導者蒋介石は彼の最精鋭部隊を温存していた。その年の八月、三万五千人の増援部隊が上海の埠頭に上陸しているときに、日本軍は初めての敗北を経験した。隠れていた中国の砲兵部隊陣地からの砲撃が始まると、数百人が戦死し、戦死者の中には皇后良子のいとも含まれていた。数ヶ月の間、中国軍は並外れた勇氣をもって都市を防衛した。上海の戦闘は、街路ごとに、バリケードごとにひとつずつ、ゆっくりと進行し、日本人をいらだたせ、悔しがらせた。

一九三〇年代、日本軍の指導者は、日本は中国大陸を三ヶ月で征服できると吹聴していて、その言葉は一般にも真面目に信じられていた。しかし、上海市の戦闘だけで夏から秋まで引き摺られ、秋から冬

まで引き摺られたとき、日本がたやすく勝利することができるといふ幻想は打ち砕かれた。そのとき、軍事技術も知らず、訓練されていない素朴な人々が、優勢な日本軍への抗戦を担い、日本軍を立ち往生させていたのである。一一月に上海が陥落したとき、皇軍の軍紀は極度に悪化し、南京に向けて進軍する多数の兵士が復讐の念に駆られていたと言われる。

## 二、六週間の暴虐

## 南京を指す競争

日本の南京攻略の戦略は単純だった。皇軍はこの都市の二方向が河川で封鎖されているという事実を利用した。古代より多数の王朝の都だった南京は揚子江南岸の川が屈曲する地にあり、揚子江は都市の西側を北に流れてから東に向きを変える。南京の東南から半円形の前線を収縮していけば、日本軍は揚子江の自然の障壁を利用して都市を完全に包囲し、退路を断つことができる。

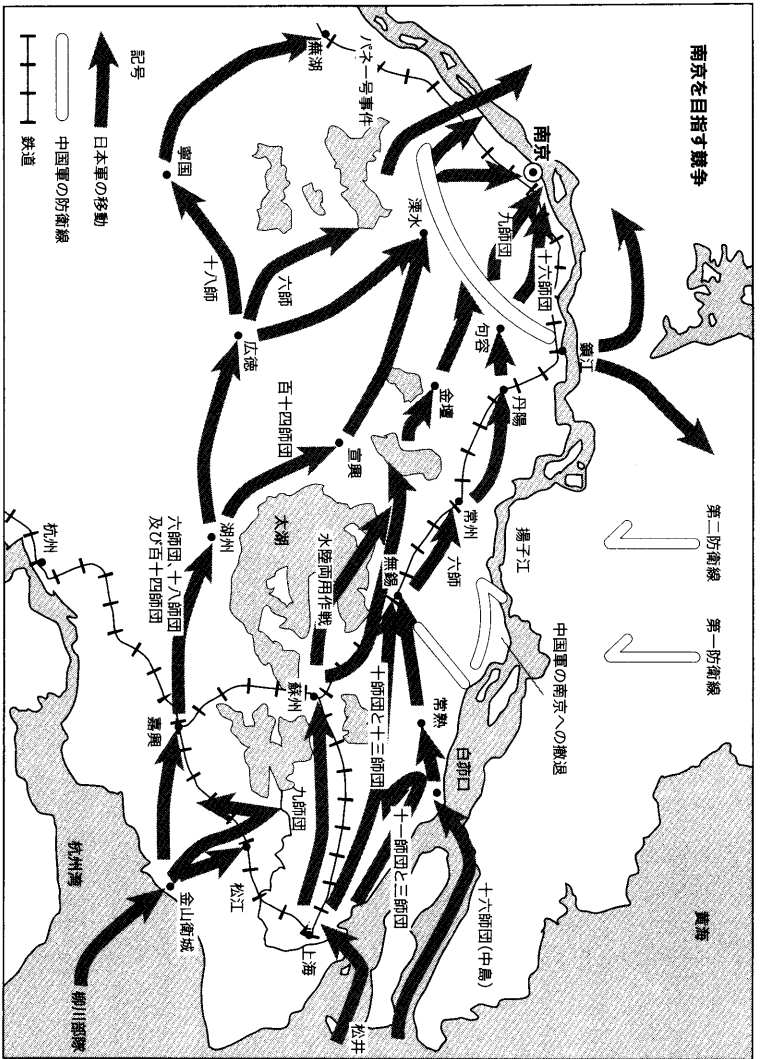
一 一月下旬、日本軍の三つの軍団が並行して南京に向けて進撃していた。ひとつは揚子江南岸を西に向かつて進んでいた。この軍団は揚子江デルタ地域に入り、上海の西北にある白茆江を通り、京滬鉄道（南京・上海鉄道）に沿って進んでいた。日本軍の爆撃により、この地域のほとんどの橋は破壊されていた。軍団を率いていたのは、日本軍の駐仏情報将校を務め、天皇裕仁の秘密警察の長を務めた経歴を持つ中島今朝吾である。中島についての文献は多くないが、残された記録はどれもこれも芳しくないものばかりである。『天皇の陰謀』の著者デイヴィッド・バーガミニは彼を「小さなヒムラーであり、思想取締り、弾圧、拷問の専門家であった」と書き、中島に関する別の文献から、彼が南京に人間を焼く特殊

な油を携えてやってきたサディストだったという記述を引用している。彼の伝記を書いた木村久邇典でさえも、中島が「獸的」で「暴力的な男」だったと描いている。

もうひとつの軍団は、上海と南京の間にある太湖を突っ切り、水路と陸路の両方を進む大胆な攻撃を準備していた。この部隊は上海を起点にして、中島の部隊よりも南の経路を西に向かつて進んでいた。部隊を指揮していたのは松井石根大将で、小さな口髭を蓄え、結核の持病を持つ小柄な弱々しい男だった。中島とは異なり、松井は学者の家系から出た敬虔な仏教徒だった。彼はまた、上海南京区域全体に対する日本軍の司令官でもあった。

松井の部隊のさらに南側を三番目の軍団が移動し、北西に向きを変えて南京を目指していた。この部隊の長は柳川平助中将で、文学に興味を抱く禿頭の小柄な男だった。日本の中国侵略当時の彼の人生は、南京大虐殺に何らかの形でかかわった日本人のうち誰よりも謎に包まれている。彼の伝記を書いた菅原裕によれば、柳川は一九三二年の反乱を中止させようとしたために、日本の陸軍を支配していたファッショ的な派閥に排斥された。左遷され予備役に編入された後、柳川は中国で軍司令官を務め、「敵首都南京を陥れ、曠古の偉勲を立てた」が、軍中央部は彼の姓名や写真を公表することを差し止めた。多くの日本人には、柳川は「覆面將軍」として知られていた。

南京への経路にある地域は、どこも容赦されなかった。日本の古参兵は小さな村落をもれなく襲撃し、人影を目にするや棍棒で殴打し銃剣で刺し殺した。しかし、受難を強いられたのは小さな村落だけではなく、太湖東岸に位置する蘇州市の例を見てみよう。蘇州は中国最古の都市のひとつで、繊細な絹の刺繍、王宮、寺院などで知られていた。運河と古い小橋の風情を見た西洋人は、この街を「東洋のベ



ニス」と呼んだ。一月一九日の朝、激しい雨の中で、中国軍歩哨に見咎められないよう頭巾をかぶつた日本軍前衛部隊が蘇州の城門を通過した。城内に入ると、日本軍は市内で何日にもわたつて殺人、略奪を続け、古跡を焼き払い、何千人もの中国人女性を拉致して性奴隷にした。チャイナ・ウィークリー・レビュー誌 (China Weekly Review) によれば、この侵略行為により、市の人口は三五万人から五百人に激減したという。

あるイギリス人の駐在記者は、日本軍が通過した九週間後の、松江（上海郊外の地区）に何が残されていたかを記録している。「放火破壊されていない建物ほとんど見当たらない」。彼は書いている。「焼け焦げた廃墟と人気がない街路、唯一の生き物である野犬が人間の死体のごちそうで不自然に肥えている光景は異様だ。一〇万人ほどの稠密な人口がいたはずの松江全体で、私が見た中国人は、フランス宣教師の屋敷に悲嘆に暮れて隠れていた五人の老人だけだった」。

### 朝香宮が指揮権を握る

しかし、最悪の事態が訪れるのはこれからだった。

日本軍が南京に照準を定めた一二月七日、蘇州の野戦司令部にいた松井大将は発熱に襲われた。持病である慢性結核の症状が悪化したのである。病は、権力が松井から皇族の一人へ移行する瞬間を見計らつたように松井を襲った。そのわずか五日前に、天皇裕仁は松井を昇進させて直接の指揮から遠ざけ、彼に代えて天皇の叔父である朝香宮鳩彦王を前線に送った。新体制では、松井は中国中部全域を担当することになり、三〇年の軍隊生活の経験を持つ朝香宮中将が南京包囲軍の新しい司令官に任じられた。皇

族であることにより、朝香宮は南京の前線における他のすべての權威を無効にしてしまふ強權を持つことになった。また、彼は中島中将や柳川中将とともに、情報將校としてパリで三年間暮らした経験があり、そのために松井よりもその両名に親しかった。

この重要な時期に、なぜ天皇裕仁が朝香宮をこの地位につけたのかについては、多くを知ることにはできない。しかしバーガミニは、一九三六年二月に発生した軍事反乱に関する政治問題で天皇の弟である秩父宮に与して裕仁に逆らつた朝香宮が試されたのだと信じている。宮廷内の評価で朝香宮を「宜しくない」態度を持つ皇室の一員として名指しした裕仁は、明らかに叔父を南京の司令官に任命することで、彼自身への償いの機会を与えたのである。

当初、これは些細な配置換えのように見えたが、後に、何十万人の中国人の生命に対して、決定的な変更だつたことが明らかになつていく。

日本軍の内部で実際に何が起つていたかを記述することは非常に難しい。利用できる詳細な情報のはほとんどは、後年の裁判で松井とその同僚が語つたものや信頼性が疑わしい証人が語つたものである。で、その引用には相当の警戒心が必要である。しかし、これらの証言を信じていることができるのであれば、そこに参考にできるものがあるだろう。皇族の新参者が権力を濫用することへの用心から、松井は南京への侵略に関する一連の道德規律を發布した。彼は、配下の軍隊に対して、南京城から数キロメートル離れた地域に再結集させ、市内にはよく訓練された少数の部隊だけが入り、占領を完了するよう命令し、「支那軍民をして皇軍の威風に敬仰帰服せしめ」ようとした。彼はまた、病床に参謀將校たちを招集し



て、次の注意事項を發布した。

皇軍が外国の首都に入城するは有史以来の盛事にして……世界のひとしく注目しある大事件なるに鑑み、正々堂々、将来の模範たるべき心組をもつて各部隊の乱入、友軍の相撃、不法行為など絶対に無からしむを要す。

……あらかじめ注意事項、とくに城内外国権益の位置等を徹底せしめ、絶対に過誤なきを期し、要すれば歩哨を配置す。……略奪行為をなし、また不注意といえども火を失する者は、厳罰に処す。軍隊と同時に多数の憲兵、補助憲兵を入城せしめ、不法行為を摘発せしむ。

しかし、事態は松井の制御の及ばない別の場所で醸成されていた。一二月五日、物語は朝香宮鳩彦王が飛行機で東京を発ち、三日後に前線に到着したときに始まる。南京から南東に一〇マイル(約一六キロメートル)ほど離れた野戦司令部に程近く、放棄されたままになっていた郊外の別荘で、朝香宮は、パリ時代の同僚で、左臀部の負傷から回復していた中島中将に会った。中島は朝香宮に、日本軍は南京付近で三〇万人の中国軍を包囲しているが、予備交渉の結果、彼らが降伏に応じる準備ができていたことが明らかにになったと語った。

この報告を聞いた後、朝香宮の司令部から、朝香宮個人の押印がある「秘、読後焼却のこと」と記された一連の命令書が送付された。現在では、その命令書の内容は「捕虜はすべて殺せ」という単純な通告であったことが明らかになっている。不明なのは、この命令書の発行が朝香宮本人によるものだった

かどうかという点である。\*

※ 後に、朝香宮の参謀情報将校だった長勇が友人に、彼自身が主導して命令書を偽造したことを告白した。陸軍将校だった田中隆吉は、当時陸軍歩兵第七十四連隊の連隊長だった長勇が一九三八年の四月に彼に興味深い話をしたと語った。その話によれば、長が、杭州湾に上陸し内陸に進軍していたとき、三〇万人の中国軍が退路を断たれ、武器を捨てて日本軍に降伏した。「この多数の捕虜を如何に取り扱うべきやは食糧の關係で、一番重大な問題となった」。長は報告口調で語った。

事態の進展の結果、長は食糧問題を即座に解決する方法を採用した。「直ちに何人にも無断で隷下の各部隊に対し、これらの捕虜をみな殺しにすべしとの命令を発した。自分はこの命令を軍司令官の名を利用して無線電信に依り伝達した。命令の原文は直ちに焼却した」

この話の真偽を確認することは不可能だが、たとえ長が勝手に殺害命令を偽造したとしても、これが朝香宮鳩彦王の虐殺行為に対する責任を免除することにはならない点に注意しなければならない。朝香宮は虐殺が始まった後に、虐殺命令を取り消す命令を出すことができたのだし、彼の情報将校を軍法会議にかけることもできたのである。

41 日本軍が南京に入城したとき、中国人捕虜の殺害命令は書面として作成されただけではなく、下位将校にも通達された。一九三七年二月一三日、日本陸軍歩兵第六十六連隊は次の命令を受け取った。

大隊戦闘詳報、午後二時零分、聯隊長ヨリ左ノ命令ヲ受ク。

左記

イ、旅団命令ニヨリ捕虜ハ全部殺スベシ。

其ノ方法ハ十数名ヲ捕虜シ逐次銃殺シテハ如何。

午後三時三十分各中隊長ヲ集メ、捕虜ノ処分ニ付キ意見ノ交換ヲナシタル結果、各中隊（第一、第三、第四中隊）ニ等分ニ分配シ、監禁室ヨリ五十名宛連レ出シ、第一中隊ハ露营地南方谷地、第三中隊ハ露营地西南方凹地、第四中隊ハ露营地東南谷地附近ニ於テ、刺殺セシムルコトトセリ。但シ、監禁室ノ周圍ハ嚴重ニ警戒兵ヲ配置シ連レ出ス際絶対ニ感知サレザル如ク注意ス。各隊共ニ午後五時準備終リ、刺殺ヲ開始シ、午後七時三十分刺殺ヲ終ヘリ。聯隊ニ報告ス。

命令は冷酷な論理に基づいている。捕虜には食糧を提供できないので、彼らは抹殺されなければならない。彼らを殺害することにより、食糧問題を取り除くことができるだけでなく、報復の可能性を減らすこともできる。そもそも、死んだ敵にはゲリラ部隊を組織することができない。

とはいえ、命令を実施することは別問題である。一月一三日未明に日本軍が城壁を突破して城内に入ったとき、彼らは何倍もの人数を相手にする状態になった。後に、歴史家は五〇万人以上の民間人と九万人以上の軍人が南京に閉じ込められたが、市を攻撃した日本軍兵士は五万人程度だったと推定している。中島中将は、何万もの中国人捕虜を殺すことが大変な作業であることを知っていた。「千、五千、一万ノ群集トナレバ之ガ武装ヲ解除スルコトストラ出来ズ……之ガ一旦搔（騷）擾セバ始末ニ困ル」。

### 捕虜の殺害

自らの人的資源が限られていたために、日本軍は詐欺的な方法に強く頼った。大虐殺の計略はいくつ

かの段階からなっていた。中国人に向かい、抵抗をやめれば公正な取り扱いを保証すると約束し、彼らをなだめすかして自ら日本の征服者に降伏するようにさせ、捕えた人たちが百人から二百人の集団に分け、南京近郊の別の殺害場所に連れ出す。中島は、これ以上の抵抗が不可能で、ほとんどの捕虜が意気消沈し、日本軍が命じたどのような指示にでも従うような状態を望んでいた。

これらすべてが日本人の予想よりも容易に遂行された。抵抗は散発的にしか発生せず、実質的には存在しないに等しいものだった。日本軍によって封鎖された都市を抜け出そうとして武器を捨てたとき、多数の中国兵は単によい待遇を望むような心境に変わっていた。降伏し、後手に縛られることを受け入れれば、その後は容易なことである。

多分、元日本軍兵士東史郎の日記ほど、当時の中国兵の無抵抗を的確に表現している文献はないだろう。この日記には南京陥落直後の数千人の中国兵の投降のありさまが描かれている。彼の部隊が広場に集合して歩哨配置から宿舍割に時を過ぎていくときに、突然、約二万人の捕虜の收容命令が来た。東は同僚たちとともに「三、四里（十数キロ）」捕虜を搜索して歩いた。夜になっても歩いていたら、日本人たちは蛙のなき声の様な喧騒を聞く。彼らはまた、暗闇の中に無数の煙草の火が点滅するのを見た。「枯枝に結びつけた二本の、夜風にはためく白旗をとり巻いた七千の捕虜は壯観な眺めである」。東は書いている。捕虜たちはみすばらしい人間のよせ集めだった。ある者は綿入れの水色の軍服に綿入れ水色の外套を着、水色の帽子をかぶっていた。ある者は頭から毛布をかぶり、ある者はむしろの袋を持ち、ある者は布団を背負っていた。日本軍は白旗を先頭に四列縦隊に捕虜たちを並べた。この数千人の捕虜の集団は、投降の次の段階として日本軍が彼らに対応し、指示を与えるのを忍耐強く待っていた。

東は、中国人が戦いを厭う姿を見て茫然とした。飛行士は落下傘ではなく刀を与えられ、捕虜になるよりも自殺するほうが限りなく望ましいとされる軍事的な文化から来た男には、中国軍が死を賭して敵と戦おうとしないことが理解できなかった。捕虜の人数が捕えた側の人数よりも多いことを知ったときに、彼の中国人に対する蔑視の感情は深くなった。

「あり合せの白布をあり合せの木枝に結びつけて、降参するために堂々と前進してきたのであろう様さまを想像すると、おかしくもあり哀れでもある」。東は書いた。

よくもまあ、二個聯隊以上もの兵力を有しながら何らの抵抗もなさずに捕虜になったものだとも思い、これだけの兵力には相当な数の将校がいたに違いないが、一名も残らずうまうまと逃げたものだと感心させられる。我々には二個中隊いたが、もし七千の彼らが素手であるとはいえ、決死一番反乱したら二個中隊位の兵力は完全に全滅させられたであろう。

44 東の心は湧き上がるさまざまな感情で一杯になった。中国兵はしきりに渴きを訴え、水を請い、怯えて、殺害されない保証を欲している。東はそんな中国兵が気の毒に感じた。しかし、彼らの臆病さは東をうんざりさせた。彼は、突然、前の戦闘でひそかにはあるが中国兵を恐れていた自分が恥ずかしくなった。そして、無意識的に捕虜たちの人間性を否定し、けだものや昆虫にたとえていた。

……ぞろぞろと蟻のはうように歩き、浮浪者の群のような無知そのものの表情の彼ら。

規律もなく秩序もなく無知な緬羊めんやうのような群は闇から闇へこそとささやきつつ、歩いていく。

この一群の獣が、昨日まで我々に発砲し我々を悩ませていた敵とは思えない。これが敵兵だと信ずることはどうしてもできないようだ。

この無知な奴隷たちを相手に死を期して奮戦したかと思うと全く馬鹿らしくなってくる。しかも彼らの中には十二、三歳の少年さえ交っているではないか。

日本軍は捕虜たちを近くの村に連れて行った。東は、中国人が大きな家屋に入れられるときに、この家の中が「殺りく場」でもあるかのように入るのをためらっていたのを思い出した。しかし、結局はしかたなく門を通つてぞろぞろと入つていった。何人かの中国人が、日本兵が彼らから毛布や布団をむしりとろうとしたときにだけ日本兵と争つた。翌朝、東と彼の同僚は別の地域の巡回を命じられた。彼らが別の地域の巡回についている間に、捕虜たちは各中隊に二、三百人ずつ割り当てられ、殺されたと、東はあとで知らされた。

おそらく、幕府山付近で発生した捕虜の大量処刑は、南京大虐殺で、最も多数の捕虜が一度に殺された事件だろう。この山は南京の北側、市と揚子江南岸の間に横たわっている。ここで、五万七千人の民間人と元兵士が処刑されたと推定される。

虐殺行為は秘密裡に、手順に沿つて進められた。一月一六日、朝日新聞の横田特派員は、烏龍山、幕府山の砲台の近くで一万四、七、七、七人の中国兵が捕虜になり、この捕虜の人数が問題になっていると報

道した。横田は書いている。「何しろ前代未聞の大捕虜軍として捕へた部隊の方が聊か呆れ気味でこちらは比較にならぬ程の少数のため手が廻りきれぬ始末」。

この事件に関する日記やメモを保存していた元日本軍伍長栗原利一によれば、日本軍は何千もの捕虜を武装解除し、着のみ着のままのほかは、毛布以外をすべて没収し、土壁・草屋根の大型バラックのような建物の列に収容した。一二月一七日に日本軍が捕虜の殺害命令を受け取ると、彼らは命令を非常に注意深く実行に移した。その朝、日本人は中国人捕虜を揚子江の中洲の八卦洲に移すと通告した。彼らは捕虜に対し、移動には特別の用心が必要であると説明して、捕虜の腕を後ろ手に縛ったが、この作業を終えるのに午前中いっぱい午後ほとんどが費やされた。

午後四時から六時までの間のいつごろだったろうか、日本人は捕虜たちを四列縦隊に並べて西に向けて行進させ、丘陵を迂回して進んで川岸で停止させた。栗原は書いている。

捕虜の列の先頭が着いてから三時間か四時間たつころ、掃虜たちも矛盾に気付いていた。川中島へこの大群を移送するといつても、それらしい船など見えないし、川岸にそのための準備らしい気配もないまま日が暮れようとしている。それどころか、捕虜が集められた長円形状のかたまりのまわりは、川岸を除いて半円形状に日本軍にかこまれ、たくさんの機関銃も銃口を向けている。

処刑が始まったときは、すでに中国人が逃走するには遅すぎた。「半円形にかこんだ重機関銃・軽機

銃・小銃の列が、川岸の捕虜の大集団に対して一挙に集中銃火をあびせる」。栗原は言う。「一斉射撃の轟音と、集団からわきおこる断末魔の叫びとで、長江の川岸は叫喚地獄・阿鼻地獄であった」。一時間の間、中国人たちは絶望的な抵抗を続け、その後、何の物音も聞こえなくなった。夕方から夜明けまでをかけて、日本人は一人一人の身体を銃剣で突き刺し続けた。

死体の処分は日本人にとって大きな問題となった。幕府山で虐殺された人々は南京市内および南京周辺で死んでいった人々の一部分でしかないのに、そこでの清掃には何日もの日数がかかった。埋葬はひとつの方法だが、中島中将は彼の日記で、「七、八千人」の死体の山を埋めるための十分な壕を見つけるのが難しいとぼやいている。火葬は別の方法だが、しばしば日本軍では作業を適切に遂行するための燃料が不足していた。たとえば、幕府山の虐殺の後に、日本人は大量のドラムカンのガソリンを死体にかけてそれを焼却したが、すべてを灰にする前にドラムカンが尽きてしまった。「焼かれたあとは黒こげの死体の山が残った」。日本軍伍長は書いた。

多くの死体はそのまま揚子江に投げ棄てられた。

### 民間人の殺害

兵士たちが大量に投降した後、都市の市民たちを護るものは何もなくなった。このことを知っていた日本軍は、一九三七年一月二日に南京市内に殺到し、政府の庁舎、銀行および倉庫を占拠し、市街にいる市民に向けて手当たり次第に発砲した。市民の多くは逃げようとして背中を撃たれた。機関銃、拳銃あるいは小銃で、日本兵は中山北路、中央路、あるいは付近の細い道に集まっている負傷兵、老婦



人、子どもたちの人ごみに向けて発砲した。彼らは、都市のいたる所で、小さな路地で、大通りで、ぬかるむ防空壕で、政府の庁舎で、市の広場で中国の民間人を殺害した。被害者が地に倒れ、呻き声をあげ、叫び声を上げると、陥落した都市の道路、路地、あるいは排水溝には、逃げる力もなく辛うじて生きていく人々の血が川のように流れた。

日本人は、南京市内の家々の一軒一軒で中国兵を捜索して、市の住民を組織的に殺害した。しかし、彼らはまた南京の郊外や南京周辺の田園部でも虐殺を行った。城壁の外側に、川に沿って（川は文字通り血で赤く染まった）、池に湖に、そして丘陵の上に死体が積み重なった。南京周辺の農村で、日本軍は通りかかった青年は誰でも、元中国兵である疑いがあるということで射殺した。しかし彼らは、老人や女性のような決して中国兵ではありえない人々でも、日本語による命令、たとえばこちらに移動せよというような命令に従うことを躊躇したり、あるいは単に理解できなかったりした場合に、それらの人々を殺害した。

一二月の下旬には、日本軍のオートバイ部隊が南京市内を巡回し、小銃を担いだ日本軍兵士がすべての街路から路地に至る入り口を警備していた。部隊が一軒ごとを訪れ、門を開いて勝利した軍隊を歓迎するよう要求した。商店の店主たちがこれに従ったところ、その瞬間に日本軍は彼らに向けて発砲した。皇軍はこのようにして何千もの人々を殺害し、商店を組織的に略奪し、もはや不要となったときに放火した。

虐殺行為は、南京にいた多数の日本人従軍記者たちに衝撃を与えた。ある毎日新聞の記者は、恐怖の中で、日本人が中国の捕虜を中山門付近の城壁の上に並ばせて、小銃に固定した銃剣で彼らを突き刺す光景を報告した。「二列にならべられた捕虜が、つきつきに、城外に銃剣で突き落とされている。その多数の日本兵たちは、銃剣をしごき、気合をかけて、城壁の捕虜の胸、腰と突く。血しぶきが宙を飛ぶ。鬼気せまるすさまじい光景である」。記者は書いた。「そこにわたしはまた、わたしを突き殺そうとした兵の、形相とまみえることになり、しばらくその惨劇を見ながら、ぼうぜんと立ちすくんでいた……」。

このような反応を示したのは彼一人ではない。年季の入った従軍記者を含む多くの記者たちが暴力の狂操の前にひるみ、彼らの驚愕によって、さまざまな記録が書き残されたのである。日本軍の従軍記者だった今井正剛は書いた。

とみれば、碼頭一面はまつ黒く折り重なった屍體の山だ。その間をうろろうとうごめく人影が、五十人、百人ばかり、ずるずるとその屍體をひきずつては河の中へ投げ込んでいる。うめき聲、流れる血、けいれんする手足。しかも、パントマイムのような静寂。

對岸がかすかに見えてきた。月夜の泥濘のように碼頭一面がにぶく光っている。血だ。

やがて、作業をおえた「苦力たち」が河岸へ一列にならばされた。ただだつと機關銃の音、のけぞり、ひつくり返り、踊るようにしてその集團は河の中へ落ちて行つた。

終りだ。

下流寄りにゆらゆらと揺れていたポンポン船の上から、水面めがけて機銃弾が走つた。幾條か

のしぶきの列があがつて、消えた。

「約二萬名ぐらい」

と、ある將校はいった。

日本の従軍記者小俣行男は、下関に連れて行かれて川に沿って並ばされた中国人捕虜について書いて書いている。

日本兵は捕虜を一列にならべて首を切った。最初の列の処刑が終ると、次の列を前進させて、死体を揚子江に投げこませて、それから前と同じように一列にならべて処刑した。こうして朝から晩まで、つぎつぎに首をはねたが、一日に二千人しか斬れなかつたという。

——彼らの話はまだつづく。

二日目には手が疲れてきたので、機関銃をかつぎ出した。二台の重機をすえて十字砲火を浴びせた。河岸に向つて一列に並ばせて、ドドドドッと、重機関銃の引き金を引いた。捕虜たちはいっせいに河に向つて逃げだしたが、岸までたどりついたものは一人もいなかったという。

日本の従軍カメラマン河野公輝は、次のように書いている。

南京には一日おくれて入った。モーゼル銃二丁を持ち、支那服を着ていたから、城内で憲兵に

とめられた。飛行機で先に着いていた新聞記者やら従軍作家などが、身分を証明してくれてやつと通ることができた。

揚子江に五〇から一〇〇人ぐらいつつ死体が固まって漂っていた。南京城外の池が真っ赤な血の海で、きれいだつたな。カラーで撮つたらすごかつたろうよ。死体の山はたくさんみだし、その中にもまだ眼をあけて生きているものがいっぱいいたな。その屍の山を兵隊が銃剣で刺してまわっていた。下関がことにごかつた。一面、血の海だつた。

実際に民衆を虐殺しているのをこの眼でみたことはない。しかし、捕虜を殺している現場はみだし、ライカにも撮つた。あの中には民衆もずいぶんいただろう。

野戦郵便局長佐々木元勝は南京で、「私は関東の大震災の時、本所の緑町河岸でたくさんの人が折重なり死んでいるのを見たが、これにくらべればもの数でもない」と書いた。

### 南京における強姦

次に日本人が注意を向けたのは女だつた。

「しかし、女が一番の被害者だつたな」。南京で日本陸軍第一一四師団の兵士だつた田所耕造は回想した。「年寄りからなにか、全部やつちまつた。下関から木炭トラックを部落に乗りつけて、女どもを略奪して兵隊たちに分ける。女一人に兵隊一五人から二〇人くらい受け持たせてね」。

生き残った古参兵たちは、公式には軍中央は敵国の女性を強姦することを禁止していたと主張する。しかし、強姦は日本軍の文化や迷信的な習慣に非常に深く入り込んでいて、誰も制御することはできなかった。多くの兵士は、処女を強姦することにより戦闘における強い力を得ることができると信じていた。兵士たちは強姦の被害者の陰毛で作られたお守りには、負傷から身を護る魔術的な力があると信じ、そのようなものを身につけていたという事実もある。

軍に強姦を禁じる方針があったとしても、それは事が終わった後に兵士たちが被害者を殺害することを勇気づける効果しかなかった。ドキュメンタリー映画 *In the Name of the Emperor* (天皇の名において) でのインタビューで、元日本軍兵士東史郎は、南京における強姦と殺害の過程をあつけらかんと語っている。

はじめ、私たちはピーカンカンというような俗語を使用しました。ピーは「尻」の意味で、カンカンは「見る」という意味です。ピーカンカンは、「脚を開いて性器を見せる」という意味です。中国の女性は下半身の下着をつけない。代わりに紐で締めたズボンをはいている。ベルトはありません。私たちが紐を引っ張ると、尻がむき出しになる。「ピーカンカン」する。そして見る。しばらくして、「今日は風呂に入る日なんだ」というようなことを言い、彼女らを強姦し始める。強姦するだけならばよかったです。そんなことをよかったですというべきではないだろうが。しかし、私たちはいつでも、彼女らを刺し殺した。死体は何も話さないからです。

議論している問題についての無神経さという意味では、田所耕造も東と同じである。「強姦をやらない

兵隊なんかいなかった。そして、たいていやつたあとで殺しちまう」。彼は回想する。「パツと放すとターツと駆けていく。そいつを後ろからパーンと撃つ」。生き残った古参兵によれば、ほとんどの兵士はこのことについての罪の意識を感じていなかったという。「多分、強姦しているときには、相手を女と見ていたのでしょう」。東は書いた。「しかし、相手を殺すときには、豚か何かのようなものとしか考えていなかったのです」。

このような習性は、兵士だけに限られていたわけではない。あらゆる階級の士官たちが、その狂宴に耽つていたのである（第六師団の師団長だった谷寿夫中将でさえも、後に南京での二〇人ほどの女性の強姦容疑で有罪になった）。士官の中には、兵士が市内で輪姦することを奨励するだけではなく、事後に証拠を隠滅するために女性を処分するよう兵士たちに指導する者もいた。「金を払うか、そうでなければ終わつた後でどこか分からぬところで始末をつけてしまえ」。ある士官は部下に語つた。

### 松井石根の到着

殺人と強姦は、一月一七日の朝に、病み上がりの松井石根が、祝勝行進のために市内に入ったときに下火になった。松井は、結核の発作から回復した後、海軍の汽艇で川を遡上し、自動車に乗って南京の東側にある三重のアーチ型の中山門にまで行つた。彼はそこで栗毛の馬に乗り、方向を東京の皇居に向き変えて、日本の国営放送のラジオ会社のために天皇に対する万歳三唱の音頭をとつた。「大元帥陛下万歳！」。その後、彼は注意深く死体が清掃された街路を馬で進み、喝采する数万もの兵士に護られつ

つ、都市の北部にある首都飯店に着いた。そのホテルでは、当日の晩に松井のための宴会が催された。残されている記録によれば、南京で怖しいほどに好ましからざることが起こったのではないかと松井が疑ったのは、この宴会のときのようなものである。その晩、彼は幕僚の会議を開き、不要な部隊は城外に退去するよう命令した。翌日、西側のニュースメディアは、日本陸軍内で松井が南京虐殺の真実を知るところを妨げようとする大きな陰謀が形成されたことを報じた。

松井が南京市内における強姦、殺人、略奪の全体像を認識し始めたとき、彼は狼狽の極地に陥った。一九三七年一月二十八日、彼は民間人の顧問に言った。「しかるに今自分は、夢にさえ考えなかつたもつとも悲しむべき結果をもたらした。中国の友人たちはどんな気持ちでこの南京を立ち退いたことかと思えば、感慨無量である。そして日中両国の前途を考えると胸がいつぱいになって、戦勝の喜びに酔う気持ちにはなれない、実に淋しい思いがする」。彼がその朝に新聞社向けに公式に発表した声明にも、落胆の色合いが見える。

「私は個人的にこの悲劇を民衆に対して残念だと思っている。だがしかし軍隊は中国が悔い改めなければ戦い続けなければならない。いまは、冬であるからして、季節が反省の時を与えてくれている。私は心の底から億万のなんの罪もない民衆に対する同情の意を表するものである」

その日、侵略で死亡した日本兵の埋葬式典を司令部が開催したときに、松井は、士官、連隊司令官、そしてこの都市での狂宴に関係したすべての人たち、およそ三百人に対して譴責の言葉を発した。日本の特派員松本は書いた。「日本の高官が自分の幕僚をどのように叱責したことはなかつた。軍は、松井の振る舞いが信じられなかつた。参列していた幕僚の中には皇族にあたる人もいたのである」。

一二月一九日に、松井は城外にある朝香宮の司令部に移動し、翌日、上海に戻る駆逐艦に乗船した。しかし、そこでも、松井はさらに驚くべき動きをした。彼はニューヨーク・タイムズ紙の記者に悩みを打ち明け、アメリカの外国特派員に「現在の日本の軍隊は、おそらく世界でもっとも軍紀の乱れた軍隊だろう」と語った。さらに、その月に朝香宮の参謀長に手厳しいメッセージを送った。「不法な行動が続いているという噂がある。特に朝香宮がわれわれの指揮官であるからには、軍紀と士気より一層厳格に保たねばならない、不正な行為を働いたものは誰でも嚴重に罰せられなければならない」。

新年を迎えても、松井はまだ南京の日本軍兵士の行動を気に病んでいた。祝賀式典で、彼は日本の外交官に語った。「私の部下たちは大変悪い、きわめて遺憾なことをしでかした」。

しかし、強姦も殺人も続いていた。松井にはそれを止めさせる力がないようだった。後年、松井が語ったことを信じるとすれば、彼の南京の短期訪問も、結局は、松井に同僚の前で涙を流させ、落胆させるだけのものだった。一九四八年、絞首刑を執行される前に、松井は、仏教の老師に告白した。「慰霊祭の直後、私は皆を集めて軍總司令官として泣いて怒った。そのときは朝香宮もおられ、柳川中将も方面軍司令官だったが、折角皇威を輝かしたのに、あの兵の暴行によつて一擧にしてそれを落してしまつた、と。ところが、このことのあとで、みなが笑つた」。

### 従軍「慰安婦」、南京の遺産

南京で発生したとめどのない強姦事件の最も奇怪な結果のひとつは、西欧諸国から殺到する抗議に対して示した日本政府の反応である。無法な行為に責任がある兵士たちを押さえつけもせず、罰すること



もなく、それとは逆に、日本の軍上層部は軍隊用の巨大な地下売春システムの創設を計画した。この組織は、アジア全域にその蜘蛛の巣を張り巡らし、数十万人の女性を犠牲にすることになる。「中支那方面軍は、この前後に慰安施設をつくるように指示しています」。中央大学の著名な歴史学者である吉見義明教授は分析する。「これは、上海戦後から南京戦にかけて、大量の強姦事件が起きたため、中国人や欧米諸国の非難を恐れたからだと推定されます」。

計画は単純明快なものだった。日本軍上層部は、八万人から二〇万人ほどの女性を、騙して、人身売買によって、あるいは誘拐して集めることにより——ほとんどの女性は日本の植民地だった朝鮮から集められたが、中国、台湾、フィリピンあるいはインドネシアからの女性もいた——地方の女性に対する無差別的な強姦を減少させ（その結果として、国際的な批判の機会をも減少させ）、コンドームの使用により性病の蔓延を防ぎ、兵士たちの前線での長期間の戦闘に対する褒美を与えることができるのではないかと期待したのである。もちろん、後に計画が世界に知れたとき、日本の政府は責任を認めることを拒否し、何十年の間、政府ではなく民間の業者が戦時売春宿を経営していたのだと言い張りつづけた。しかし、一九九一年に吉見義明は防衛庁（当時）防衛研究所図書館から「軍慰安所従業婦等募集に関する件」という公文書を掘り起こした。この文書には軍上層部の責任者の印章が押されていて、中国の支配地域での兵士たちの強姦を止めさせるため、早急に「性慰安施設」を建設するよう命令していた。

一九三八年、南京の近くで、最初の公的な慰安所が開店した。この「慰安」という言葉を女性たちや彼女らが住んでいた「家」に関連させて使用するのは馬鹿げたことである。そのような用法により、三味線を弾く美しい芸者が温泉で男たちを洗い、指圧マッサージを施すというような印象が、魔法の呪文

を用いるかのようにかもしだされる。実際には、これらの売春宿の状態は、ほとんどの文明的な人々の想像が及ぶことが到底できないほど、惨めで浅ましいものだった。数知れない女性たち（日本人は彼女らを「公衆便所」と呼んだ）が、運命を知ったときに自ら生命を絶った。他の女性たちは病気になる、あるいは殺害されて生命を失った。生きのびた女性たちも、一生を恥辱と孤独の中で、不妊症になり、あるいは健康を破壊されて、過ぎなければならなかった。大部分の犠牲者たちは女性の貞節を理想とする文化を背負っていたために、生存者のほとんどは、戦後になってもごくごく最近まで、さらなる恥辱と嘲りを被ることを恐れ、自分たちの経験について口を開くことができなかった。アジアの儒教道徳、特に朝鮮の儒教道徳は、女性の純潔を彼女らの生命よりも大事な徳として高く評価し、そのような面目を経験しながら自殺せずに生き続けることができる女は存在自体が社会に対する侮辱であるという観念を保持していた。かくして、何人かの元「慰安婦」が沈黙を破る勇気を獲得し、自分たちの受難に対する日本政府の金銭的な補償を模索することができるようになったときには、半世紀が過ぎ去っていた。

### 南京の背後にある動機

さて、いよいよ最も気がかりで最も困難な疑問を取り上げなければならぬ。それは南京における日本人の心の状態である。小銃と銃剣を握って、そのような暴虐を犯した十代の兵士たちの心の内側はどうなっていたのだろうか。

多数の学者はこの疑問と格闘し、そしてその解答を得ることはほとんど不可能だと感じるにいたる。

妻ハルコ・タヤ・クックとの共著で *Japan at War: An Oral History* を書いたテオドール・クックは、南京

大虐殺における残忍な蛮行に困惑せざるを得ないことを認める。彼は日本の内戦において、これに匹敵するものを見つけない。組織的な破壊と都市住民の大量殺戮は、日本の歴史というよりも、むしろモンゴルのその一部のように見える。南京の日本人の心の成り立ちを検証しようと試みることは、「ブラックホール」を覗くようなものだと言った。

多くの人は、日本人の南京での蛮行を、日本人の名高い絶妙の丁寧さや行儀の良さと調和させることができない。しかし、一部の軍事専門家たちは別々のものに見える二つの性向が、実際にはコインの表裏であると信じている。彼らは、農民が武士の質問に対して丁寧な受け答えができなかった場合には、農民の首を切り落とす権利を何世紀にもわたって持ち続けたかつてのサムライたちの恐ろしい身分を指摘する。「今日まで」アメリカ海軍の情報将校は第二次世界大戦の時期に日本の文化について書いている。「丁寧な回答という表現で日本人が抱く概念は、質問者を満足させるもの、ということだった。行儀の良さが日本人の特徴であることは驚くことなだろうか？」

他の研究者は、日本人の戦時の残虐行為の根源を日本の文化そのものの中に求めている。アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは著書『菊と刀』で、日本社会の道徳律は普遍的ではなく、局所的、特殊であるので、国外に出た場合には簡単に崩壊してしまうと書いている。他の研究者は、キリスト教ではない日本の宗教に問題点を求める。キリスト教はすべての人間が兄弟であるという観念を広めたのに対し、——実際に、すべてのものが神に似せて創造されたとする——日本の神道で神に似せて創造されたと言われるのは天皇とその子孫だけである。このような相違点を指摘しつつ、ある文化は、たとえそれが洗練されているとしても奥底に種族意識が残っており、個人が種族内の他者に対して負う責務と

外部の者に対するそれとは大きく異なっていると結論づけている。

この想定は本質的な危険性をはらんでいる。というのは、この想定は暗黙裡にふたつの考えを導き、またそれを前提にしているからである。そのひとつは、日本人は、彼らの宗教に規定される徳目により、西欧の文化に比べて本来的に人間性を欠いているので、異なる標準をもつて判定されなければならないというもので（無責任で恩着せがましい考え方だと私は思う）、第二のものは、ユダヤ教からキリスト教へと受け継がれてきた文化は、南京大虐殺のような暴虐行為を犯す許容力がいく分でも小さいというのである。敬虔なキリスト教国のドイツにおけるナチズムは、一九三〇年代と一九四〇年代の時期にドイツの精神を非人道化させる道を進み、彼らがドイツの敵と宣言した民族を悪魔にさえ見立てたということも確かな事実である。その結果として起こったのは、人間性に対する、この惑星が経験してきた中でも最悪の犯罪であった。

千年単位の歴史を振り返ってみれば、どのような種族も文化も戦争における残虐性の専有者ではないように見える。文明の表面を被っている外膜は極端に薄いもので、非常に簡単に剥がし去ることができるようである。特に戦時となれば、なおさらである。

それでは、南京市において、来る日、来る日も、来る日も続けられた剥き出しの蛮行を、どのように説明すればいいのだろうか。これらと同類ともいえるナチの構成員のほとんどが、牢獄の中で、あるいは死刑執行者の前で滅び去り、生きていたとしても余生を法からの逃亡者として過ごしているのとは違い、日本の戦争犯罪人の多くは今でも生きていて、日本政府の保護のもとで、安穏な心地よい暮らしを送っている。それゆえに、この惑星において、彼らは、国際法廷の報復を恐れることなく、第二次世界

大戦時の残虐行為を犯したときの考え方や感覚を、筆者やジャーナリストたちに垣間見せてくれることができる数少ない人々なのである。

学ぶべきものがひとつある。日本の兵士は単に中国との戦闘に備えて鍛えられていただけではなかった。彼は中国の戦闘員と非戦闘員を同じように殺害するという作業に備えて鍛えられた。まったくのところで、日本軍では、攻撃してこない人々を殺害することに抵抗する本能を麻痺させるために、さまざまな競技や実習が設けられていたのである。

たとえば、首都南京への途上で、日本兵は殺人競争に参加させられ、それを日本のメディアがスポーツ競技のように熱心に報道した。もともとも有名なのは、一二月七日発行のジャパン・アドヴァタイザー (Japan Advertiser) 紙に「百人斬り競争大接戦中の少尉たち」という見出しで報じられたものである。

向井敏明少尉と野田毅少尉は、ともに句容の片桐部隊所属であるが、日本軍が完全に南京を占領するまでに、自分の剣でどちらが先に百人の中国人を斬り倒すか、という友好試合を行っていた。両少尉は試合の最終局面に入り、首一つの鏝ぜりあいを演じている。日曜日(十二月五日)には、「スコア」は朝日新聞によれば、向井少尉八十九、野田少尉七十八。

一週間後に同紙は、どちらが先に百点を達成したのが判定できなかったもので、目標が百五十に引き上げられたと報じた。「向井の刀は競争で少し刃こぼれした」。ジャパン・アドヴァタイザー紙は報道した。「向井は、この刃こぼれは中国人を鉄兜ごと真二つにした結果であると説明した。試合は『愉快だ』

と彼は言った。

このような残虐行為は南京地区だけに固有のものではなかった。むしろそれは、戦争の全期間を通じ、中国全域で日本人によつて行われていた感性鈍磨の訓練の典型だった。次の、田島という日本の兵士の証言は、特別なものではない。

ある日、小野少尉が言った。「お前たちには人を殺した経験がないはずだから、今日は殺人訓練を実施する。お前らは支那人を人間と思つてはいけない。犬や猫よりも価値のない何かと考へろ。勇氣を出せ！ さあ、殺人訓練を志願するものは前へ出る」。

誰も動かなかつた。少尉は癩癩を起こした。

「臆病者！」彼は怒鳴つた。「お前らの中には一人として日本兵と呼べるものはいない。だから、誰も志願しないのだ。よろしい、俺が命令する」。そして、私たちの名を呼び始めた。「大谷―古河―上野―田島！」（何と、私もだ）

私は震える腕で銃剣を立て、恐怖におびえる中国人のほうにゆっくりと歩いていった。中国人は穴の横に立っていた。その穴は、彼が掘るのを手伝つた墓穴だったのである。私は、心の中で彼に許しを請い、眼を閉じ、少尉の悪態を耳に、石のようにこわばつた中国人に銃剣を突き出した。再び眼を開いたとき、彼は穴の中に落ちていた。「人殺し！ 犯罪者！」私は自分に言った。

新兵にとって、恐怖は自然な衝動だった。ある日本人の戦争の回想記には、若々しい新兵の集団が、

経験をつんだ古参兵によって民間人の集団が拷問され死んでいくのを目撃したときに、ショックを隠せなかった状態が描写されている。彼らの司令官はこの反応を予期していて、日記に書いている。

「新兵はみなこんなものだが、彼らはすぐに自分で同じ事をするようになるだろう」

ところが、感性の鈍磨は新人の士官にも必要なことだった。富永正三という名前の古参士官は、彼自身が罪のない若者から殺人機械へと変貌していった過程を生々しく回想した。広島第三九師団歩兵第二三二連隊に配属されたとき、富永は軍事学校を出た見習い士官の少尉だった。自分の配下の兵士たちを紹介されたとき、富永は驚いた。「彼らの眼は殺気を帯びていた」。富永は思い出した。「それは人間の眼ではなく、豹や虎の眼だった」。

前線で、富永は他の新人見習い士官たちとともに戦争への耐久力を強化する烈しい訓練を受けた。訓練のプログラムで、教官が捕虜を閉じ込める部屋のやせ細った中国人を指して、士官たちに言った。「これが君らの腕試しの材料だ」。毎日、毎日、教官は首を斬り落とす方法と生きた捕虜に銃剣を突き刺す方法を教えた。

最後の日に私たちは試験会場に連れて行かれた。二十四名の捕虜が、後手に縛られてうずくまっていた。彼らは目隠しをされていた。横十メートル、幅二メートル、深さ三メートル以上の大穴が掘られていた。連隊長、大隊長、中隊長が、準備された席に座っていた。田中少尉が連隊長に一礼し、「ただいまから始めます」と報告した、使役兵に命じて捕虜の一人を穴の縁に引き立てさせ、抵抗するのを蹴飛ばし、引きずるようにして穴の前に引き据えた。田中は私たちの顔を見廻

し、「人間の首はこのようにして斬るんだ」といいはなつや、サツと軍刀のさやを払い、用意してあつた水桶から杓子で水を汲み、それを刀身の両側にかける。それから右手で軍刀を一振りして水をきり、捕虜の背後に両脚を開いて立ち、腰を落とし、軍刀を右上段に構えた。「エイ！」という気合もろとも目にも止まらぬ早業で、軍刀は振り下ろされた。首は一メートル以上も飛び、左右の頸動脈から噴水のように二本の血柱が立ち、胴体は穴の中へ転げ落ちた。

私たちはあまりにも凄惨な情景に呼吸も止まる思いだった。

しかし、富永正三は徐々に殺人を学んでいった。そして、それに熟達するにしたがつて、彼は配下の兵士たちの眼が恐ろしいとは感じなくなった。彼にとって、残虐行為は日常茶飯事になり、ほとんど陳腐なものになった。自らの経験を思い起こして、彼は書いている。「私たちは彼らをこういうふうにした。家庭での善良な息子たち、善良な父親たち、善良な兄たちが、前線に連れてこられて互いに殺しあつた。人間が悪魔に変身した。誰でも、三ヶ月で悪魔になる」。

天皇の前では、自分自身を含む、すべての個人の生命が無価値だと教えられていたので、日本兵は簡単に殺すことができたのだと認める元日本兵がいる。南京での一連の虐殺行為を証言した東史郎は、著者への手紙の中で彼の戦友たちの習性に関する優れた視点を提供している。京都府の福知山歩兵第二十連隊での二年間の軍事訓練の間、彼は「忠節は泰山よりも重く、私たちの人生は鴻毛よりも軽い」と教えられた。彼は、兵士が戦争で達成することができると最高のものである名譽は、戦死して戻ることだったと回想し



た。天皇のために死ぬことは最大の榮譽であり、生きて敵の捕虜になることは最大の恥辱である。「もし私の生命が重要でないのならば」、手紙の中で東は書いている。「敵の生命は必然的にもっと重要でないものになります。……この哲学が私たちに敵を見下させ、結果として捕虜の大量殺害や虐待へと導いたのです」。

インタビューを重ねるごとに、南京大虐殺から戻った元日本兵たちは、自分たちが良心の呵責や罪の意識をまったく感じていなかったし、不幸な民間人を拷問するときにさえもそうだったという経験を正直に報告する。永富博道は、陥落した首都、南京における彼の感動について、率直に語った。

私は、殺戮された何千の死体の山の間を通過してトラックで移動していたことを思い出す。私たちが停止し捕虜の集団を後ろから引き立てていると、野犬が死体の肉を食いちぎっていた。そのとき、将校が私たちの肝試しをした。彼は刀を抜いて手で叩いたと思うと、突然、私たちの前で縮こまっていた中国人の少年の首に、強く振り下ろした。首は見事に切り落され、捕虜の集団の間を転がり、胴体は前のめりに倒れて、首から二筋の噴水のように血がほとばしり流れた。将校は私に、首を記念品として家に持ち帰ったらどうかと勧めた。私は誇らしげに微笑んで、彼の刀を取って人々を殺し始めたことを覚えている。

六〇年間の魂の葛藤を経て、永富は別の人間になっている。鍼灸治療院を開業し、彼はその待合室に自責の聖堂を建てた。患者は南京における彼の裁判と彼が犯罪を完全に告白しているビデオテープを観

ることが出来る。治療師の温和で丁寧な物腰とは裏腹の彼の恐ろしい過去。彼がかつて残忍な殺人鬼だったことを想像することはほとんど不可能である。

「兵士たちが銃剣で乳児を突き刺し、生きたまま熱湯の鍋の中に放り込んだことを知っている人はほとんどいません」。永富は言った。「彼らは十二歳から八十歳までの女性を輪姦し、性欲を満たすことができなくなつたときに殺しました。私は首を切り、餓死させ、焼き殺し、生き埋めにして、二百人以上の人々を殺しました。私がけだものに変身してそのようなことをすることができたのは恐ろしいことです。私がしてきたことについては言葉ありません。本当に私は悪魔でした」。

南京は、中国の文学、芸術および政治の最高の中心地として長い間称賛されてきた都市である。南京は三世紀から六世紀にかけて古代中国の首都の役割を担い、その後、間をおいて一四世紀にも首都に指定された。中国の書道と絵画の規範が成立し、中国語の言語における四声の体系が確立し、最も有名な仏教経典が編集され翻訳され、古典的な「六朝」随筆形式（中国の詩と散文の混合）が生まれたのが南京である。一八四二年には、南京で、阿片戦争を終結させ、中国を海外貿易に開放させた条約が締結された。そして、一九一一年に国民党の指導者孫文が黎明期の中華民国の初代臨時大總統に就任した地が南京である。今日、彼が葬られている中山陵は南京の誇りである。

中国人に向かって南京の名を言うと、彼（女）は古代の皇宮、多数の陵墓、博物館、記念堂に埋まった都市の絵を描くだろう。その絵には、明代に造られた武将と動物の複雑な石像、有名な鼓楼（七〇〇年前にマルコポーロが当初の建物を見たが、その三世紀後に軍事指導者によつて建て直され、兵士たちに信号を送るために塔の上で巨大な太鼓が打ち鳴らされた）、そして南京郊外の情景——丘陵の付近に据えられた寺院、茶館とその湖の表面の蓮の花、揚子江に架かる頑丈な橋——が含まれるだろう。

幾世紀の間、水と山は南京に美しさを与えてきた。ただでなく、軍事的な保護をも提供してきた。西の揚子江と東の紫禁山によって囲まれているこの都市の自然の防御能力は、「虎踞龍蟠（虎がうづくまり、龍がとぐろを巻く）」という故事成語を借りて言い表すことができる。

しかし、悲しいことに南京は三度の侵略を被った都市である。

最初に侵略されたのは千年以上も前の六世紀末で、このときには野蛮な遊牧民族が市内の重要な建築物をすべて破壊し、城壁の内側の土地さえもが掘り返された。二度目の侵略はそれから千年以上も後の時代、一八五三年から一八六四年の期間に、太平天国の反乱軍がこの都市を手中に収めたときだった。反乱軍は狂信的な洪秀全に指導されていた。彼は国家のエリート官吏への進路を保証する科擧の受験に失敗した後に、自分がイエス・キリストの弟だと確信するに至った。それから、彼が先頭に立って追求した清朝転覆の運動は一三年間以上継続して、結果的には二千万人も中国人を殺すことになった。反乱軍は、完全に鎮圧され滅亡するまでの一〇年間以上にわたり南京を首都にしていたが、彼らが最終的に鎮圧されたときに南京は煙でくすんだ廃墟になり、あの大報恩寺瑠璃塔までもが破壊されてしまった。極彩色の瑠璃磚で作られたこの塔は、中国にあったこの種の建造物の中で最も美しいものだったと考えられている。

その日以降、一九世紀の残りの日々の間、南京は平穏と隠遁の中でまどろんでいた。満洲族の皇帝が北方の都市、北京からの中国統治を再開したときに、南京は文化的な遺跡以上のものではなくなった。南京がその重心としての地位を取り戻したのは国民党が清朝を覆し、南京を中国の首都に指定したときだった。南京は一九二八年に公式に首都になった。

大虐殺の年の一九三七年には、古い南京、清朝の南京と、国民党の新しい南京とが競合していた。街路には古い南京の痕跡が残っていた。飲食店の行商人の天秤棒の両側には小さなどんぶりとお茶のポットの籠がさがり、露天の紡績工場では手織職人が絹の機織に身をかがめ、そば屋の職人は手作業で小麦粉を引き伸ばして麺を打ち、街路を歩く板金屋の錫製品がジャラジャラと音を立てた。靴の修理屋は客の家の門前で靴を繕い、真ん中に四角い穴のあいた銅貨を握り締めて熱心に見つめる子どもたちの目の前で、鉛屋が鉛を作った。キーキーと音を立てる手押し車を押す男は、アシをとでも高く積み上げていたので、手押し車も男も見えなくなつた。それでも、至る所に新しい南京が顔を見せていた——少しづつ土と砂利の小道に置き換わつてきたアスファルトの道路に、点滅するガス灯、蝋燭、石油ランプに完全に入れ替わつた電気とネオンの明かりの中に、通りで水売りから買うのではなく、蛇口から流れ出す水の中に。軍高官、官僚、外国の外交官たちが一杯に乗り込んだバスや自動車は、人力車、野菜を積んでラバに引かせる荷車、あるいはぶらぶらと歩いている大勢の通行人や動物たち、犬、馬、ロバ、時には水牛や駱駝の歩く間を追い越し、縫うように走っていた。

しかし、古い南京の一部分はけつして変わることがないかのようだった。都市の周囲は明朝の時代に建設された古い広大な石の城壁に囲まれていた。ある宣教師は、この城壁を世界最大の不思議のひとつだと言つた。彼は強調する。もし誰かがその頂上に登ることを許されたら、間違いなくその人物は中国で最も壮大な光景を眺めることができるだろう。都市の南端の壁の頂上から、銃眼の埋まる胸壁を超えて、労働者階級の居住地区の塵にくすむ灰色の煉瓦、富裕な人々の家の屋根の赤と青の瓦を見ることができ、北を望めば、政府の地区の近代的な高層建築、西洋の建築様式で建てられた行政府や大使館を見

ることができるだろう。

北東方向を凝視してみよう。暗い紫禁山一帯に南京のもつとも富裕で有力な市民たちが所有する別荘が点在する中、柔和に煌く白い孫文の靈廟を見つけることができるだろう。次に、北西を向けば、河岸地区の産業活動が垣間見られる。工場から立ち昇る幾筋かの煙、煤炭港の真つ黒な染み、埠頭の近くに浮かぶ蒸気船と砲艦、市内を横切る北中国鉄道と京滬鉄道の線路と地平線は、南京北部の郊外である下関の駅で交わっている。地平線に沿って、南京の城壁の向こう側には、西から北に湾曲して轟々と流れる巨大な揚子江のカーキ色の水が見えるかもしれない。

一九三七年の夏、このように光輝にあふれながらも、不揃いな南京のすべてが、毛布の下で横たわって眠っているかのようにだった。高い湿度のよどんだ空気のため、この都市に「中国の籠」のひとつという称号が贈られてから久しかった。付近の田畑の夜の土壌の刺激臭と混じりあう暑さは、夏の猛暑の時期に、富裕な人々を海岸沿いの避暑地に追いやった。残った人々にとって、夏は、頻繁なうたたねの、葦や竹の団扇で起こすけだるい風の季節、太陽をさえぎって陰を作る竹のすだれに覆われた家々の季節だった。晩になると、カマドになった家から、椅子を引き摺って逃れ出た隣人たちが、夜更けまで世間話に興じ、外気の中で眠りについた。

数ヶ月のうちに、戦争が彼らの家々の前にまで襲来し、家屋が炎に包まれ、街路に血が溢れることになることを、誰が予測できたのだろうか。

八月一五日、金陵学院の心理学の教員だった張小松が金切り声のようなサイレンの音を聞いたのは、

ちようどベッドに横たわつてまどろんだときだった。「空襲の避難訓練があつたのかしら」。彼女は考えた。「どうして朝の新聞に発表がなかつたのかしら」。

その月の初めに上海で日本軍と中国軍の戦いが勃発したため、南京の政府が、他の地区も同じように敵の攻撃にさらされる可能性を覚悟し、それに備えざるを得なくなつたとき、中国の政府当局は空襲に対する訓練を実施しただけではなく、居住民に対して家にカモフラージュを施し、防空壕を掘るよう命令した。南京の至る所で、人々が家の赤い屋根と白い壁を黒く塗装し、庭に避難用の防空壕を掘つた。それはまるで、この都市が「大規模な葬式」に備えているかのようなようだった。張は思い出しながら怯えた。

だから、八月一五日に、張が二度目の警報を聞いたとき、彼女は起き上がつて確認しようとした。しかし、家にいた彼女の友人たちが、あれは別の訓練だと言ひ聞かせたので、彼女は再びベッドに戻つた。しばらくして、ごろごろつという鈍い機関砲のような音を聞くと、彼女はまた起き上がった。「あら、あれは雷だわ」。一人の友人が言つて、小説を読み続けた。彼女は大げさに興奮したことを恥じてベッドに戻つた。しかし、それから彼女の耳に響いてきたのは、聞き間違える余地のない機関銃の砲火の音と頭上の飛行機の音だった。南京は史上初めての空襲を経験したのである。

その後の数ヶ月間、南京は日本の爆撃機の空襲を何十回と受け、居住者は地下室や、濠や、庭の防空壕に隠れなければならなかつた。日本軍の飛行士は都市を無差別に爆撃し、学校、病院、発電所、政府庁舎を攻撃し、何千もの人々が富めるものも貧しいものも都市を捨てて避難することになった。

現在はサンフランシスコで東洋医学の開業医になつてゐるフランク邢シは、一九三七年の夏に両親とともに南京を後にしたときの、熱に浮かされたような悪夢のような状況を思い出す。当時、一一歳の少年

だった彼は、旅立ちに備え彼の宝物のパチンコとビー玉を荷造りしていた。そのとき、彼の祖母は鉄道機械工だった彼の祖父に、将来の緊急時に備えて質入する翡翠と銀の腕輪を渡していた。彼の家族を漢口に運んだ汽車はすし詰め状態になっていて、座席を求められなかった何百人もの避難民が客車の屋根の上に座り、文字通り座る場所を得られなかったほかの人々は列車の下にぶらさがった。彼らの身体は、軌道のわずか数インチ（十数センチメートル——訳者）上に吊りさがっていた。避難の旅の間、シ刑は人々が汽車から振り落されたとか、車輪の下に巻き込まれたというような噂話を聞いた。刑自身も、日本の爆撃機に攻撃され、彼の家族が列車から飛び降りて共同墓地に隠れなければならなかったときには、危うく命を落とすところだった。

私の祖父も、南京から疎開するときに、いま一步で永遠に離れ離れになるところだった。私の祖父、チャンティエチン張鉄君は詩人でジャーナリストでもあり、一九三七年当時は国民党職員の哲学の指導教官として、中

国政府に勤務していた。首都に対する日本軍の爆撃のために、彼と彼の家族は何度も、木製の板と砂袋に覆われた壕に隠れなければならなかった。一〇月になって、祖父は私の祖母（当時二〇代前半の妊婦だった）と伯母（当時一歳の子どもだった）が南京にとどまることは危険だと判断した。二人は、祖母の実家の村へ帰った。実家は、上海と南京の間の太湖の湖岸にある宜興市周辺の農村部にあった。

一月の孫文の生誕記念日に、祖父は南京を離れて妻と家族に会いに行つた。数日後に南京に戻ると、彼の所属する作業グループの全員が、市から疎開するために忙しげに荷造りをしていて、グループの開のために揚子江岸の都市無湖ウイから船が用意されていることを聞いた祖父は、その場所ですぐに落ち合おうと家族に使いを送った。



ことは思い通りには運ばなかった。祖母の村から無湖市ウイハイまでの鉄道は、日本軍の空爆によってほとんど破壊されていた。唯一の手段は、この地域全般を網の目状に複雑に連絡している水路を、サンパンという小船で移動することだった。

長い四日の間、祖父は不安に襲われながら、埠頭で後から後から乗船していく戦争の避難民を探し続けた。四日目になっても、彼の家族はまだ到着せず、彼は誰も経験したことのない選択をしなければならなくなった。彼の妻と娘が南京へ向かつていないと信じて、次の、無湖発最終便に乗船するか、残るべきか。しかし、市が間もなく侵略者の手に落ちることは火を見るよりも明らかだった。

絶望の中で、彼は天に向かって、愛する人の名前を叫んだ。「以白イバイ!」。そのとき、彼は遠くのほうから、こだまのような返事を聞いた。その声は、ずっと離れた向う側から埠頭に近づいてくる最後のサンパンから聞こえてきた。小さなサンパンは、彼の妻と娘と何人かの親戚を運んできた。彼らの再会は奇跡だったと、私の母はいつも言っている。

私の祖父母とは異なり、南京の多くの住民は一月の後半になっても市内に残っていた。あるものは待機して様子を見ようとしていた。残っていた他のものはあまりにも貧しいか、あまりにも年をとりすぎていて、別の方法を実行することができなかった。そのような人々には、一月は悪いニュースが伝わり続けた月だった。上海での戦闘はうまくいっていなかった。中国兵の長い列が、疲れきり、傷つき、士気をくじかれ、重苦しい沈黙の中で行進し、あるいは赤十字の旗で覆われた大きなトラックに乗り、前線から帰ってきた。彼らの多くはまだ少年で、一二歳にもならない子どももいた。重武装した新しい

部隊が河岸に向かって街路を行進し、前線に曳航されていくジャンクに乗り込んでいく事実には、慰めを感じることが出来る人もいた。明らかに、戦いはまだ終わっていないかった。雨と吹き荒ぶ風を切つて、小型の近代的な中国軍の戦車がゴロゴロとカタピラの音を立てて上海に向かつていた。その前には、木綿の軍服、毛布、小銃、機関銃を重たげに運ぶラバの列が進んでいた。

その月の下旬に、恐ろしいニュースがとうとう南京に伝わってきた。上海が、「中国のニューヨーク市」が、陥落した。いまや、海と首都南京の間には二〇万以上の日本軍がいて、七〇万ほどの中国軍が退却の途上にあつた。彼らが持つてきたのは誰も聞きたくないニュースだつた。上海を滅した日本軍は、いま、その矛先を南京に向けている。

上海の陥落は国民党の指導者蒋介石にとって手痛い打撃だつた。中国最大の国際都市の喪失に直面し、蔣は困難なジレンマの解決を求めた。南京を日本軍から防衛するか、首都全体を安全な地域に移すか。最終的に、総統は両方を選択した。しかし、彼自身が南京に残つて南京を防衛するのではなく、その重荷を別の人に負わせた。唐生智という部下に。

蔣と唐生智の関係は奇妙で非常に複雑なものだつた。どちらも実際には相手を信頼していなかつた。事実、二人の男はときには協力者で、ときにはライバルだつた。たとえば、国民党が国家統一をめざした北伐の時期には、唐は北方の封建軍閥に対する蔣の戦争遂行を支援した。しかし、唐が蔣に対する特別な忠誠を示すことはなく、二人の男の間の権力闘争により、唐は二度中国から追放された。一度目は香港へ、次には日本へ。だが、一九三二年に、「満州」をめぐる中国と日本の関係が危機的な状況に

なつたときに、蔣は唐を召喚し、唐は中国の防衛力を強化する任務に戻つた。唐は中国軍の位階をすばやく駆け上がり、一九三七年には蔣政権の軍事訓練の責任者になつてゐた。

一九三七年十一月、首都を防衛するか放棄するかという問題について何度か持たれた軍上層部の会議で、蔣の幕僚のうち強力な防衛を支持する意見を述べたのは、実質的に唐一人だつた。彼は主張した。南京を防衛することにより、中国軍は同時に日本軍の進攻を遅らせることができ、残りの中国軍に休養と再編成の機会を確保することができる。

しかし、誰が残つて防衛を指揮するのかと蔣が聞いたときに、唐は他の高官たちとともに黙り込んだ。唐に向かつて、蔣は最後の言葉を放つた。「私が残るか、君が残るかだ」。彼の強い視線を感じた唐は、疑いもなく他の選択肢のないことを悟つたのだらう。「どうして総統を残すことができるでしょうか？」唐は言つた。彼は南京に残り、死を賭して戦うことを約束した。

南京の防衛を唐に託する決定は大ニュースになつた。十一月二七日に、唐は士気を鼓舞するために記者会見を行った。記者たちの前で、彼は激しい演説をした。南京と生死を共にすることを誓う。彼の演説は非常に情熱的だったので、それが終わつたときに記者たちは彼を大いに喝采した。

しかし、記者の中には唐がひどく動揺しているようにも見えたことに気づいた者もいた。事実、彼は大病から癒えたばかりだつたし、ある外国特派員によれば、彼は「朦朧としてゐるか、あるいは薬が効いてゐる」ように見えたという。彼はひどく発汗し、誰かが渡したタオルで額の汗をぬぐつてゐた。

おそらく蔣は、歴戦の日本軍を前にした彼の部下がまともに戦いの体をなすことができないことを

知っていて、中国が実際に強固な防衛を行うことを誇示するためにだけ彼を指名したのでらう。あるいは、彼は二番目の計画の準備が必要だと留意していたのであろう。明らかなのは、一月の後半には、二番目の計画が確かに実施され進行していたことである。まず、蔣はほとんどの政府職員に、南京の西にある三つの都市、つまり長沙、漢口、および重慶に移動するよう命令した。後に残された少数の職員の間には、自分たちは捨てられて日本軍の手に委ねられたのだという噂が流れた。数日のうちに、荷物を満載した公用車と見られる自動車が街路を埋め尽くし、素早く、いずこへともなく消えていった。バスと人力車も政府庁舎から出発して去っていき、市には公共の移動手段がなくなった。間もなく、ほとんどのトラックが去っていった。もっぱら農村から南京へ米を輸送するために使用されていたトラックさえも同様だった。そして、一月の中旬に、去っていった政府職員と入れ替わって五万の中国軍が到着した。上流の港から到着した彼らは、まず、河岸に多数の武器の箱を積み下ろし、それぞれに空になった政府庁舎の建物を選んで占領した。二月までに、九万の中国軍が南京地区に集結したと推定される。軍隊は南京の姿を変貌させた。中国兵は街路に塹壕を掘り、地下に電話線を埋め、市の交差点に鉄条網を張った。交差点は戦場のようになった。また、軍隊は城壁を強化し、古代の胸壁に沿って機関銃の台を設置した。彼らは三つの城門に、軍関係の通行専用の狭い通路を残して、ほかのすべての城門を閉じた。城門は二〇フィート（約六メートル）の深さの土嚢で封鎖され、木材とL字型の鉄材で補強された。少なくとも城門のひとつは、全体がコンクリートで固められた。

二月の初めに、軍は、代価も影響も省みず、城門周辺一マイル（約一・六キロメートル）以内の戦場となる地域を焼き払うことにした。代価は計りしれなかった。市の外縁に沿って、炎がガソリンを、

弾薬を、兵舎を、農業試験研究所を、警察訓練学校を、そして陵墓公園の建物をなめていった。周辺地域で、兵士たちは、わらの小屋、わら葺き屋根の農家、樹木に、竹林、そして下生えの灌木に火をつけた。南京の主要な郊外地区も例外ではなかった。軍は、下関と南門周辺を灰にする前に、その地域の住民を城内に追い込んだ。家を破壊目標にされた人たちは、一時間以内に移動しなければスパイとして逮捕される危険があると通告された。軍は、侵略者が使用する可能性の残る構築物を取り除くための戦略的措置であると言つて焼却行為を正当化した。しかし、ある外国特派員は、焼け焦げた壁でも、完全な建物と同程度に、銃弾からの防護物として日本軍が使用できると指摘した。彼は推測した。実際のところ、火は中国人の「憤怒と苛立ちのはけ口」なのだ。日本人には焼け焦げた大地以上のものを残したくないという熱望なのだ。

このようにして、都市は侵略に備えた。体力、判断力、あるいは撤退の機会のあるものはすべて、人も物も避難し始めた。博物館は完全に梱包され、運び去られた。一月二日、故宮博物館の財宝——實質的に中国の文化遺産のすべてである——を梱包した幾百もの箱が船に積み込まれ市外の安全な保管場所に向かった。六日後の一月八日、蒋介石、彼の妻、そして彼の顧問が飛行機で市から逃げ去った。もはや、疑う余地はなかった。日本軍の南京攻略が始まるうとしていたのである。

南京大虐殺の数十年來の謎は、一九三七年一月二日に、あれほど多数の兵士がいながら、わずかに四日間で南京市はどういうふうな陥落したのかということである。いづれにしろ、軍隊は五ヶ月間を十分に持ちこたえられる弾薬を持っていた。その結果、生き残った人々、ジャーナリスト、歴史家の多く

は、崩壊の原因を中国兵の気力の喪失に帰してきた。また、彼らは最も必要なときに軍を見捨てた唐生智に悪人の汚名を着せてきた。

新しい資料に基づいて歴史を見直してみると、これとは幾分異なる図が現われてくる。上海の戦闘の間、ほぼ三千の戦闘機を有する日本の空軍に比べ、三〇〇機の小さな中国空軍は幼児のように見えた。それ以外の点でも、中国人は空中において日本人の敵ではなかった。上海戦において、イタリア人に訓練された中国軍飛行士は、都市に大きな災害をもたらした。西欧の艦船の近くや、国際地区の混み合う街路や建物にまでも爆弾を落とした。

しかし、どんなにひどい空軍でも、空軍がないよりはましである。そして、それが唐生智にゆだねられた状態だった。一月八日、蒋介石と彼の顧問たちが市を去ったその日に、中国の空軍部隊もすべて去っていった。その後の四日間、唐は、航空機を使用して収集する、日本軍の部隊配置や移動に関する軍事情報を全く得られない中で戦った。南京周辺の丘陵に高価な中国の砲台を配備しても、威力を発揮できなかった。

第二に、重慶に移動した政府職員は高性能の通信機器のほとんどを持ち去った。その結果、軍の一部隊から他の部隊への連絡ができなくなった。

第三に、兵士たちは同じ地域の出身ではなかったので、文字通り互いに会話をすることにも困難が生じた。南京のある医療補助員は回想する。中国人軍医が広東語を話し、中国人兵士は北京官話を話すという状況下で、病院内では際限のない混乱が続いていた。

第四に、この軍隊の「兵士たち」の多くは、周辺地区から自分の意思に反して、誘拐され、または徴

兵されて、突然、軍隊に入れられ兵士になった人たちだった。大多数の人々は南京の前に銃を手にしたこともなかった。銃弾が不足していたために、これら新兵たちに射撃を教えるために無駄にすることはできなかった。戦闘経験のある兵士の多くは、上海から引き上げてきたばかりだった。疲労し、飢え、さらに病に冒され、彼らのほとんどは消耗しきっていて都市の防衛のためにバリケードを構築し、塹壕を掘るといふ必要な準備作業を完成させることができなかった。

何よりも最悪だったのは、中国軍兵士には連帯感や目的意識の自覚がほとんどなかったことである。ある中国軍将校は、南京の戦況報告の中で、部隊がある地域を占領すると兵士たちは遊休状態になり、他の部隊が近くで日本軍との戦闘を行っていても、率先して支援しようとしなかったと指摘している。明らかに、指揮将校もそれ以上のものではなかった。報告者は分析する。彼らは互いに信頼せず、このために日本軍は地域から地域へ移動し、中国軍を各個撃破していくことができた。

一二月九日に南京周辺で、日本軍の航空機が、日本軍の三人の大将の一人である松井石根が執筆したちらしを投下し始めた。ちらしの文面は、「無辜の民衆」と市の「古蹟、名勝」を護る最良の方法は、降伏することだという。文面によれば、日本軍は「抵抗者に対しては極めて峻烈にして寛恕せざるも、無辜の民衆および敵意なき中国軍隊に対しては寛大をもつてし、これを犯さず」と約束していた。それは二四時間以内、翌日の正午までに市が降伏することを要求し、「交戦を継続せんとするならば、南京は勢ひ必ずや戦禍を免れ難し」としていた。

公式には、唐は最後通牒の言葉に激怒した。ちらしを床に投げ棄て、彼は二つの命令を口述し、命令

は各部隊に配布された。第一の命令は軍の退却を禁止していた。「我が軍は前線で寸土も譲らずに戦わなければならぬ」。命令書は言う。「この命令に従わずに退却するものがいれば、厳しく罰せられるだろう」。第二の命令は、軍が船を使用して、私的に揚子江を渡ることを禁止していた。軍部隊で保有している船は、輸送部門に返還するように要求される。唐は第七十八軍を輸送問題の指示および管理を担当する部隊に指名し、軍の人員が私的に船を使用していることが発覚したら罰せられると警告した。

しかし、非公式には、唐は休戦交渉を模索していた。最後の一人まで戦うという最初の約束にもかかわらず、彼は市内での対決を回避する方策を熱心に求めているように見えた。彼のこの姿勢を支えているのは、少数のアメリカ人とヨーロッパ人がまだ市内にいたことだった。この私心のない人たちは、自分たちができることをするために南京に残ることを決め、南京安全区国際委員会を創設した。彼らについては、後の章で詳しく述べることになる。彼らが最初に行った措置のひとつは、市の一定の区域を遮断して南京安全区または国際安全区として宣言し、その二・五平方マイル（約六・四平方キロメートル）——訳者——の区域内の人間に対しては、中国人でも非中国人でも、日本軍は手出しをしないという状態を保障しようとしたことだった。次に、生命を救うための最終的な活動の中で、彼らは日本軍との停戦の調停を試みようとして申し出た。彼らの案は、三日間の休戦協定を結び、その間、日本軍は現在の位置に止まり、中国軍が市外に撤退する中で、南京に無血入城することができるというものだった。唐は停戦調停に同意し、委員会に、アメリカ大使館経由で、彼から蒋介石への伝言を発信することを依頼した。この案はアメリカの砲艦パネー号のラジオから総統に伝送された。蔣は即座にこれを拒否した。

一二月一〇日、日本軍は都市の降伏を待った。正午、二人の日本軍参謀将校が東側の城壁の中山門で、



中国政府が停戦の白旗を掲げた使者を派遣するかどうかを確認した。使者が来なかつたとき、日本軍の上級司令部は市のすさまじい爆撃を命令した。

数日の間、中国軍と日本軍の間の南京をめぐる激しい戦闘が続いた。日本軍は市に爆弾を投下し、重砲火で城壁を打ち砕いた。後に唐は、蒋宛の長いとりとめのない絶望的な電報を公開して、市の重要拠点や城門付近の容易ならざる戦況を明らかにした。

一二月九日から一二月一日まで、日本軍は光華門の突破を三度試みた。一度目は、教導総隊が抵抗を試み、第一五六師が痛烈に反撃して、多数の敵を殺害し、城門を確保した。一日の正午より、雨花台地区から不利な通知が頻繁に伝えられ、安徳門、風台門が敵の手に落ち、即座に第八八軍に戦線を縮小し、第七四軍と第七一軍と合流することを命じ、急ぎ、第一五六師を救援に向かわせた。

しかし、もつと悪いニュースが唐を待っていた。そして、今回の悪いニュースは敵の成功によるものではなく、蒋自身の側から届けられたものだった。一二月一日正午、唐の本部に顧祝同將軍からの電話が入った。顧は唐配下の軍団の全面退却を命じ、これは蒋からの直接の指示であると通告した。唐自身は、川の対岸にあり、渡河船と鉄道の終点である浦口に直行すると、待機している別の將軍が彼を安全な場所に移動させるということだった。

唐の表情に衝撃が走った。自分の軍団を見捨てるという、およそ指導者として不名誉な選択を要請されている事実はおくとして、彼は別の非常に深刻な問題を抱えていた。その時点で、彼の軍は、苛烈な

戦闘の最中にいた。彼は顧に、日本軍がすでに前線に突入していて、退却命令の実行は不可能であると説明した。それは実際には潰走に転じることになる。

顧は言った。「それについて憂慮する余裕はない。とにかく、貴殿は今夜中に退却しなければならない」。突然かつ性急な退却がもたらすと思われる結果について唐が再度説明すると、顧は、蔣が個人的に唐に「今夜中に渡河する」よう命令していることを思い出させた。必要ならば部下を残して状況に対処させろ。しかし「貴殿は今夜中に川を渡らなければならない」。顧は繰り返した。

不可能だ。唐は言った。どんなに急いでも、揚子江を渡ることができないのは明日の夜になる。顧は、敵との状況が切迫した事態に発展しているので、可能な限り早く市を離れるよう警告した。

その日の午後、唐は命令を促す蔣の電報を受け取った。「唐司令長官、戦況を維持できないのならば、将来の反攻に備えて、「軍を」保存し、再編成するために、退却の機会をつかむべきである。介。十一日」。その日のうちに、窮迫する唐のもとへ、蔣からの二二通目の電報が届き、再び退却を迫った。戦線を維持できず、圧力をかけられ、唐は従うことにした。それは中国の軍事史上最悪の結果のひとつをもたらすことになる決定だった。

一二日午前三時、唐は自宅で未明の会合をもった。副司令長官と最上級参謀の集合した中、彼は悲痛な表情で、戦線が崩壊していること、城門を防衛する方法がないこと、そして蒋介石が軍に退却を命令したことを説明した。彼は部下に、命令書と、それに関連する文書を印刷し、退却に備えるように指示した。その日の午後一時、命令書は中国軍に配布された。

しかし、ぎよつとするような報告が唐に届けられた。唐は揚子江を通つて軍を撤退させようとしていた。ところが、彼は日本海軍が川を掃海して八卦島の東側に迫り、南京に向かつていることを知った。それが到着すると、南京からの最後の退路が断たれることになる。絶望的状况下で、唐は再び寧海路五号の南京安全区国際委員会を訪ね、ドイツのビジネスマンのエドゥアルト・シュペアリンクに日本軍との停戦交渉の仲介を頼んだ。シュペアリンクは旗と伝言を日本軍に渡すことに同意したが、その後、松井大將が唐の申し出を拒否したと報告した。

その日の午後、彼の幕僚たちが二度目の会合に集合するほんの数分前に、唐は家の窓から外を見つめていた。街路に自動車、馬、避難民が溢れ、渋滞し、若者も老人も、病弱なものも壮健なものも、都市全体が逃げ出そうとしていた。少しでも分別があるものならば誰でも脱出を決心したときに、彼はようやく意を固めることができた。午後五時に会合が始まった。会合は一〇分間で終わった。野戦司令官と中央司令官の連絡経路が崩壊していたので、最上級の軍幕僚の多くが出席しなかった。他のものは、状況を自ら判断して逃走していたので、通知を受け取らなかった。

唐は自宅に集まった人たちに言った。日本軍はすでに城門を破壊し、城壁を三箇所突破している。「諸君らには防衛線をまだ保持する自信があるか？」彼は集まった人々に聞いた。数分の間、彼は返答を待ったが、室内の沈黙を破るものはいなかった。

しばらくの沈黙の後に、唐は静かに退却の戦略を論じた。撤退は数分後、午後六時に開始し、翌日の午前六時までに完了する。軍の一部は——第三六師、および憲兵隊は——、下関から川を渡り対岸の指定された村落に集まる。彼は言った。それ以外の部隊は日本軍の包囲を各自突破して、生き残ったもの

は安徽省南部地域に集結すること。残していく武器、弾薬、通信機器は破壊し、軍の撤退路にある道路と橋はすべて焼却する。

同じ会合で唐は直後に命令を変更した。彼は部下たちに言った。第八七師、第八八師、第七四軍、および教導総隊が日本軍の包囲を突破できない場合には、彼らも渡河を試みることにしよう。こうして、唐は五つの師団に揚子江をわたる権限を与えた。その人数を合わせると、本来の作戦で指定した人数の倍になる。その日の晩、唐自身も埠頭に向かった。このときのことを唐は生涯忘れることができなかった。

予想通り、退却命令は中国軍を大混乱に陥らせた。何人かの将校は市内を無計画に走り回り、遭遇した人間すべてに撤退を伝えた。これらの兵士たちは市を離れた。他の将校たちは何も語らず、自分の部隊にさえそれを伝えなかつた。その代わりに、彼らは自分の潜伏場所を確保した。彼らの兵士たちは日本軍との戦闘を継続し、他の部隊が退却するのを見たときに、大量脱走を目撃したと考え、退却を阻止しようとして、逃げていく何百人の同志たちを機関銃で銃撃した。市を脱出しようとする焦りと混乱の中で、少なくとも一台の中国軍戦車が進路上で無数の中国軍兵士を引き倒して進んでいき、手榴弾で爆破されたときによくやく停止した。

そのような、全面的に悲劇的な状況下の退却の間にも、滑稽な一幕があった。兵士たちが民衆の中に紛れて捕らえられるのを避けようと死に物狂いになると、彼らは店舗に押し入って民間人の服を盗み、屋外で軍服を脱いだ。間もなく、街路は半裸の兵士たちだけでなく、兵士と見まがわれることを避けようとして制服を脱ぎ捨てた半裸の警察官たちで溢れかえった。一人の男は、下着と帽子以外には何も

身にまとわずに歩き回っていた。おそらく、帽子は富裕な政府職員の家から盗んだものだったのだろう。見かけ上の秩序が残っていた退却の早い段階では、中国軍の部隊全員が制服を脱ぎ捨て、平服に着替え、隊列を組んで、同時に、行進していた。しかし、退却が潰走に転ずると、平服の争奪戦が切迫していった。歩行者に襲い掛かり、彼らの衣服を剥ぎ取った兵士たちも実際に目撃された。

日本軍と遭遇せずに市を抜け出し、北の波止場を通って揚子江に着くことができる経路はひとつしかなかった。揚子江では、ジャンクの船隊が待っていて、早く到着できれば、乗ることができただろう。波止場に到達するためには、兵士たちは幹線道路である中山路を進み、市の北西の掘江門または水門と呼ばれる城門を通り抜けて、下関の北の郊外の港に入らなければならなかった。

しかし、城門の前は、ほとんど信じられないような密集状態になっていた。ひとつの問題は、何千もの兵士が、七〇フィートの狭いトンネルに殺到したことだった。その多くはトラックや、自動車や、荷馬車に乗っていた。最初、水滴のようだった人の流れは、午後五時になると川になり、夕方、遅くなるに洪水になり、誰もが漏斗の口のように細く絞られた城門の隙間を通り抜けようとした。もうひとつの問題は、退却する兵士たちが、渡河に備えて荷物を軽くしようとする無数の兵器や物資を投げ棄て、その結果、城門付近に手榴弾、バス、機関銃、上衣、靴あるいはヘルメットが山になって積み重なり、交通を妨害していたことである。城門付近に築かれていたバリケードも、道路の半分を塞いでいた。この地域には惨劇の膿が溜まっていた。

唐は埠頭へ向かう運転手つきの黒塗りの乗用車の窓から、この大混乱の多くを目撃した。乗用車が大混乱さなかの人々の間を通り抜けたとき、彼は歩行者の罵声を聞いた。こんなときに、どうして自動車

に乗っていられるんだ。彼らは乗用車の乗員が唐であることに気づかず、大声で叫んだ。唐は聞こえないふりをして眼を閉じた。乗用車は最終目的地に向かって、亀のようにゆっくりと進んでいた。彼は午後六時までに埠頭に到着すると思われていたが、実際にそこに到着したときには午後八時を過ぎていた。河岸では、救いようのない混乱が唐を待っていた。軍将校たちは、どの機器を破壊し、どれを船で揚子江を渡って運ぶかを互いに議論していた。一方、兵士たちは連結した船の列にバランスをとって戦車を載せようとしていた。そのほとんどは転覆して、沈んでしまった。

夜が更けると、兵士たちの関心は自分たち自身が川を渡ることのほうに移り、戦車や機器は放棄された。船が不足してくると、雰囲気は暴力的になり、最後には二、三艘をめぐって一人人ほどの人間が、あるいは船に乗り込もうと殺到し、あるいは空に向かって威嚇射撃をして他人を追い払おうとして争った。恐れをなした船の乗組員は、押し寄せる群集を追い払おうとジャンクやサンパンのへりにしがみつく兵士たちの指の上に斧を振り下ろした。

その夜、川を渡ろうとして、数え切れない人々が死んだ。多くは城門を通り抜けることもできなかった。その夕刻に、中山路で火事が発生し、炎が弾薬の山に燃え移り、家や自動車に火に呑み込まれた。交通パニックの中で馬は後ずさりして後ろ足で立ち上がり、群集の混乱を煽った。狂乱した兵士たちが前へ前へと押し寄せると、その圧力で何百人もの人々が炎の中に押しやられ、さらに何百人もの人々がトンネルの中に押し込まれ、そこで人々の下敷きになって踏みつけられた。城門が封鎖され炎が荒れ狂う中で、混乱した群集の外に脱することができた兵士たちは城壁に殺到してよじ登ろうとした。何百人

もの人が自分の衣服を引き裂いて紐にし、ベルトやゲートルと結び合わせて縄梯子を作った。一人一人、彼らは胸壁によじ登り、壁の間の隙間からライフルや機関銃を放り投げて下に落とした。そのほとんどの人は、落下するか、自分で飛び降りて生命を失った。

完全に船がなくなつたとき、兵士たちは間に合わせの浮遊器具を頼りに、川に飛び込んだ。木製の枕木、丸太、板、バケツ、風呂桶、近所の家から盗んだドアにしがみつき、あるものはその上に座った。木製の器物が何もなくなくなつたとき、多数の人が泳いで渡りきろうとして飛び込んだが、ほとんどの場合、その先には死が待ち受けていた。

唐と二人の副司令長官は石炭で動かす汽艇に乗り込み、さらに二人の軍参謀が到着するのを午後九時まで待ったが、二人は現われなかつた。唐は汽艇の中で、人々が互いに争つて金切り声を上げている喧騒を聞いた。ときどき、喧騒は日本軍の砲撃音にかき消された。そのとき、そこに見えたのは火に包まれた南京の光景だつた。大火災は真つ黒な空を明るく照らしていた。

汽艇で揚子江を横切るときの唐の屈辱感を知ることができない。ただ想像するだけである。彼が最後に見やつた南京は炎に包まれた都市だつた。その人々は狂つたように生き残りの道を求めていた。彼自身の兵士たちも、流木にしがみついて、揚子江の暗い冷たい水の中で、なんとか浮いたままの状態を維持しようとしていた。

のちに彼は友人に語つた。二〇年を超える軍隊生活で何百回の戦闘を経験した中で、あの日ほど暗く悲しいことはなかつた、と。

## 四、六週間の恐怖

日本軍が城門を突破したときには、ある程度の財産、権力、または見通しを持っていた住民たちはみな、すでに都市を去り、どこかに行つてしまつていた。元の人口の約半分が避難した。つまり、戦争の前には都市固有の人口は一〇〇万人を超えていたから、それは一二月に半分の五〇万人にまで減少していったことになる。しかし都市には、城壁の内部は安全であると信じて自分たちの家を後にして入城した周辺地域からの数十万人の避難民があふれていた。兵士たちが去つた後に残つた人々は、自分たちを護る能力に最も乏しい人たちでもあつた。つまり、子どもや老人、あるいは、あまりに貧しいか、あまりに病弱なため、都市からの脱出の手段を確保できない人々だつた。

防御のすべがなく、人的資源もなく、何の方策もない人々ができたのは、日本人が彼らによくしてくれるのではないかという希望をもつことだけだつた。多くの人が自分たちに言い聞かせただろう。戦いが終われば、もちろん日本軍は自分たちを丁重に扱うだろう。いずれにしても、日本軍は彼ら自身の政府よりもよい支配者ではないか。明らかに、彼らの政府は、彼らが最も必要としていたときに彼らを捨てたのだから。こういうふう信じ込む人たちもいたかもしれない。実際に、日本の侵略者が戦車や大



砲やトラックとともに、大挙して市内に入り込んで来たときには、砲火に倦み、爆撃に倦み、包囲に倦んだ中国人のグループが歓迎に出迎えようと集まった。あるものは窓から日章旗を下げ、あるものは南側と西側の城門を通って行進する日本軍の隊列に向けて喝采した。

しかし、歓迎ムードは瞬く間に消え去った。後年の目撃者の証言によれば、日本兵は入城直後から、六人から一二人ほどの集団で街を歩き回り、目についた人に向けて見境なく発砲した。舗道にはうつ伏せに倒れている老人が見つかったが、ほんの気紛れによつて彼が背中から撃たれたことは明らかだった。中国人の民間人の死体がほとんど、いたるところに、横たわつていた。多くは、近づいてくる日本兵から逃れようと走り去つた以外に、日本兵の氣に障るようなことは何もしていなかつた。

戦争犯罪の裁判記録や中国政府の文書で次々に事件を見ていくと、多くは類型的で、その恐怖の程度にいたるまでほとんど単調にさえ感じられる。それぞれに多少の相違点があるが、筋書きは大体、次のように進行する。

日本兵は目にした男をだれかれとなく捕虜として拘束し、何日もの間、食事も水も与えず、しかし、食事と水を与える約束だけはする。そのような待遇のまま数日間が過ぎたころ、これらの犠牲者たちの手首をしつかりと縄や針金で縛り、ある隔離された地域に追い立てる。余りにも疲れきり、脱水状態になった男たちは、食事が与えられると思つて必死になつて歩いていく。機関銃や兵士たちが振り回す血まみれの軍刀や銃剣、大きな墓穴、その中に前に連れてこられた人々の死体が積み重なり、悪臭を発しているのを彼らが見たときには、すでに逃げるには遅すぎた。

後に日本人は、供給が限られている自分たち用の食料を節約するため、あるいは反乱を防ぐために捕

虜を処刑しなければならなかったといつて、これらの行為を正当化した。しかし、日本人が南京の救いのない何十万人もの中国の民間人に対して行ったことには、どのような言い訳も成り立たない。彼らは何の武器も持っていなかったし、反抗する立場にもいなかった。

もちろん、南京のすべての中国人がやすやすと絶滅処置に身を委ねたわけではない。南京大虐殺は、犠牲者になった多数の人々の物語であるとともに、個人の奮闘と勇気の物語でもあった。そこには、浅い墓穴で、手で脱出路を掘った男たちがいて、凍りつく揚子江で何時間もの間、葦にしがみついていた男たちがいて、友人たちの死体の下に何日間も埋められていた後に、銃弾を受けた体を引き摺って病院にたどり着いた男たちがいた。彼らを支えていたのは、生きのびようとする粘り強い意思だけだった。穴や堀の中に何週間も潜んでいた女性たちや、子どもを救おうと燃え盛る家の中を駆け抜けた女性たちがいた。

後に、これらの生存者の多くは、彼らの体験を記者や歴史家に語り、日本の敗北後に南京と東京で開かれた戦争犯罪裁判で証言した。一九九五年の夏に彼らの何人かにインタビューしたとき、私は日本軍による中国人の被害者たちの多くが単なる娯楽目的で殺害されたのだということを知った。南京の住民で、現在八〇歳代になる唐順山タンシュンサンは、一九三七年の日本軍の殺人コンテストを奇跡的に生き残った。彼の見たものはまさにそれを物語っている。

### 殺人コンテスト

爆撃で家を失い、南京の街路上で難渋した何千人もの不幸な市民たちとは異なり、南京大虐殺の時期

の唐には、実際には安全な避難場所があった。当時、二五歳の靴職人の徒弟だった唐は、市北部の小さな街路小門口にあった同僚の徒弟の家に隠れていた。彼の同僚（唐は「大和尚」と「小和尚」と呼んでいた）は、家の入口から門を取り除き、空いた部分に煉瓦を詰めて外側から見ると壁が切れ目なく続いているようにカモフラージュしていた。数時間、彼らは家の土間に座り、外の叫び声と銃声を聞いていた。唐が突然その目で日本兵を見たいという思いに駆り立てられたとき、彼の受難が始まった。そのときまで、彼はずっと日本人の外見は中国人に似ていると聞いていたが、日本人を実際に見たことがなかった。その真偽を確かめることができなかつた。そのときこそ、その眼で日本人を見る千載一遇の機会だった。唐は好奇心を抑制しようとしたが、それに打ち勝つことができなかつた。彼は友人たちに、入口の煉瓦を取り除いて外に出してくれるように頼んだ。

当然、友人たちは、唐が外をうろついているのを日本軍が捕まえたなら、必ず、唐を殺すだろうと警告して、外に出ないように説得した。しかし、唐は容易には説き伏せられなかつた。大和尚と小和尚は必死になって思いとどまらせようとしたが、最後には彼の決心を変えさせることをあきらめた。彼らは自分たち自身を危険にさらして、門の煉瓦を取り除き、唐を外に出した。

唐が外に出るや、彼はもう後悔し始めた。ほとんど超現実的な戦慄の光景が彼を捕らえた。彼は、眼前の街路に、男の死体、女の死体、あるいは子どもや老人の死体が散乱しているのを見た。ほとんどの死体は銃剣などで突き殺されたものだった。「どこもどこも血だらけだった」。唐は恐怖の午後を思い出した。「まるで、空から血が降ってきたようだった」。

そのとき、彼は通りにもう一人の中国人がいて、その後ろに少し離れて、八、九人の日本兵の集団が

近づいてくるのを見た。彼とその見知らぬ中国人は本能的に近くのごみくずの箱に飛び込み、藁と紙を頭にかぶせた。寒さと恐怖で彼らが震えると、箱も彼らと共に左右に震えた。

突然、藁が叩き落された。一人の日本兵が頭上にぬつと顔を出し、彼らをにらむや、起こったことを唐が完全に理解する前に、横にいた人間の首を刀で斬り落した。犠牲者の頸部から血がほとばしり出て、日本兵は落とされた首を戦利品のようにつかみ上げた。「私は恐怖の余り動くことも考えることもできなかった」。唐は思い出した。「私は思った。もし私がここで死んだら、私の家族たちは私に何が起こったかを知ることができないだろう」。

そのとき、彼は中国人の声が彼に命令するのを聞いた。「滾去来クンチュエライ（出て来い）」。唐は、大声を出した中国人が日本人への裏切り者（漢奸）だろうと推測した。「滾去来クンチュエライ。そうしなければおまえを殺すぞ！」

唐はごみくずの箱から這い出た。道の横の堀を見て、この中に飛び込んで逃亡することができないかなと考えたが、恐怖のために脚がすくんで動くこともできなかった。唐は街路で日本兵の集団が数百人の中国人を集め、追い立てているのを見た。唐はその中国人の群れに加わるよう命令された。他の捕虜たちと行進していくとき、彼は道の両側に死体が散乱しているのを見て、余りにも惨めな気持ちになり、自ら死を願うほどだった。

しばらくして、唐は池と真新しく掘られた壕の近くに立たされた。壕は六〇人ほどの中国人の死体が埋まった四角い穴だった。「新しく掘られた穴を見たとき、私は彼らが私たちを生き埋めにするのか、あるいはすぐに殺すのだろうと考えた。恐怖の余り身動きもできず、私はじっと立っていた。突然、私は壕の中に飛び込んでしまおうかなと思った。しかし、そこに狼のような日本の軍用犬が二頭、死体を食つ

ているのを見た」。

日本兵は唐と他の捕虜たちに、大きな墓穴の両側に整列するよう命令した。彼は縁に近い場所に立った。九人の日本兵が近くで待っていた。日本兵は黄色い軍服を着て、星の徽章のついた帽子をかぶり、輝く銃剣と小銃を手にしていた。間近に見た日本人は確かに中国人とよく似ていたが、そのときの唐は恐怖に駆られていて、この点を思い起こすことはなかった。

それから、日本兵の間で競争が始まり、唐に戦慄が走った。誰が最も速く殺せるかを決める競争である。一人の兵士が機関銃の前で逃亡する者を撃ち殺そうと見張り役を務め、他の八人が二人ずつに分かれて四組のチームになった。それぞれのチームで、一人の兵士が刀で捕虜の首を斬り落とし、もう一人が首を拾い上げて傍らに積み上げた。捕虜たちは彼らの同朋が一人一人殺されている横で、沈黙と恐怖の中に凍りついていた。「殺して、数えて！ 殺して、数えて！」。唐は屠殺の速度を思い出しながら語った。日本人は笑っていた。写真を撮っているものさえいた。「自責の念を示すものは何もなかった」。

深い悲しみが唐の心を襲った。「逃げる場所はなかった。私は死ぬしかなかった」。そのとき彼は、彼の家族と愛する人たちを思い、その人たちは自分に何が起こったのかを永遠に知ることができないだろうと感じた。

そのような考えに耽<sup>ふけ</sup>っていたとき、騒ぎが始まって、唐は現実に戻された。二列前にいた妊婦が、列から彼女を引き摺り出して強姦しようとした兵士をかきむしって自分の命を護るための絶望的な闘いを始めた。彼女を助けようとするものはなく、結局、兵士は彼女を殺し、彼女の腹部を銃剣で切り裂いて彼女の腸だけでなく身もだえする胎児をも引き摺り出した。あのときにこそ、全員で反抗すべきだった。

唐は考える。何かできることをして、闘つて、たとえ自分たちがすべて死んでも、兵士を殺そうとすべ  
きだった。しかし、中国人の捕虜の数は自分たちを苦しめる日本人の数を大きく上回つていて、彼らを  
圧倒することができたかもしれないのに、誰も動かなかつた。誰もが不気味なほどの従順さを保つてい  
た。悲しいことだが、壕の周りのすべての人々の中で、ほんのわずかな勇気を示したのはあの妊娠した  
女性だけだったのである。唐は述懐した。

やがて、軍刀を振り回す日本兵が唐の間近で自分の作業に専念し、唐の前には一列が残されるだけになつた。そのとき、奇跡としか言えないような幸運が彼に訪れた。兵士が彼の直前にいた男の首を斬り  
落したとき、犠牲者の身体が唐の肩に倒れかかつた。死体の倒れるはずみで、唐も後ろに倒れ、死体と  
一緒に穴の中に落ちた。それに気づいたものはいなかつた。

唐は死体の衣服の下に頭を隠した。彼の策略は、もし日本兵が元の首斬りゲームに固執していたら役  
に立たなかつただろう。初めの頃、兵士たちは犠牲者たちの首で点数を数えていた。しかし、後になる  
と時間を節約するために、彼らは首を斬り落とすことによつて殺すのではなく、喉を突き刺して殺すよ  
うになつた。これが唐を救うことになつた。事実、壕の中には首が完全に胴体についている何十体もの  
死体が積み重なつていた。

殺人の狂騒は一時間ほど続いた。唐が死んだふりをして倒れていると、日本兵は残りの死体を押して  
彼の上に落とした。唐の記憶によれば、それから、ほとんどの兵士がその場を去つたが、一人の兵士だ  
けが残つて、全員が死んでいることを確かめるために銃剣で何度も大きな墓穴を突き刺して回つた。唐  
は銃剣で五回、突き刺されたが声を上げず、そのまま気絶してしまつた。

その日の午後五時頃に、唐の同僚の徒弟の大和尚と小和尚が、彼の死体を見つけられないかと濠にやってきた。煉瓦の隙間から、彼らは日本兵が唐たちを集めて連れて行くのを見て、他の人たちとともに唐が死んだと考えていた。しかし、彼らは死体の山の下で動いている唐を見つけ、すぐに彼を引き上げて自分たちの家に連れ戻した。

その日の殺人競争で何百人もの人々が死に、生き残ったのは唐だけだった。

### 拷問

日本軍が南京の住民に苦痛を与えるために行った拷問は、ほとんど人間の理解の限界を超えたものである。ここでは、少数の例のみを示す。

——生き埋め 日本軍は、流れ作業の精度と効率で生き埋め作戦を指揮した。兵士たちは捕らえた中国人のひとつの集団に墓穴を掘るように命じ、二番目の集団に最初の集団を埋めさせる。三番目の集団に二番目の集団を埋めさせ、以下同様となる。犠牲者の中には胸や頸を部分的に埋められたものもいたが、彼らはさらに激しい苦痛を強いられた。たとえば、刀で切り刻まれたり、馬や戦車で踏みつけられたりした。

——切断 日本人は、腹を切り裂いて内臓を取り出し、首を斬り落し、腕や脚を切断したが、それだけでなく、被害者をもっと苦しめるさまざまな拷問を行った。市内の至る所で、彼らは捕虜を木製の板の釘付けにして、戦車で轢いた。捕虜たちを樹木や電柱に磔にして、長い肉片を切り取り、あるいは銃剣の練習台として使用した。少なくとも一〇〇名の男たちが、焼き殺される前に眼をえぐり取られ、

鼻と耳を切り取られた。他の二〇〇名の中国兵と民間人の集団は、裸にされ、学校の門に列になつて縛られ、十字という取つ手のある特殊な鉤で、口や喉や眼などの身体中の何百もの箇所を突き刺された。

——火による死 日本人は膨大な人数の犠牲者を大量に焼却した。下関では、日本兵は中国人捕虜を一〇人ずつ縛つて、穴の中に突き落としガソリンをかけて火をつけた。太平路では、多数の商店の店員に火事を消すように命じ、次に彼らを互いに縄で縛つて炎に投げ入れた。日本兵は火によるゲームを考案しさえしている。余興の方法のひとつは、建物の最上階や屋根に多数の中国人の集団を追いやり、階段を破壊し、下層階に火を放つというものだった。その犠牲者の多くは、窓や屋上から飛び降りて自殺した。別の慰みの方式は、犠牲者たちを燃料で浸し、彼らに向けて射撃して、炎が燃え上がるのを見物するというものだった。ある有名な事件では、日本兵が数百人の男女と子どもたちを広場に追い立て、ガソリンを浸し、機関銃で発火させた。

——氷による死 南京大虐殺の時には、何千もの犠牲者が意図的に凍死させられた。たとえば、日本兵は数百人の中国人捕虜を凍結した池の縁に行進させ、彼らはそこで裸になり、氷を割つて、水に飛び込んで「魚を取る」ことを命令された。彼らの身体は硬直して浮いた標的になり、たちまち日本軍の銃弾でこなごなにされた。別の事件では、日本人は避難民の集団を縛り上げ、彼らを浅い池に放り込み、手榴弾で爆破して「血と肉の雨」を降らせた。

——犬による死 ひとつの悪魔的な拷問方法は、被害者の腰までを埋めて、彼らがシェパード犬に引き裂かれるのを見物するというものだった。目撃者は、日本兵が犠牲者を裸にして、彼の身体を感じやすい部分にシェパード犬をけしかけて噛みつかせたのを見た。何匹もの犬は彼の腹部を引き裂いただけ



でなく、彼の腸を遠くまで引き摺り出した。

ここで述べた出来事は、日本人が被害者を苦しめるために使用した方法の一部分でしかない。日本人は犠牲者を酸に浸し、幼児を銃剣で突き刺し、人々を舌で吊り上げた。後に南京大虐殺を調査した日本の記者は、少なくとも一人の日本兵が犠牲者の心臓と肝臓を抉り出して食べたことを知った。生殖器さえも消費された。日本人の監禁から逃れた中国兵は、街路に幾つかのペニスを切り取られた死体があるのを見た。後に彼は、ペニスを食べるることによつて精力を増強することができると信じている日本人の顧客に売却されるのだと聞いた。

### 強姦

南京で行われた処刑の規模と性質は我々には理解しがたいものだが、強姦の規模と性質についても同様である。

それは、確実に歴史上最大の大規模な強姦のひとつである。Against Our Will: Men, Women and Rape (意思に反して—男、女そして強姦)という画期的な書物を書いたスーザン・ブラウンミラーは、南京大虐殺はおそらく戦時に民間人に対して加えられた最悪の強姦の事例であろうと信じている。唯一の例外は、一九七一年のパキスタン兵によるベンガル人女性に対する扱いである(反乱失敗後の九ヶ月間の恐怖政治の時期に、バンングラディッシュで二〇万人から四〇万人の女性が強姦されたと推定されている)。ボスニアの強姦は、統計の信頼性が欠如しているために、確かなことを語るのは難しいといながらも、ブラウンミラーは、南京大虐殺が旧ユーゴスラビアにおける女性たちの強姦の規模を上回っているのでは

ないかと考えている。

南京で強姦された女性の正確な人数を確定することは不可能である。推定値は最小の二万人から最大の八万人までの範囲に広がる。しかし、日本人が南京の女性に対して行ったことを、統計の計数表によって計算することはできない。試練に耐えて生き残った女性たちの多くは、後に妊娠していることに気づいた。南京で日本の強姦者によって妊娠させられた中国人女性の問題はあまりにも過敏なものであったために、これまで完全に研究されたことがなかった。したがって、この問題の心理的な被害の全体像を知ることが、永久にできないだろう。私の知る限り、そして中国の歴史家と南京大虐殺を記念して建てられた記念館の職員の知る限り、今日まで、自分の子どもが強姦の結果だったということを表立って認めた女性は一人もいない。そのような子どもたちのほとんどは、こっそりと殺された。大虐殺当時に市内にいたアメリカの社会学者によれば、多数の日本の混血児が、産まれたときに窒息死させられ、溺死させられたという。中国人の女性が、愛することのできない子どもを育てるのか、嬰兒殺しを犯すのかという選択を迫られたときに負わされた罪悪感、羞恥心、そして自己嫌悪がどのようなものだったかについては、想像するしかない。疑いもなく、多数の女性たちは決断を下すことができなかった。あるドイツの外交官は、一九三七年から一九三八年にかけて、「数えきれない」中国人女性が揚子江に投身して自らの生命を断つたと報告した。

しかし当時の南京では、いとも容易く強姦の被害者になったのだということは、疑うべくもない事実である。日本人は南京のあらゆる階層の女性を強姦した。対象は農民の妻、学生、教師、ホワイトカラーおよびブルーカラーの労働者、YMCA職員の妻、大学教授から、仏教の尼僧にまでもおよんだ。ある

ものは輪姦されて死んだ。また、彼らの女性狩りは組織的、系統的だった。南京の日本兵は、家に押し入って男を引き摺り出して処刑するときに、絶えず女性を漁っていた。あるものは文字通り一軒一軒の搜索を行い、金銭と「花姑娘」<sup>ホウクワンニヤ</sup>つまり若い娘を要求した。

このため市内の若い女性たちは、恐ろしいジレンマに陥った。彼女たちは、家の中に止まるのか、それとも欧米人によつて護られている中立地域の国際安全区に避難するのか決めることができなかった。家にいれば家族の目の前で強姦される危険にさらされた。しかし、安全区に向かつて家を出れば、通りで日本兵につかまる危険があつた。南京の女性にとつて、至るところに罠が隠されていた。たとえば、日本軍は市場で女性に米と小麦を鶏と家鴨に交換するという話をでつちあげた。しかし、女性たちが交換のためにその場所に着いたとき、彼女たちが見たのは待機している一団の兵士たちだった。兵士たちの一部は中国人の裏切り者を雇つて、強姦用の候補者を探し回つた。日本人は、安全区の中でさえ、事件を偽装して難民キャンプから外国人をおびき出し、女性たちを拉致の襲撃から無防備な状態にしようとした。

中国人の女性にはあらゆる場所で、あらゆる時間に、強姦された。強姦事件の三分の一は日中に発生したと推定されている。ある生存者は、明るい日差しの中で、通りの真中で、多くの目撃者の眼前で、兵士たちが被害者を犯すために脚をひろげさせてのぞきこんだことまでを思い出す。神聖な場所だからといって強姦が妨げられることはなかった。日本人は、尼僧院の中で、教会の中で、あるいは神学校の中で女性を襲つた。神学校の敷地内で、一七人の兵士が次々と一人の女性を強姦した。「大公報」紙は、南京の大規模な強姦を証言した。「毎日、一日二四時間、どこかで罪のない女性が日本兵によつて引き摺り

出されていない時間はなかった」。

老齢も日本人の気にするものではなかった。年配の婦人が、おばあさんが、そしてひいおばあさんが、度重なる性的な襲撃を受けた。六〇歳の女性を強姦した日本兵は、「口でペニスを洗う」ように強制した。六二歳の女性が兵士たちに、自分は歳を取っているので性交はできないと抗議したところ、彼らは「彼女に棒を突き刺した」。八〇歳代の多数の女性が強姦されて死に、少なくともその年齢の一人の女性が日本兵が言い寄るのを拒絶したために射殺された。

日本人の老婦人に対する扱いが恐ろしいものだったとすると、彼らの幼女に対する扱いは信じがたいものだった。幼い少女たちは乱暴に強姦され、あるものは何週間もの間、歩くことができなかった。多くのものは手術の治療が必要で、他のものは死んだ。中国人の目撃者は、日本人が一〇歳に満たない少女を街路上で強姦してから、刀で二つに切り割いたのを見た。ある事例では、日本人は強姦を効果的に行うために、一〇歳に満たない少女のヴァギナを切り開いた。

妊娠後期の女性でも襲撃を免除されることはなかった。日本人は、陣痛が始まろうとしている女性、陣痛が始まっている女性、あるいは僅か数日前に出産したばかりの多数の女性たちに暴行を加えた。九ヶ月の身重だった一人の被害者は、流産しただけでなく完全に正気を失った。少なくとも一人の身重の女性が、蹴られて死亡した。それ以上におどましいのは、これらの女性の未だ産まれていない子どもたちの何人かに加えられた行為である。輪姦の後、ときに日本兵たちは、娯楽のために、妊娠した女性の腹を切り裂いて胎児を引き出した。

しばしば、女性の強姦は家族全員の虐殺を伴った。

その種の虐殺の最も有名な物語は、南京のアメリカ人とヨーロッパ人の宣教師たちによって詳細に記録されている。一九三七年一月一日に、三〇人の日本兵が南京市東南部新路口五号の中国人の家に来た。彼らは門を開けた家主を殺し、次に跪いてもう誰も殺さないように懇願する借家人の夏シャ氏を殺した。家主の妻が、なぜ夫を殺したのかと抗議したときに、彼らは彼女を射殺した。次に兵士たちは、客室のテーブルの下から、一歳になる自分の子どもを隠そうとしていた夏氏の夫人を引き摺り出した。彼らは夫人を裸にして強姦し、ことが終わつた後に胸を銃剣で突いた。兵士たちは夫人のヴァギナに香水の瓶を突き刺し、嬰兒も銃剣で殺した。次に、彼らは隣の部屋に行つて、夏氏の父母と二人の一〇代の娘を見つけた。祖母は少女たちを強姦から護ろうとして拳銃で撃たれ、妻の体を抱きしめていた祖父も直後に殺された。

その後、兵士たちは少女を裸にして、強姦し始めた。一六歳の少女は二人または三人の男に犯され、一四歳の少女は三人に犯された。日本人は年上の少女を刺し殺しただけでなく、強姦の後で彼女のヴァギナに竹の棒を突き刺した。年少の少女は銃剣で突き殺されただけだったので、「彼女の母と姉が受けた恐ろしい仕打ちを免れることができた」。後にある外国人が、その場面について書いている。兵士たちはベッドの毛布の下に四歳の妹と一緒に隠れていた八歳の少女にも銃剣を突き刺した。四歳の少女は長時間毛布の下に隠れていて、窒息寸前になった。彼女は酸素の欠乏により、一生涯続く脳の損傷を受けた。

立ち去る前に兵士たちは、四歳と二歳になる家主の二人の子どもを殺した。彼らは年上の子どもを銃剣で刺し殺し、年下の子どもの首を刀で切り落とした。子どもたちが外に出ても安全になつたときに、

ベッドの毛布の下に隠れていて生き残った八歳の少女は隣の部屋に這い出て、彼女の母親の死体の傍らに横たわった。四歳の妹と共に、彼女は一四日の間、襲撃の前に母親が用意していた米糠を食べて生きた。惨劇の数週間後に国際委員会の一人のメンバーが家を訪れたとき、彼はテーブルの上で若い少女が強姦された形跡を見た。のちに彼は証言した。「私がそこに行つたとき、テーブルの血はまだ乾いていなかった」。

目の前で家族全員を殺された一五歳の中国人少女に関する、おぞましきでは劣ることのない同じような物語がある。最初、日本人は中国人兵士であると誤認して、彼女の兄を殺し、次に兄の妻と彼女の姉を、強姦に抵抗したという理由で殺し、最後に、床に跪いて日本兵に子どもたちの生命を救ってくれるよう懇願していた彼女の父親と母親を殺した。日本人の銃剣で突かれて死ぬ前の両親の言葉は、若い少女に敵兵の望むものに何でも従うように促すものだった。

少女は気絶した。意識を取り戻したとき、彼女は見知らぬ施錠された部屋の床に裸で寝かされていた。彼女が意識を失っている間に、誰かが彼女を強姦していた。彼女の衣服は、その建物のほかの少女たちと同じように、彼女から剥ぎ取られていた。彼女の部屋は二〇〇人の日本兵の兵舎に転用されていた建物の二階にあった。内部にいた女性たちは二種類のグループから構成されていた。ひとつは売春婦で、彼女らは自由を保証されよい待遇を受けていた。もうひとつのグループは、拉致されて性奴隷にされた育ちのよい少女たちだった。後者のグループの、少なくとも一人の少女が自殺を試みた。一カ月半の間、一五歳の少女は一日に二回から三回ずつ強姦されつづけた。最後に、彼女は重い病気になったため日本人は彼女を一人にして放置した。ある日、中国語を話す親切な日本人将校が彼女に近づき、なぜ泣いて

いるのか尋ねた。彼女の話聞いた後、彼は自動車で彼女を南京に連れて行き、南門の内側で彼女を解放し、紙片に金陵学院の名前を書いて彼女に手渡した。少女は病気が重かったので、最初の日に金陵学院まで歩いていくことができず、中国人の家に避難した。二日目によく金陵にたどり着いたとき、国際委員会のメンバーが急いで駆けつけて、彼女を病院に運んだ。

この少女は幸運だと思われた。恒常的な強姦の用具として、裸にされ、椅子やベッドや柱に鎖でつながれていた、ほかの多数の少女たちは、そのような仕打ちに耐えて生き残ることはできなかった。中国人の証言は、二日の間連続して強姦され続けた後に死んだ一歳の少女の死体を、次のように描写している。「目撃者の報告によれば、血が染みて、腫れ上がり、裂傷を負った少女の脚の間の光景は胸が悪くなるもので、誰も容易に正視できなかった」。

大規模な強姦のときに、日本人は、目の前にいたという理由で子どもや幼児たちを殺した。目撃者の報告は、母親が強姦されている前で泣いたという理由で、子どもや嬰兒たちが口に衣服を詰め込んで窒息させられ、あるいは銃剣で刺し殺された状況を描写している。南京大虐殺の欧米人の目撃者たちは、次のような膨大な件数の事例を記録している。「四一五——二月三日午後五時ごろ。尚書巷（大中橋付近）で、三人の兵士が一人の女性に無理やり嬰兒を投げ捨てさせ、彼女を強姦した後、笑いながら去っていった」。

数えきれない男たちが愛するものを強姦から護ろうとして死んだ。日本人たちが物置から一人の女性を引き摺り出し、彼女の夫が制止しようとしたときに、彼らは「彼の鼻に針金を通し、人が牛を繋ぐように針金の別の端を木に縛りつけた」。彼らは、男の母親が地面に転げまわり、ヒステリックに泣

き叫んで懇願するのを横目に、男に銃剣を繰り返し突き刺した。日本人は母親に家の中に入るよう命令し、さもなければ殺すと脅した。直後に息子は突き刺された傷のために死んだ。

南京では、人間性への墮落と性倒錯に対する日本人の許容力には限界がないようだった。兵士の一部が殺人の単調さを破るために殺人コンテストを考案したように、セックスに食傷したときに一部の兵士たちは、レクリエーション用の強姦と拷問のゲームを考案した。

多分、日本人の娯楽の最も残忍な形式のひとつは、ヴァギナを串刺しにすることだろう。南京の街路には脚を開いてその間の部分に木の棒や小枝や雑草を突き刺された女性の死体が転がっていた。南京の女性を苦しめるために使用された、それ以外の物について詳しく考察するのは苦しい。それらは、彼らにどんな耐えがたい試練を強いたのだろうか。考えるだけで精神が麻痺するほどである。たとえば、ある日本兵は若い女性を強姦した後、彼女にビール瓶を突き刺してから、射殺した。別の強姦の被害者は、ゴルフクラブの棒を突き刺されていた。一月二十二日には、通済門に近い居住区で日本兵は理髪店の妻を強姦し、彼女のヴァギナに爆竹を詰め込んだ。その爆発で、彼女は死んだ。

しかし、被害者は女性だけではなくだった。しばしば、中国人の男性は男性の対象にされ、また、哄笑する日本兵の眼前でさまざまに不愉快きわまる性行為を強制された。少なくとも一人の中国人の男性が、雪の中で女性の死体に死姦することを拒絶したために殺された。また、日本人は一生を独身で通そうと誓っている男性に性交を強制しようとするだけでも喜んだ。ある中国人の女性が男に変装して南京の城門のひとつを通ろうとしたが、通行人すべてのまたぐらを手で探って系統的に検査していた日本人の守



衛によつて、彼女の眞の性別が知られてしまつた。彼女は輪姦されたが、不運なことに一人の仏教の僧侶がその場面の近くにいた。日本人は僧侶に、自分たちが強姦したばかりの女性と性交させようとした。僧侶が抵抗すると、彼らは僧侶を去勢し、出血のためにその哀れな男は死んだ。

性的な拷問の最も汚らしい例のいくつかは、家族全員を貶めようとするものだった。日本人は中国人の男性に近親相姦を強いることに嗜虐的な悦びを求めた。父親に彼自身の娘を犯させ、兄弟に姉妹を犯させ、息子に母親を犯させた。中国軍の大隊の指揮官だつた郭岐クオチは市が陥落した後の三ヶ月間、進退窮まつたまま市内に残つていたが、日本人が、息子に母親を犯すよう命令した少なくとも四件または五件の事件を、見たか、あるいは聞いた。拒絶したものは即座に殺された。彼の報告はドイツの外交官の証言と符合し実証される。その証言によれば、自分の母親を強姦することを拒絶した一人の中国人男性が刀で突き殺され、彼の母親はそれからまもなく自殺したという。

いくつかの家族は、自分を自分で破壊するような行為を拒んで、潔く死を受け入れた。ある家族が揚子江を渡つていたときに、二人の日本兵が彼らを停止させ、点検を要求した。船に若い女性と少女が乗つているのを見たとき、兵士は両親と夫の目の前で彼女らを強姦した。これだけでも十分に、恐ろしいことだつたが、兵士が次に家族に要求したことは彼らを打ちのめした。兵士は家族の老人が自分らと同じように女性を犯すことを望んだのである。従うことができなかつた彼ら家族全員は川に身を投げ、溺死した。

女性が日本兵に捕らえられてしまうと、もはや絶望的で、多くは強姦され、その直後に殺害された。

しかし、すべての女性がやすやすと身を委ねたわけではない。多くの女性が、何ヶ月間も日本人に見つからずに隠れていることができた。彼女らはたとえ、積み重ねた薪の間、干草の下、豚小屋の中、船の中、廃屋の中などに身を潜めた。周辺の農村では、女性たちは地下の隠された穴の中に身を潜めた。日本兵は地面を叩いて、この穴を発見しようとした。ある尼僧と幼い少女は、すでに死体で一杯になっていた壕の中に横たわり、五日間、死んだ振りをして、強姦と殺害から逃れた。

女性たちはさまざまな方法によって強姦を免れた。あるものは変装した。顔に煤を摺り込み、年若い病人に見えるようにし、あるいは頭を剃って男と思わせた（一人の賢い少女は、杖をついてよろけ、六歳の少年を背負い、老婦を装ったまま、金陵学院の安全区に入った）。あるいは、日本兵に自分は四日前に死産したばかりだと言った女性のように、病人のふりをした。別の女性は中国人の捕虜の助言を聞いて、喉に指を突っ込んで何度も嘔吐した。（彼女を捕らえた日本人は、急いで彼女を建物から追い出した）。あるものは、猛烈に追いかける日本人をかわして、人ごみに紛れ、城壁によじ登り、その速さだけで、辛うじて逃げ切った。一人の少女は、家の三階から中国人の男性が支えてくれた竹竿で滑り降りて、日本兵の裏をかき、やつとのことで襲撃を免れることができた。

捕まってしまうと、戦う女性は、他のあえて抵抗しようとする人たちへの見せしめとして、拷問されることになる。しばしば、日本兵に抗った女性は、後に眼球をえぐり出され、耳や鼻、あるいは胸を切り取られた姿で発見された。日本兵の襲撃に対して、あえて戦おうとする女性はほとんどいなかったが、それでもいくつの抵抗の例が見られる。ある学校教師は、射殺されるまでの間に五人の日本兵を銃で倒した。最も有名なのは、日本兵との戦いで三七箇所の銃剣の傷を受けながら生き残り、六〇年後になっ

ても当時の状況を身ぶりで再現しながら語るほど健康で元氣な李秀英リーシューエイの物語だろう。

一九三七年当時、一八歳の李秀英は軍技術者の新妻だった。政府が首都から撤退するとき、彼女の夫は中国兵がすし詰め状態になった列車の屋根の上に座つて南京を離れた。妊娠六ヶ月あるいは七ヶ月だった李は、混み合う列車に乗るのが危険な状態だと判断されたので、あとに残ることにした。

多くの他の南京市民と同じように、李と彼女の父は外国人が管理していた安全区に避難した。彼らは難民キャンプに転用されていた小学校の地下室に隠れた。しかし、安全区の他の場所と同じように、このキャンプは度重なる日本人の視察と侵入にさらされた。二月一八日に、日本兵の一団が押し入つてきて、若い男性を学校から引き摺り出していった。翌朝、彼らは女を求めて戻つてきた。日本人が身重の主婦に対してすることに恐怖して、李は衝動的に地下室の壁に自分の頭を打ちつけ、自殺しようとした。

意識を取り戻したとき、彼女は地下室の床の小さな布製寝台の上に横たわる自分に気づいた。日本人はいなくなつたが、彼らは何人かの若い女性を連れ去つていた。寝台に茫然と横たわっている彼女の頭の中を、野性的な考えが駆け巡つた。もし建物の外に逃げようとするれば、自分から日本の強姦者に飛び込んでいくことになるかもしれない。しかし、何もせずに待つていたら、彼らはおそらく自分を狙つて戻つてくるだろう。李は待つことにした。日本人が戻つてこなければそれでよい。しかし彼らが戻つてきたら、自分は彼らと戦つて死のう。日本人に強姦されるよりも、死を選ぼう。彼女は自分に言い聞かせた。

間もなく、彼女は三人の日本兵が階段を降りて近づいてくる重い足音を聞いた。その中の二人は、二人の若い女性を確保し、必死の叫び声を上げる彼女らを部屋の外に引き摺り出していった。残りの一人は寝台に横たわつて動かない李をしげしげと見つめた。誰かが李は病氣だと言うと、彼は部屋の中の李

以外の人を蹴つて廊下に追い出した。兵士は戻ってきて、ゆっくりと彼女の品定めをするために近づいてきた。突然のことだった。兵士が何が起こったのかを理解できないうちに、彼女は動いた。彼女は寝台から飛び出し、彼のベルトから銃剣を奪い取り、壁に背を押し付けて身構えた。「兵士は動転しました」。彼女は思い出す。「彼は女が反撃してくるとは想像もしていなかったのです」。彼は、李が銃剣を持っている手首を押さえた。しかし、李は自由なほうの手で彼の襟を掴むと、彼の腕に全身の力をこめて噛みついた。兵士は完全な戦闘服を着ていて、彼女は動きにくい旗袍チヤイナドレス（チャイナドレス）だけしか着ていなかったけれども、彼女は善戦した。二人は互いにつかみ合い、蹴りあつて、とうとう兵士は敵わないと感じ、叫び声をあげて助けを求めた。

ほかの兵士たちが駆け寄ってきた。疑いもなく、彼らはそこに信じられないものを見た。彼らは彼女に銃剣を突きたてたが、同僚が邪魔になつて効果的に攻撃することができなかった。彼女の対戦者は背が低く非常に小柄だったので、彼女は完全に彼の足を封じて、彼を動かし、兵士たちの攻撃を防御する盾のように使うことができた。しかし、兵士たちは銃剣を彼女の顔に向け始め、顔を刃が切り刻み、歯を打ち砕いた。口に血が溢れ、彼女はそれを敵の眼をめがけて吐き付けた。「壁も、床も、ベッドも、どこも血だらけでした」。李は思い出した。「私の心に恐怖感はまだありませんでした。私は激怒していました。私の考えは戦つて彼らを殺すことだけでした」。最後には一人の兵士の銃剣が彼女の腹部を突き刺し、彼女の視界はすべて真っ暗になった。

兵士たちは彼女が死んだと思つて去つていった。李の身体が父親の前に運ばれたとき、父親は娘が呼吸をしているのをまったく感じることができず、最悪の事態を想定した。彼は彼女を学校の裏に運び、

埋めるための穴を掘るよう人に頼んだ。幸運にも、埋葬の前に、李がまだ息をしていて、口から血の泡が出てゐるのに誰かが気づいた。友人たちが大急ぎで彼女を南京大学病院に運び込み、医師が彼女の三七ヶ所の銃創の傷を縫合した。その晩、意識を失っている中で、彼女は流産した。

どのような経路を通つたのか、李の戦いの話は夫の耳に達し、彼は軍に三ヶ月の休暇を願い出て、南京に戻るために借金をした。一九三八年の八月に、彼は南京に戻り、腫れ上がり傷だらけになつた彼女の顔を見た。彼女の頭の、生えてきた濃い毛髪は刈り込まれていた。

このときの傷は、一生涯続く苦痛と困難を彼女に課すことになつた。彼女の鼻の脇に開いたままになつた傷の穴からは粘液が漏れ出し、悪天候や病気のときには涙が溢れ出した（日本兵は彼女の白眼の部分を見つめて突き刺したにもかかわらず、奇跡的に彼女は失明しなかつた）。鏡を覗くたびに、彼女は一九三七年一月一九日の恐ろしい日を思い出させる傷跡を見た。「五八年経つて、今では皺が傷跡を蔽つています」。南京の彼女のアパートを訪れた私に彼女は言った。「しかし、若い頃には、私の顔の傷跡ははっきりしていて恐ろしいものでした」。

李は、彼女の手柄と、独特の家族背景が彼女に戦おうとする意思を与えたのだと信じている。幼い頃から従順であれと教えらるる他の中国人女性とは異なり、彼女の育つた家庭には女性的な影響がまったく欠けていた。母親は彼女が一三歳のときに死んだので、彼女は無骨な軍人の家族の中で成長した。父、兄、そして叔父や伯父はみな軍人か警官で、その影響によつて彼女は勝気なおてんばになつた。若い娘としての彼女の気性は非常に激しく、父親は中国武術を教えなかつた。明らかに、彼女が近所の子どもたちに乱暴することを恐れたからである。六〇年に近い年月が過ぎ、多数の子どもや孫たちに囲まれ、

彼女は健康と生きる情熱を強固に保っている。近所では気難し屋と評判されているほどである。ひとつ、悔しかったのは、父親から中国武術を学んでいなかったことだと彼女は言う。そうでなければ彼女は、あの日、三人の日本兵全員を殺す快感を味わうことができたかも知れなかったのにと。

### 死者数

南京大虐殺では何人が死んだのだろうか？ 南京大学歴史学教授マイナー・シール・ベイツが極東国際軍事裁判で死者数の推定値を尋ねられたとき、彼は答えた。「その質問は大変大きなもので、私はどこでそれが始まったのか知りません……この殺害行為全体は余りにも大きく広がっていて、全体像を示すことができません」。

中国の軍事専門家劉方楚は四三万人という数字を提示した。侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館の職員や一九四六年の南京軍事法廷の検察官は、少なくとも三〇万人が殺されたと主張する。東京裁判の判決書は、南京で二六万人以上の人々が殺されたと結論づけた。日本の歴史学者藤原彰は、約二〇万人という数字を挙げている。ジョン・ラーベは系統的な死者数の計算を行わなかったし、虐殺がまだ続いていた二月に南京を去ったのだが、彼は五万人から六万人が殺されたと推定した。日本の文筆家秦郁彦は、死者数の範囲は三万八千人から四万二千人までだと主張する。日本には他に三千人という低い数字をあげる人もいる。一九九四年に、かつて日本が「満州」に所有していた鉄道会社から、一九三八年の一月から三月までの間に、ひとつの埋葬部隊だけで三万以上の死体を投棄したことを明らかにする書証が発見された。

おそらく、江蘇省社会科学院研究員の孫宅巍<sup>スツァイクワイ</sup>ほど純粋な統計研究を行った者はいないだろう。一九九〇年に書いた「南京大虐殺と南京の人口」と題する学術論文の中で彼は、人口統計の資料に基づき、日中間の敵対状態が発生する前の南京の人口は一〇〇万人を超えていたと分析した。中国の公文書、中国軍将校の回想、および赤十字南京分会の報告書に基づき、孫は、日本軍の占領当時、市内には少なくとも五〇万人の長期居住者がいて（それ以外の人はすでに市を去っていた）、九万人の中国軍兵士、数十万人の避難民がそれに加わり、全体でおよそ六〇万人、むしろ七〇万人程度の人がいたと結論づけた。

孫は第二の論文で推定値を明らかにした。南京市公文書、中国第二歴史档案館には、家族が私的に行った埋葬や、地方の慈善団体、あるいは日本の傀儡政府の支配下にあつた南京自治委員会が行つた埋葬の記録がある。孫は、これらの記録を注意深く精査した後、南京の慈善団体の埋葬は少なくとも一八万五千体、家族の私的な埋葬数は少なくとも三万五千体、そして日本軍が支配していた地方政府の埋葬数は七、四〇〇体を超えていたことを確認した（埋葬記録の一部は非常に詳細で、犠牲者の性別や投棄されていた地区などの項目も記されていた）。中国の埋葬記録だけを使用して、彼は南京大虐殺の死者数が二二万七、四〇〇人を超えていたと計算した。

しかしこの統計値は、孫の論文の四〇年ほど前に日本軍の捕虜が記した驚くべき告白を勘案すると、さらに膨れ上がる。一九五四年、遼寧省北東にある撫順戦犯管理所で審判を待っていた日本陸軍の太田寿男少佐は四四ページの供述書を提出したが、その中で彼は、日本軍が焼却、埋葬、あるいは投棄を行つて、大量の死体を処理したことを自供した。ほとんどの死体は、南京北西の下関からのものだった。あの河岸地区では、日本人は待機する船に五〇体ずつの死体を積み、川の中ほどまで運んで水中に投げ棄

てた。死体はトラックで別の場所に運ばれ、虐殺の証拠を隠滅するために焼却され、埋められた。太田の部隊は、一九三七年一月一五日からの三日間で、中国人の被害者の一万九千体の死体を揚子江に投棄したが、そのとき、隣で作業していた別の部隊は八万一千体を処理し、他のいくつかの部隊が五万体を運び去った。総数で一五万ほどになる。孫は、中国の埋葬記録からの統計値に太田の数字を加えて、死体の総数が三七万七、四〇〇人という驚くべき値に達するという結論を出した。この数は広島と長崎の原爆投下による死者数の合計を上回っている。

たとえば、懐疑主義者が太田の自白が虚偽だと否定し彼の証言を無視したとしても、南京の埋葬記録によつて、虐殺の死者数はどんなに低く見積もつても二〇万人台の範囲にあるという確実な証拠が提供されていることに留意しなければならない。孫の研究は、極東国際軍事裁判の記録から私が探し出した証拠書類（表4・1参照）によつても傍証することができる。慈善団体の見積埋葬数（後に孫の論文で言及されている）と、他の個人が数えた死体の数（孫の論文では言及されていない）とを足し合わせて、法廷は南京大虐殺で約二六万人が殺されたという結論を出した。極東国際軍事裁判の数字には、死者数は三〇万人台から四〇万人台にまで押し上げることになるかもしれない日本側による中国人の死者数の埋葬統計が含まれていないことは重要である。

近年、他の学者が孫の研究を支持し、南京での死者数が三〇万人を超えていたのではないかという議論の根拠を提示している。たとえば、南イリノイ大学の呉天威<sup>ウーティエンウェン</sup>歴史学名誉教授は、彼の *Let the Whole World Know the Nanjing Massacre*（全世界に南京大虐殺を知らしめよう）という論文の中で、陥落直前の



表 4・1 日本の南京大虐殺の推定犠牲者数

崇善堂.....	112,266
紅卍字会 .....	43,071
下関地区 .....	26,100
魯甦氏の陳述 .....	57,400
朱、張、楊氏の陳述.....	7,000以上
呉氏の陳述 .....	2,000以上
無名犠牲者の墓碑の記述.....	3,000以上
合 計 (概数) .....	260,000

出典:文書番号 1702、箱番 134、極東国際軍事裁判記録、法廷証拠、1948 年、第二次世界大戦、戦争犯罪資料集、項番 14、記録グループ 238、米国立公文書館。

市の人口はおよそ六三万人だったと推定する。彼が提示したこの数字は正確な値とはいえないが、相対的には実数に近いものだろう。死体の数についての詳細な歴史的研究資料を示し、数値を注意深く検証した後に、彼は南京大虐殺の死者数は三〇万人を超えていたという結論を導く。その数はおそらく三四万人で、そのうちの一九万人は集団で殺害され、一五万人は個別に殺害されたとする。

文筆家のジェームス伊<sup>イン</sup>と史咏<sup>シヨウ</sup>の両氏も、独自の研究を行った後に、同規模の数字、つまり約三五万五千人という数字を導き出した。彼らの数字はすでに推定死者数の最上位のものになっているが、伊<sup>イン</sup>と咏<sup>シヨウ</sup>は、南京で殺された人々の実数は彼らが発掘することができると信じている。死者数の統計には相当数の重複があると信じ、たとえば日本人が川に投棄した死体の多くは岸に漂着し、再び埋葬され、死体として二度数えられたのではないかと示唆する他の専門家の議論を、彼らは否定す

る。陸地に打ち上げられた死体というものは、川から遠くに離れた場所に埋められるのではなく、川のほとりに埋められるはずである。しかし、彼らの調査研究によれば、ほとんどの埋葬地は揚子江から何マイルも離れていた。彼らは、外にさらされていたために腐敗が進行している死体を埋葬するために野を越え山を越えて輸送するというのは常識に反していると論じる。さらに、伊と咏は生存者への聞き取り調査を通して、強姦や殺人の被害者の家族は、通常、被害者の死体を急いで埋めてしまい、当局への埋葬の届出は行わなかったという事実を発見した。彼らの研究は、個別的な手当たり次第の殺人ではなく、大量殺人の報告書を対象にしているので、伊と咏は南京大虐殺の死者の総数は十分に四〇万人台の範囲になるだろうと信じている。

大虐殺の時期に、日本人自身が南京の死者数が三〇万人になると信じていたことを示す決定的な証拠もある。この証拠は、日本人自身の側から発せられただけでなく、殺害行為が終息したとは到底いえない虐殺の最初の月に発せられたという点で、重要である。一九三八年の一月一七日に、廣田弘毅外務大臣は東京からワシントンD.C.の連絡員に次の電文を転送したが、それをアメリカの情報機関が傍受し、暗号を解読してから、一九三八年二月一日に英語に翻訳した。

数日前に上海に戻ってから、私は南京やその他の地区で日本軍によって行われていると報告されている虐殺行為を調査した。信頼できる目撃者の口頭の説明と、信頼性について疑念の余地のない人たちの手紙により、日本軍がフン族のアッティラを思わせるような態度で振舞ってきて、現在もそういう風に振舞っているという確証を得ることができる。三〇万人を下ることのない中

國の民間人が殺戮された。そのほとんどは血も凍るようなことだ。

一月に蒋介石が南京から政府のほとんどを疎開したときに、蔣が彼の軍を引き上げて都市を無防備な状態にしていたならば、恐らくあの大きかりな虐殺は避けられたのではないかという仮説は、よく語られ、説得力がありそうに見える。しかし、少し考えてみれば、この議論の弱点が見えてくる。いずれにしても、日本軍はその数ヶ月前から、南京へ進軍する経路で組織的に村や都市を破壊し、同じような虐殺を他の場所でも行っていたのである。明らかに、彼らは自らの行為について、中国人の挑発を必要としていたわけではないのである。

中国兵がまったくなくなつた都市は、少なくとも、民間人の中に隠れている兵士を取り除くために系統的な処刑が必要だつたという日本人の言い訳の根拠を奪つたということだけは確かに言えるだろう。しかし、それによって彼らの行為が変わつたという根拠は何もないのである。

また、蒋介石が意味のない南京からの退却命令を出さず、最後の一人まで市の防衛のために戦つていたら市の運命は違うものになつていたかもしれないという仮説も語られがちである。しかし、我々はここでも慎重にならなければならない。一対一の白兵戦は機能しなかつただろう。日本軍ははるかに優れた武器を持つていたし、よく訓練されていたのだから、遅かれ早かれ中国軍を打ち負かしたはずである。しかし、遊撃戦の戦術に基づく長期の戦闘を引き伸ばせば、日本軍の士気を喪失させ、中国軍のそれを高揚させることができたかもしれない。少なくとも、もつと多くの日本兵が中国兵との戦闘で死に、激しい抵抗によって彼らの中国兵に対する傲慢さが封じられることにはなつただろう。

## 五、南京安全区

どのような戦争の歴史においても、常に、虐げられた人々の希望の光になるような、ごくわずかだが特別な人たちが現れる。アメリカ合衆国ではクエーカー教徒が自分たちの奴隷を解放し、「地下鉄道」の設立を援助した。第二次世界大戦時のヨーロッパでは、ナチ党員のオスカー・シンドラーが自分の財産を投じて一、二〇〇人のユダヤ人をアウシュビッツのガス室から救い出し、スウェーデンの外交官ラウル・ワレンバーグは一〇万人以上のユダヤ人に虚偽のパスポートを与えて、彼らを救った。友人らと共に、アムステルダム屋根裏部屋で若いアンネ・フランクと彼女の家族をかくまったオーストリアの女性ミープ・ヒースも忘れることができない。

暗い時代はほとんどの人々を麻痺させるが、何人かのほんの一握りの人たちがあらゆる警告を無視して、平時には彼ら自身でも想像することもできないようなことを行う。その理由を我々の多くは窺い知ることができないのだが。

南京大虐殺の恐怖の中に明るい面を見出すことは難しいが、求め得るとすれば、アメリカ人とヨーロッパ人の小さなチームの行為が光彩を放っていたことは確かなことである。彼らは自らを危険にさらして

日本の侵略者たちに抗い、ほとんど確実だった根絶の淵から数十万人の中国人難民を救った。この勇氣ある男たちと女たちは南京安全区國際委員會を設立した。これはその物語である。

南京市内に安全区を設立しようという決定は、上海の陥落とほぼ同時に持ち上がった。一九三七年の一月、フランスの宣教師ジャキノ・ド・ベサジュ神父は、侵略してきた日本兵によつて家を破壊された四五万人の中国人を收容するために、上海市内に中立地帯を設定した。長老派教会の牧師W・プラマー・ミルズがベサジュの計画を知つたとき、彼は友人たちに同じような区域を南京にも設立すべきだと示唆した。ミルズと他の二〇人余りの人々（ほとんどはアメリカ人だが、ドイツ人、オランダ人、ロシア人、そして中国人もいた）は、最終的に市の中央部よりやや西側の地域を安全区に指定した。この区域には、南京大学（当時は金陵大学、以下同一訳者）、金陵女子文理学院、アメリカ大使館のほかに多数の中国政府の庁舎が置かれていた。安全区を設立するとき、委員會は日本軍と中国軍の戦闘に巻き込まれる非戦闘員に避難場所を提供しようとしていた。外国人たちの意図は、市が安全に日本軍に掌握されてから数日間から数週間、区域を封鎖しようというものだった。

当初、この考えは一般的には受け入れられなかった。第一に、日本軍はそれを認めることをあからさまに拒絶した。そして、敵軍が接近してくる中で、安全区委員會は友人や家族からだけでなく、中国人、日本人さらには欧米の政府筋からも、直ちに計画を放棄して生命を護るために避難してほしいという緊急の訴えを聞かされた。一二月の始めにはアメリカ大使館の職員が委員区の指導者に向かい、外交官、ジャーナリスト、あるいは欧米人や中国人の避難民が乗り込んで、南京の上流に向かって出帆しようとしているアメリカ砲艦「パネー」号に乗船すべきだと説得した。しかし、安全区の指導者たちは丁重に申し

出を退け、パネー号の外交官たちは最終警告を言い渡した後、残留する外国人たちの運命を彼ら自身の責任に委ね、一九三七年一月九日に出航して去っていった。

興味深いことに、のちにパネー号は日本軍の飛行機に爆撃され、銃撃された。一月二二日の午後、日本軍の飛行機は無警告のままパネー号を撃沈し、二人を殺し、多数を負傷させ、川岸の葦の茂みに隠れていた生存者を皆殺しにするかのように、何度もその上空を旋回した。襲撃の理由は明らかではない。あとになって、日本人は白熱する戦闘で飛行士が冷静な判断力を失い、また霧や煙のためにパネー号のアメリカ国旗が見えなかったのだと主張したが、その後この主張は完全な虚偽であることが立証された（当日は晴天で雲がなかっただけでなく、日本の飛行士はパネー号を爆撃すべしという明示的な命令を受け取っていて、飛行士はその命令に対して激しく抗議し、議論した後、不承不承それを遂行したのである）。今日、爆撃はアメリカ人がどのように反応するかを確かめるためのテストだったという説があり、また日本の軍上層部の政争の結果だったという説もある。しかし、襲撃の背後にどのような理由があったにせよ、南京市は残っている外国人にとつてパネー号よりも安全な場所になったのである。

南京安全区に入った最初の難民は、空爆によつて家を失った人たちや、日本軍の接近に直面して南京近郊の家を放棄した人たちだった。やがて、これら最初の避難民たちでキャンプ地は飽和状態になり、多くの人は追加のキャンプ地が設定されるまで何日間も立ったまま眠ることもできなかったといわれた。市が陥落すると、安全区に寝起きする人間は数千人どころか、数十万人になった。その後の六週間、委員会はこれらの難民が生き残るための必需品、食料、避難場所、そして医療サービスを用意する方策を見つけないければならなかった。また、委員会のメンバーたちは、避難民たちを物理的な危害から保護

しなければならなかった。そのためには、多くの場合、日本軍がなんらかの脅威的な行動を行うことを阻止するための一時的な介入が必要だった。そして彼らは、これらすべての活動を通じて、誰に頼まれたいわけでもないのに、日本人の暴虐を記録し、世界に向けて訴えた。そうすることにより、彼らは自分たちが目撃したものを後世に伝える記録としての証拠を残したのである。

五万人の日本兵が市を踏みにじついているときに、二〇人余りの外国人が行うことができたことを思い起こしてみると、奇跡的だと思わざるを得ない。この男たちあるいは女たちの職業は、宣教師、医師、教授あるいは管理職で、歴戦の軍士官ではなかったということも忘れてはならない。彼らの普段の生活は、奥深く保護されたのんびりとしたものだった。「私たちは裕福ではありませんでした」。ある女性はこの時期について語った。「しかし、僅かな外貨でも中国ではとても役にたちました」。ほとんどは豪邸の奥に住み、大勢の召使によるチームに囲まれていた。

奇妙なことだが、その一〇年前に南京で起きたある事件のために、多くの人は日本人ではなく中国人との間に揉め事が起こることを心配していた。一九二七年に南京にいた人は、国民革命軍が南京に侵入したとき、中国軍が無分別に外国人を殺し、スコニー・ヒルの頂上の家にいたアメリカ領事夫妻をも含む外国人の一团を包囲したことを思い出した（「彼らは私たちを殺すのだろうか」。ある女性がその恐怖のときについて書いている。「彼らは義和団のときのように、私たちを拷問するのだろうか。私たちの目の前で、子どもたちを拷問するのだろうか？ 私は彼らが女としての私にすることについては、考えないようにした」。実際に、一九三七年の虐殺を目撃した一人の外国人は、認めた。「私たちは逃亡する中国人のほうの乱暴を警戒していた。……しかし、けっして日本人に対してではなかった。逆に、日本

人が現われたら平和、静寂そして繁栄が戻ってくると思っていた」。

この時期のアメリカ人とヨーロッパ人の英雄的な努力は枚挙に暇がない（彼らの日記は何千ページにもなる）ので、彼らの行為をすべてここで語るのとは不可能である。この理由により、私はドイツ人のビジネスマン、アメリカ人の外科医、そしてアメリカ人のミッシェン・スクール教授の三人の行為に対象を絞ることにした。大筋では、三人に、大きく異なるところはない。

### 南京を救ったナチ党员

多分、南京大虐殺に関連して見つけることができる最も魅力的な人格は、ドイツのビジネスマンのジョン・ラーベだろう。市内のほとんどの中国人にとって、彼は英雄で、「南京の生き仏様<sup>いぼじやま</sup>」で、数十万人の中国人の生命を救った国際安全区の伝説的な指導者だった。しかし、日本人にとっては、彼は奇妙で理解しがたい救助者だった。彼はドイツ国籍であり日本の同盟国の市民であるだけでなく、南京のナチ党の指導者だったのである。

一九九六年からジョン・ラーベの人生を調査してきた私は、大虐殺のときに彼と他のナチ党员が書いていた数千ページにおよぶ日記を発掘することができた。これらの日記を調べた結果、私はジョン・ラーベがまさしく「中国のオズカー・シンドラ」だったという結論に行き着いた。

大虐殺以前のラーベは、比較的平和でやや旅の多い人生を過ごしてきた。彼は一八八二年一月二三日に、船長の息子として、ドイツのハンブルクに生まれた。ハンブルクでの徒弟修業を終えたのち、彼はアフリカで数年間働き、一九〇八年に中国に移り、ジーメンス中国本社の北京事務所に職を得た。



一九三一年に彼は南京事務所に転動になり、中国政府に電話機や電気製品を販売していた。はげ頭で眼鏡をかけ、保守的なスーツに蝶ネクタイをしめた彼は、市内の典型的な中年のビジネスマンだった。彼はすぐに南京のドイツ人社会の重鎮になり、小学生と中学生のために、自分でドイツ人学校の運営を担うようになった。

やがて、ラーベはナチズムの忠実な支持者になり、南京市のナチ党の指導者になった。一九三八年に彼はドイツ人の聴衆に語った。「私は我々の政治制度の正しさを信じているだけでなく、党员として、この制度を一〇〇パーセント支持しています」。

数十年後、彼の孫娘のウルスラ・ラインハルトは、ラーベは基本的にナチ党を社会主義組織と見ていて、ドイツにおけるユダヤ人や他の少数民族グループに対する迫害を支持しなかったと主張する。これは確かに真実のように思える。南京でのさまざまな省庁への訪問で、彼は何度も彼のナチ哲学を社会主義の用語で要約している。「我々は労働者の戦士で、労働者の政府で、労働者の友人です。我々は困難なときにもけつして労働者を見捨てません」。

ドイツ国籍の同僚たちのほとんどが、友人や大使館職員の忠告を聞いて日本軍が城門に到達するよりも遙か以前に中国をあとにしたとき、ラーベはとどまる路を選び、やがて安全区の代表に選ばれた。事実、日本大使館の職員が彼を訪れ、その地を去るよう、ずっと強く求めても、彼は残留した。南京陥落時に上司から彼を保護するために派遣された日本軍の岡少佐は彼に尋ねた。「いったいなぜここに残っているのですか？　なんのために我々の軍事にちよっかいを出しませんですかね？　あなたになんの関係があるというんですか？　あなたはここで何かをなくしたわけではないでしょう！」

ラーベはしばらく口をつぐんでいたが、このように、岡に答えた。「私はここ中国に三〇年住み、子や孫もここで生まれました。私はここで幸せだったし、成功もしました。私は中国の人々にいつもよくしてもらってきましたし、戦争のときでさえそうでした。もし、私が日本に三〇年間住み、日本の人たちと同じようによくしてもらっていたら、誓って言いますが、現在中国が直面しているような非常事態のときに、日本の人々を見捨てることはないでしょう」。

この答えは忠節の概念を尊重する日本の少佐を満足させた。「彼は後ろに一步下がら、武士道の義務に関する言葉を口にして、ふかぶかと頭を下げました」。

ラーベはこのように書いている。

しかし、ラーベが自分の身を守るために南京を去るという道を選択しなかったのは、個人的な理由だけによるものではなかった。彼は中国人の従業員の安全に対する責任を感じていたのである。ジーメンズの機械技術者である中国人従業員のチームは、市の主要な発電所のタービンから、すべての庁舎の電話と時計、交番と銀行の警報、そして中央病院の巨大なレントゲン設備までの保守点検を担っていた。「もし自分が見捨てたら、この人たちはみな、殺されたり、ひどい目にあわされたりするのではないかと……私にはそんな予感がありました。事実、それは正しかったのです」とラーベは書いている。

その年の早くから、南京にいたラーベは数えきれないほどの空襲を受け、小さな防空壕に身を潜め、小さな厚板で辛くも身を護っていた。衣服も不足していた。特に、ラーベがひとつの間違いをしでかし

てしまつてからは、深刻だった。九月末のことである。ラーベはドイツ国籍の人が南京から発つときに使用していた船であるクトゥー号に、保管のために衣装ダンスごと積み込んだ。ところが、クトゥー号が漢口に着いたとき、宛先指定のない荷物は投棄され、そのためラーベのスーツは二着だけになつてしまつた。しかも、そのうちの一着を、ラーベは彼自身よりもつとそれを必要としていたと思つた難民に譲つてしまつた。

しかし、彼の最大の関心は自分自身の個人的な安全や幸福ではなく、安全区の設立にあつた。委員会のメンバーは安全区がいかなる軍事行動からも除外されることを望んでいたが、日本軍はそこが中立地帯であると認めることを拒絶した。他方、委員会は唐生智配下の人員をその地区から追い出すことが不可能であることに気づいた。それは、唐自身の別荘がその区域内にあつたからである。ラーベにとつて、中国軍が区域から撤退することを拒んだだけでなく、地区の中に砲台を設置しようとしたことは、最後の一線を越えるものだった。かんしゃくを起こしたラーベは、唐が即座にその区域から撤退しないならば、安全区の代表の座を辞し、その理由を世界に向けて公表すると脅した。

「彼らは私の希望を尊重すると約束したが履行自体には多少時間がかかると言つた」とラーベは書いている。

ラーベは、上層の権威の助けを借りる必要性を感じた。一月二五日に、彼はアドルフ・ヒトラーに電報を打ち、総統に「非戦闘員の中立区域設置の件に関する日本政府への好意あるお取りなしをいたたくよう」要請した。同時にラーベは友人であるクリーベル総領事にも電報を送つた。「本日私が総統へお願いいたしました……お取りなしについて、貴殿のご尽力を心よりお願いする次第です。さもないと、

目前に迫った戦闘での恐るべき流血が避けられません。ハイル・ヒトラー！ ジーメンス南京および国際委員会代表ラーベ」

ヒトラーからもクリーベルからも返事はなかったが、間もなくラーベは日本の爆撃のパターンが少し変化したのに気づいた。電報を送る前は、日本軍の飛行機は南京全域を無差別に爆撃していた。送信後、彼らは軍事学校、滑走路、あるいは兵器庫といった軍事目標だけを攻撃するようになった。ラーベは書いた。「これは私の電報のおかげだということになり、とりわけアメリカ人たちは大いに感じるところがあったようでした」。

しかし、彼の勝利は次から次へと発生する危機を受けて、長続きしなかった。当初、ラーベと彼の同僚は安全区内の建物を最も貧しい人たちのために確保しようと望んでいた。人々が殺到するのを避けるため、委員会は市内のいたるところで、難民に、自分たちの友人の家を借りることを強く求めるポスターを貼った。しかし、二・五平方マイルの区域に余りにも多数の人々が押しかけたので、すぐにラーベは最悪の想定よりも五万人も多い居住者がその地区にいるのを知った。難民は建物内に詰め込まれていただけでなく、芝生や溝や防空壕に溢れ出した。幾組もの家族が野外の街路で眠り、アメリカ大使館の横にはむしろで作られた住居がきのこのように立ち並んだ。市が陥落する前に、白線と、立ち並ぶ白い旗および赤い丸の中に赤い十字の記号が示された布で境界を区切られた安全区は、二五万人の難民が溢れ返る「人間の蜂の巣」のようになった。

衛生問題は別の悪夢をもたらした。キャンプ内の汚物、特に便所のひどい状態は、ラーベを激怒させ、

彼が激しい演説をした結果、ジーメンズ社の敷地内の難民センターの状態は許容できる程度に改善された。後に、ラーベがジーメンズのキャンプを視察したとき、彼は便所の状態がよくなっていただけでなく、ジーメンズ社の敷地にある壁がすべて修理されていることに気づいた。「ここに使われたあたらしいきれいな煉瓦がどこからきたのか、だれも私にあかそうとしませんでしたが、ちかくにある建築中の建物がびっくりするほど低くなったのに気づきました」。ラーベは書いています。

だが、食料の不足は安全区の指導者の最大の頭痛の種になった。二月初めに、南京市長は安全区の人々を養うために三万担（二千トン）の米と一万袋の小麦粉を寄付した。しかし、食料は市の外側に置かれ、委員会にはそれを安全区内に運び込むのに必要なトラックがなかった。中国軍はすでに二万人の人員と五千箱の故宮博物館の財宝を市から運び出すために、ほとんどの車両を徴発していた。死に物狂いの市民や個々の兵士たちが、残りのほぼ全部を盗み取った。他の選択肢がない中で、ラーベとその他の外国人たちは、少しでも多くの米を安全区内に運び込もうと、必死になって自分の自動車で南京市内を駆け巡った。日本軍が市を砲撃する中で、外国人たちは輸送を続けていた。一人の運転手は実際に砲弾の破片によって、片目を失った。結局、安全区の指導者たちは寄付された食料全体の中の一部分だけ、一万担の米と一千袋の小麦粉だけしか確保できなかったが、この食料は安全区の難民たちの飢えを食い止めるのに、大いに役に立った。

一二月九日に目前に迫る恐ろしい状況を認識した委員会は、三日間の休戦（第三章参照）を交渉した。その間は日本軍がそのままの場所に留まり、中国軍は城外に平和裡に撤退する。しかし、蒋介石は休戦

に同意せず、日本軍の翌日からの南京に対する激的な砲撃を促すことになった。一月二二日に、委員会は再び中国軍の申し出を受け、今回は降伏するといふものだったが、この計画も失敗した。

そのような状況の下、その日のラーベには事態の成り行きを見つめながら待つこと以外にできることはなかった。彼は目の前の出来事の推移を刻々と記録している。彼は一月二二日の午後六時三〇分の日記に書いた。「紫禁山の砲はひっきりなしに轟いている。あたりいちめん、閃光と轟音。突然、山がすっぽり炎につつまれた。どこだかわからないが、家や火薬庫が火事になったのだ」。そのとき、ラーベは市の運命を予告する中国の古い言葉を思い出した。「紫禁山の燃える日、それは南京最後の日。昔からそういうではないか」。

午後八時、ラーベは市の南の空が炎で赤くなっているのを見ていた。そのとき、彼は家の両側の門を必死になって叩いている音を聞いた。中国人の女性や子どもたちが、中に入れてくれるように懇願し、男たちは彼のドイツ人学校のうしろの門壁をよじ登り、人々が彼の庭の溝の中にうずくまり、彼の所有地に爆撃しようとする飛行士に警告するために広げられていた巨大なドイツ国旗の下にまでもぐりこんでいた。泣き声と門を叩く音は、ラーベの忍耐の限度をこえるほどにまで大きくなった。彼は門を開けて、群集の中に入った。しかし、夜が更けるにつれて物音は大きくなる一方だった。ラーベは鋼鉄のヘルメットをかぶって、庭中を歩き回り、だれかれなしに静かにしろと怒鳴りつけた。

午後一時半、ラーベは驚くべき訪問者を迎えた。それはクリスチャン・クレীগーで、彼はドイツの技術企業カルロヴェイツツ商会に勤務する三〇代半ばのナチ黨員だった。長身で金髪のこの技術者は、大きな製鉄所を建設するためにはるばる中国にまでやって来たのだが、ラーベと同じように、南京の異

常事態に巻き込まれたのだった。国際委員会はクレーガーを会計担当に任命した。

クレーガーがラーベ宅に立ち寄ったのは、中山路には中国軍が撤退時に捨てた兵器や物資が散乱していることを告げるためだった。

ある人はバスを放棄して、それを二〇ドルで売りに出しているという。

「どう思いますか、誰か買う人がいるだろうか」

「しかしクリスチャン、どうやって？」ラーベは言った。

「まあ、私はその男に明日、私の事務所に来るよういつてあります」

最終的に、彼の家の周りの騒音は少なくなつて行つた。二日間、衣服を着替える暇もなく疲れきつていたラーベはベッドに倒れこみ、彼が知り、愛してきた周囲の社会が崩壊していく中で、自分をくつろがせようと努力した。彼は交通部の庁舎が焼け落ち、市がいつ陥落してもおかしくない状態であることを知つていた。ラーベは、今の状態からは物事がこれ以上悪くなることはなく、よい方向に向かうしかないのだと自分に言い聞かせた。中国人の同僚たちが彼に言った。「日本人を恐れる必要はありませんよ。彼らが全市を掌握したら、平和と秩序が戻るでしょう。上海までの鉄道もすぐに再建され開通するし、商店も正常な状態に戻るでしょう」。眠りに落ちる前に、ラーベは考えた。「最悪の状態が克服されつつあることについて、神に感謝します！」

翌朝、再び空襲の音で目覚めた。明らかにすべての中国軍が市を追われたわけではないのだ。彼はそ

う考えた。時刻は午前五時だったので、ラーベは再び横になった。市内の他の人々と同様、ラーベは空襲にさらされ続けたために、爆発には驚かなくなっていた。

その日の朝、少し時間が経ってから、ラーベは市内に出かけて、損害の状況を調べた。街路にはおびただしい中国人の死体が転がっていて、彼らの多くは民間人で背中を撃たれていた。彼は日本兵の集団がドイツのコーヒー店に押し入ろうとしているのを見た。ラーベが店にかかるドイツ国旗を示して彼らを叱責すると、英語を話す日本兵が逆切れして言った。「俺たちは腹ぺこなんだ！ 文句があるのならば、日本大使館に行け。代金はそこで支払うだろう」。また、日本兵はラーベに、補給部隊がまだ到着していないこと、たとえそれが到着しても、十分な食物を得られるとは期待していないということと話した。後にラーベは、兵士たちがコーヒー店を略奪した後、放火したことを知った。

もつと悪い事態が訪れた。ラーベは遠くに北に向かって行進する日本兵を見た。彼らは南京の南部から市の残りの地区を占領しようとして行進していたのである。すぐにラーベは、彼らを避けるために北に向かつて自動車走らせ、市の幹線道路である中山路に着くと、外務省内の赤十字病院に停車した。中国人職員は建物から逃亡していて、あらゆる場所に死体があった。部屋にも、廊下にも、病院の出口にさえも、死体が詰まっていた。

その日、ラーベは残留している中国軍に出会った。彼らは安全に揚子江を渡ることができずに行き場を失い落伍した人たちで、餓えて疲れきっていた。山西路のロータリーを通り抜けようとしたときに、彼は四〇〇名の中国軍部隊に会った。彼らはみな、まだ武装していて、日本軍が進んでくる方向に向かつて行進していた。ラーベが突然の「人道主義的な衝動」に駆られたのはそのときだった。この衝動は、



その後、数年間ではないとしても、数ヶ月間はずっと彼の良心にずっとつきまといつていくものだった。ラーベは中国兵たちに、南に日本軍の部隊がいることを知らせ、さらに機関銃を捨て、安全区の難民に加わるよう勧めた。短い議論の後、彼らはラーベにしたがって安全区に入ることに同意した。

同じように、何百人もの中国兵が市の北部に閉じ込められ、川を渡る脱出路を確保することができないことに気づいたとき、多くは死から逃れようと安全区に乱入し、アメリカ人とヨーロッパ人の管理者に生命を救ってくれるよう懇願した。委員会のメンバーには彼らを助けるべきかどうか分からなかった。いずれにしろ、委員会は兵士たちのためではなく民間人のための避難所を設立したのである。委員会はこの問題を日本軍の司令部に訴えてジレンマを解決しようとしたが、漢中路の大尉より上の人間には接触できなかった。

結局、兵士たちの窮状に動かされた委員会は彼らの嘆願に押し切られた。彼らは、ラーベと同じように、兵士たちが武器を捨てれば、日本人は兵士たちを慈悲深く扱うかもしれないと説得した。そのようにして、彼らは兵士たちの武装解除を手伝い、彼らを、中立地帯のあちこちの建物で民間人と混ぜておくことにした。

翌日、ラーベはこの状態を日本軍司令官に説明する長い手紙を書いた。彼は日本人が元兵士に対して慈悲深くなり、戦時国際法に準じて人道的に取り扱うように懇願した。これに応え、ある日本軍の士官はラーベに中国兵の生命を救うことを約束して、ラーベを安心させた。

しかし、日本軍がラーベを裏切り、武装解除した兵士たちを連行して処刑し始めたときに、ラーベの安心は恐怖に変わった。もしラーベが日本軍には数十万人の民間人から元兵士を見分けることができな

いのではないかと期待していたとするならば、それは重大な誤りだったといえる。日本人は毎日銃を使用している人の指のある特定の場所にはたがができることを知っていて、彼らの手を検査することによつてほとんどすべての元兵士たちを見つけ出してしまった。彼らは肩に背囊の痕がついていないか、額や髪型に軍帽の痕がついていないかどうか、あるいは長期の行軍による靴擦れができていないかどうかも調べた。

一二月一四日の夜に開かれたスタッフ会議で、委員会は日本人が安全区の本部に近い地域から一、三〇〇人を連行して銃殺したことを確認した。「彼らの多くが元兵士だったことは知っていたが、ラーベはある士官から、彼らの生命を救ってもらえるという約束を得ていた」。Y M C A代表のジョージ・フィッチはこの出来事について日記に書いている。「そのとき、彼らがしていることが完全に明らかになった。銃剣を構えた兵士たちにより、百人ぐらいつの集団でロープに繋がれた男たちが並ばされていた。帽子を被っていたものは乱暴にそれを引き剥がされ、地面に投げ棄てられた。ヘッドライトに照らされている中で、私たちは彼らが破滅に向かつて行進して去っていくのを見つめていた」。

「果たして自分にそんなことをする権利があったのだろうか？ あれでよかつたのだろうか？」ラーベは兵士たちを安全区に収容した自分の決断について書いている。

その後の数日間、ラーベは救いようのない気持ちで、日本人がさらに何千もの兵士たちを安全区から引き摺り出して処刑するのを見ていた。日本人は、たとえば、人力車の車夫、手工業の職人、あるいは警察官たちなど、たまたま指や額や足にたこのある無関係な男たちを何千人も殺した。後にラーベは、

市内にあった仏教系の慈善団体である紅卍字会がひとつの沼だけから一二〇体以上の死体を回収したのを目撃した（後の報告書で、ラーベは南京のいくつかの池が多数の死体が埋められたために消滅したと指摘した）。

国際委員会の代表であるとともに、日本の当局に対する確かな一定の重みのあるナチ党の地区代表として、ラーベは日本大使館に手紙を書き、送りつづけた。当初、彼はドイツ国民でナチ党の指導者として彼が意識している義務、つまり日独両国大使館の間の良い関係を維持しなければならないという義務のために、自分の怒りを抑制し、慎重に丁寧さを保っていた。彼は委員会のアメリカ人のメンバーが書いた日本大使館への書簡を彼が見直し、その中に「いくらかの蜜を加える」ことを認めてくれるよう頼んだ。

一方、日本の外交官たちはラーベの書簡と訪問を、上品な微笑と役人としての慇懃な態度で受け入れた。しかし、ラーベはいつも同じ答えを聞かされるだけだった。「軍当局に報告します」。その後、毎日、生々しい虐殺行為の無慈悲な猛攻が吹き荒れる中で、ラーベが日本人に送る書簡は、憤激の叫びが滲み出した手厳しいものになっていった。

市内に、現在、残っている二七人の西欧人と、中国人の住民のすべてが、あなた方の兵士たちによって一二月一四日から始まった、強盗、略奪そして殺人の統治に、完全に驚愕しきつていきます。

安全区内にも入口にも、日本のパトロール兵は一人もいません。

昨日、白昼の下、ミッシヨン・スクールの何人かの女性たちが、多数の男性、女性、子どもたちでいっぱいになっていた広い部屋の中で強姦されました！ 私たち二二名の西欧人には、二〇万人の中国の民間人に食料を与え、さらに彼らを保護することはできません。それは日本の当局の義務のほうです。あなた方が彼らを保護してくれば、私たちは食料の提供を手伝うことができます。

このような暴虐が続けられるのならば、最低限の公共活動を復旧するための作業員を見つけることも、ほとんど不可能になるでしょう。

ラーベや他の国際委員会のメンバーは、徐々に、外交官たちの回答の真意を読み解けるようになった。発砲を命じているのは大使館ではなく軍なのだ。日本大使館の秘書官福田篤泰は、ラーベに何度も言った。「軍部は南京を踏みじろうとしています。けれども大使館員の我々はなんとかしてそれを防ぎたいと考えています！」。実際に、荒れ狂う大虐殺の中で、ある大使館員は国際委員会に、事実を日本で直接公表し日本の世論の圧力で日本政府に何らかの措置を講じさせたらどうかと示唆した。しかし、同時に、別の大使館職員はラーベに「新聞記者に不利なことを話せば、日本軍全体を敵に回すことになりませんよ」と言って、沈黙を守るよう迫った。

最後には、同盟国の政府関係者であるという立場だけを自己防衛の手段として、ラーベは、現在から見ると考えられないようなことを始めた。彼は、市内を彷徨して、自分で虐殺を防ごうとしたのである。

ラーベが市内を自動車で走っていると、必ず誰かが飛び出してきて、自動車を停めさせ、現に行われている強姦をやめさせるよう懇願した。たいていの場合、強姦されているのは、妹であり、妻であり、あるいは娘だった。ラーベは彼を自動車に乗せ、強姦の現場に案内させた。あるときには、獲物を捨てて逃走する日本兵を追いかけ回し、あるときには少女の上にかぶさっている日本兵の身体を持ち上げて引き離れた。彼は、このような冒険が非常に危険であることを知っていた（「日本兵は拳銃と銃剣をもっていました。……私にはナチのバッジとハーケンクロイツの腕章しかなかったのですから」。彼はヒトラーへの上申書に書いている）。しかし、彼の行為を妨げるものは何もなかった。生命の危険すら、彼を思いとどまらすことにはならなかった。

一九三八年一月一日付けの彼の日記は典型的にこの事情を物語っている。「若い魅力的な少女の母親が私のところに来て、ひざまずいて泣きながら、彼女を助けてほしいと言った。（家に）はいると、真っ裸になった日本兵が狂ったように泣き叫ぶ少女にのしかかっていた。私はこの恥知らずの豚野郎に向け、彼が理解できる言葉で叫んだ。『新年おめでとう』。彼は、裸のままパンツをつかんで逃げていった」。

ラーベは市内の暴行にぞっとしていた。彼が通る街路には強姦され、切断された多数の女性の死体が、焼け焦げた彼女らの家の前に転がっていた。「三人から一〇人くらいずつ徒党を組んだ兵士たちが街や安全区を闊歩しはじめ、手当たり次第に略奪しました」。ラーベはヒトラーへの上申書に書いている。

彼らは女性や少女を強姦し続け、少しでも抵抗するものや、彼らから逃げ出そうとするもの、あるいは単に運悪くその時刻にその場所に居合わせた人間を見境なく殺し続けました。八歳に満たない少女から七〇歳を超える女性までが強姦され、最も残忍な方法で、殴り倒され、打ち据えられました。私たちはビール瓶で辱められた女性の死体や、竹の棒を突き刺された死体を見つけました。これらの犠牲者を私はこの目で見たのです。いまわの際の彼女らとも口もききました。これらの死体を鼓樓病院の遺体安置所に運ばせ、私は自分自身で、これらの報告が真実に基づいたものだということを確かめました。

ラーベが愛してきた都市の焼け焦げた残骸の間を歩いていくと、ほとんどすべての通りの角に、美しい日本軍のポスターが貼ってあるのが見え、それを讀むと、「日本軍を信じなさい。日本軍はあなた方を保護し、食料を与えます」と書いてあった。

中国人の生命を救うために、ラーベは可能な限りの人々を受け入れ、自分の家と事務所をジーマンスの従業員とその家族のための避難場所に変えた。また、何百人もの中国女性を自分の所有地に匿い、彼女らが裏庭の小さな藁小屋に住むことを許した。これらの女性たちとともに、ラーベは彼女たちを日本の強姦者から護るための警報システムを作り上げた。日本兵が彼の敷地の壁によじ登ってきたら、女性たちはホイッスルを鳴らし、ラーベを庭に送り出して犯罪者を追い払った。このような事件は非常に頻繁に起こったので、ラーベはほとんど、夜間には自分の家を出なかった。彼がいなくなると、日本の侵

入者たちが強姦の狂宴を始めるのではないかと恐れたのである。ラーベは日本軍の将校たちにこの状態を訴えたが、彼らは問題を真剣に考えようとしなかった。ラーベが裏庭の藁小屋のひとつで女性を襲っていた兵士を捕らえたときにさえ、軍将校は強姦犯を平手打ちにしかただけで、それ以上には罰しようとしなかった。

二〇人余りの人間で数十万人の市民を五万人以上の日本兵から護るためにできることの無力さについてラーベは苛立ちを感じていたかもしれないが、それを表に出すことはなかった。彼は、日本人にはけつして弱みを見せず、「堂々たる態度と迫力」で彼らを圧倒しなければならぬことを知っていた。

幸運なことに、ナチ党员という彼の立場は、かなりの日本兵に、少なくとも彼の目の前では、それ以上の乱暴を犯すことを躊躇させた。地区YMCA書記のジョージ・フィッチは書いている。「彼らの誰かが反論すると、(ラーベは)彼のナチ党の腕章を突き出し、かの国の最高の徽章を示して、これが何を意味しているか君らに分かるかと尋ねた。いつでも、てきめんの効果だった！」日本兵はこの南京のナチを尊敬しているようだったし、ときには、畏れているようにさえ見えた。日本の兵卒たちはアメリカ人に対しては、殴りつけたり、銃剣で攻撃したり、ひどい場合には宣教師を階段から突き落とすようなことをしても平気だった。ところが、ラーベや彼の国の同僚に対する場合、彼らは十分に自制的に行動した。たとえば、強姦と略奪の最中の日本兵たちがエドゥアルト・シュペアリングのハーケンクロイツの腕章を見て「ドイツだ！ ドイツだ！」と叫び、逃げていったということもあった。あるいは、ハーケンクロイツがラーベの命を救ったと思われる事件もあった。ある日の晩、日本兵が彼の敷地内に押し入

り、ラーベは懐中電灯を手に彼らに向き合つた。彼らの一人が拳銃に手を伸ばし、ラーベを撃とうとしているようだったが、「ドイツ關係に発砲するのは割に合わないことだ」と思い直したようで、断念した。日本人がラーベを尊敬していたとするのならば、中国人の難民たちは彼を崇拜していた。彼らにとつて、ラーベは性奴隷にされる娘たちや、機関銃で撃ち殺される息子たちを救い出してくれた人だった。安全区の難民キャンプではラーベがいることだけで大騒動になることもあつた。ある日、ラーベが安全区を訪れると、何千もの中国人女性が彼の前に身を伏せ、泣きながら保護を請い、安全区を去つて強姦され、拷問されるのならば、その場で自殺すると訴えた。

ラーベは、暴虐という嵐の只中にいる難民たちが生きる希望を持ちつづけられるよう、気を遣い努力した。彼は裏庭に住む難民の女性が生んだ子どものささやかな誕生祝の会を催した。産まれた男の子は一〇ドルのお祝いを受け取り、女の子は九・五ドルのお祝いを贈られた（ラーベはヒトラーへの上申書で説明している。「中国では女の子は男の子ほど値打ちがないのです」。多くの場合、男の子が産まれると「ラーベ」の名前をもらい、女の子が産まれると彼の妻の名前をもらつて、「ドーラ」と名づけられた。

最終的に、ラーベの勇氣と寛大さは、国際委員会のほかのメンバーの尊敬を勝ち取つた。ナチズムには根本的に対立しているメンバーも例外ではなかつた。ジョージ・フィッチは友人への書簡で、ラーベや南京の他のドイツ人との友情を保つために「ナチのバッジを身につけようかとさえ」思つたとまで言つている。ナチズムとはいかなる意味でも相容れないロバート・ウィルソン博士でさえも、家族への手紙の中でラーベへの賛歌を書いている。「彼はナチの社会では突出している。この教週間の彼との緊密な付き合いを経てから、彼がどんなにか素晴らしい人間かを知り、恐ろしいほど素敵な心を持つてゐること



を発見した。彼の人格と、總統への追従の間の食い違いを説明することは難しい」。

### 南京でただ一人の外科医

すべての外科医が去つていつた南京にロバート・ウイルソンが残つたのは驚くべきことではない。南京は、彼が生まれ、少年時代を過ごした場所で、彼の心にはそこが特別な場所であるという思いが常に刻みつけられていた。一九〇四年に生まれたウイルソンは、南京の教育機関の設立に大きく貢献してきたメソジスト派の宣教師の家庭で育てられた。彼のおじジョン・ファークソンは南京大学の創立者である。彼の父は市の叙任牧師で中学校の指導員としても働いていた。彼の母は大学教育を受けたギリシヤ人の学者で、複数の言語を流暢に話し、宣教師の子女のための学校を経営していた。ロバート・ウイルソンは一〇代の時期に、後に中国を素材にした文学作品でノーベル賞を受けたパール・バックに幾何学を学んでいる。このような環境下で成長し、卓抜した知的能力を示したロバート・ウイルソンは、一七歳のときにプリンストン大学の奨学生資格を獲得した。大学卒業後、コネティカットの高校で二年間ラテン語と数学を教え、ハーヴァードの医学部に転入し、ついでニューヨークの聖路加病院のインターンを務め、そこで看護婦長に求婚して結婚した。しかし、彼は、アメリカ合衆国でのキャリアを求めるよりも、自分の将来の場所を生まれ故郷の南京に置こうと決心し、一九三五年に新婦を伴つて、南京に戻り、南京大学病院の医師として働くことになった。

南京でのウイルソン夫妻の最初の二年間は、おそらく彼らの人生における最も牧歌的な時期だっただろう。魅力的な時間がゆっくりと流れていた。ほかの宣教師夫妻と晚餐を取り、外国大使館の優雅な茶

会やレセプションに参加し、郊外の広大な別荘での専用の料理人や召使がいるパーティーに招かれた。夕方には、中国の古典を漢文で読み、自分の知識を深めるために家庭教師の個人教授を受けた。毎週、水曜日の午後はテニスに興じた。時には、妻と連れ立って湖に行き、船上で食事をし、赤い蓮の花が咲く水辺を散歩して、芳しい空気を吸った。

しかし、戦争はウイルソン夫妻が南京で満喫していた悠久の静かな時間を永遠に打ち砕いてしまった。七月の盧溝橋事件の後、日本の毒ガス攻撃を恐れた南京の人々は、外出するときに層を重ねたガーズに化学溶剤を浸したガスマスクを持ち歩くようになった。日本軍が南京の空爆を開始した一九三七年八月より前に、彼の妻マージョリーは幼い娘エリザベスとともに砲艦に乗船し、無事、牯客に移っていた。しかし、ウイルソンは、戦争が続くと妻子が路頭に迷いはしないかと案じて、アメリカに戻るべきだと説得した。ウイルソン夫人はその意向に従い、ニューヨークに戻って聖路加病院に勤務し、彼女の母親が幼子の世話をした。しかし、ウイルソン博士自身が南京に止まることにはいかなる疑問もなかった。「彼はそのことを義務だと思っていました。中国人は彼の仲間だったのです」。ほぼ六〇年も経った後で、彼の妻は回想した。

その秋、孤独を紛らわすために、ウイルソンは、パール・バックの前の夫であるJ・ロッシング・バックの家に移ったが、やがてその家は彼の友だちでいっぱいになった。それは外科医のリチャード・ブラデー、連合キリスト教伝教団のジェイムズ・マツカラムといった人々で、彼らは後に南京安全区の国際委員会のメンバーとして働いた。彼らの多くは、ウイルソンと同じように妻子を南京から避難させていた。

患者の世話で忙殺されていないときに、ウイルソンはたびたび家族に手紙を書いた。ほとんどの手紙には日本軍の空爆の被害者の身の毛もよだつ描写が含まれていた。それは、たとえば、うずくまった少女の背中が爆撃され、臀部がえぐられたというような恐ろしい情景だった。彼は死傷者から爆弾の破片や銃弾を大量に摘出したので、戦争が終わる前に「立派な博物館」を開くことができそうだと、手紙の中で皮肉った。

日本軍は、病院を爆撃しても、少しも心痛を感じないことをウイルソンは知っていたが、病院に通つて勤務を続けた。九月二五日に、南京が経験した最悪の空爆のひとつといえる激しい攻撃を受けたときには、日本軍は、屋上に大きな赤十字がはつきりとペンキで描かれている中央病院と衛生部に、二つの千ポンド爆弾を投下した。爆弾は一〇〇人の医師と看護婦が隠れていた防空壕の僅か五〇フィート（約一五メートル）先に落ちた。

ウイルソンは、日本軍の爆撃を誘導する危険性を最小化するために、できる限りの手を打った。窓は、日本の飛行士から室内の灯りを遮るために、黒い厚手のカーテンで閉ざされた。しかし、市内では、夜間に赤や緑のカンテラで飛行士を重要目標に導くスパイがいるという噂がささやかれていた。ある日の空爆のときに、緑色や黒色の覆いではなく赤い覆いを被せた懐中電灯を持った部外者がこつそりと病院に入り込み、毒ガスの浸透を防ぐために頑丈に閉じられていた窓を開けようとして、人々の疑念を掻き立てた。彼が中国軍の飛行士の入院患者に中国軍の爆撃機の飛行高度や航続距離を尋ねたときには、人々は眉をつりあげた。

秋の訪れが迫った頃、ウイルソンは自分が怖しいほど働きすぎていることに気がついた。以前に比べ

ると、はるか多数の人々が医療の世話を必要としていた。日本軍の空爆による民間人の犠牲者に、上海から戻ってきた兵士たちが加わっていた。上海から蕪湖までの地域の病院には、およそ一〇万人の中国軍負傷兵がいた。南京北部の近郊の下関では、列車が到着するたびに、駅にこれらの負傷兵が降ろされた。あるものは駅の床に倒れこんだまま死に、他のものはあてもなく足を引き摺りながら市内を歩き回った。回復したものは前線に戻ったが、脚や腕を失うなど、ひどい障害を受けて回復を見込めない者は、二ドルの補償金と家に戻れという命令を受け取って解放された。ほとんどの兵士の故郷は遠く離れたところにあつた。そこに行き着くだけの金銭や体力を持っていない人はいなかった。指導者に見捨てられた中国の兵士たち、失明し、脚を失い、負傷や感染によって消耗しきつた彼らは、通りで物乞いをするしかなかった。

状況が悪化するに反比例して、病院の職員数は減少していった。中国人の医師と看護婦は、西方に移動する数十万人の南京住民に加わって、逃げ去っていった。ウイルソンは能力の限りを尽くし、交戦法規の下では、市の陥落後のことを怖れる必要はないのだと主張して、彼の医療スタッフが立ち去ることを思いとどまるよう説得した。しかし、結局のところ、ウイルソンには彼らに残ることを決心させることはできなかった。一二月の最初の週末には、南京大学病院の医師は三人だけになった。ロバート・ウイルソンとC・S・トリマー、そして中国人医師の三人である。アメリカ人の外科医リチャード・プレイデリーの牯峇にいた娘が重病になり、ウイルソンを除けば最後の外科医だったブレイデリーが南京を去ったときに、ウイルソンは、南京に残された本格的な切除手術を執刀できる唯一の人物になった。二月七日に彼は書いた。「戦争に引き裂かれた巨大な都市で、ただ一人の外科医になったというのは、も

のすごいことだ」。

その一週間後に、ウイルソンが命を落とす寸前の事件が起こった。一月一三日の午後、彼は爆弾によつて眼に重傷を負つた患者に難しい手術を施すことにした。ウイルソンは一方の眼を救うために、片方の目に残っているものを除去しなければならなかった。眼球を半分取り出したときだった。ウイルソンから五〇ヤード（約四五メートル——訳者）離れた地点に着弾して爆発し、窓が打ち砕かれ、室内に砲弾の破片が飛び散つた。誰も死ななかつたし、怪我もしなかつたが、ウイルソンは看護婦たちが「当然、ひどく震えている」のに気づいた。彼女らは手術を続けなければならぬかどうかを知りたがつた。「もちろん続ける以外に方法はなかつたのだが、あれほど早く摘出された眼球はなかつたと思う」。ウイルソンは書いている。

一月一三日の夜が更ける前に、日本軍は歴史ある首都を完全に掌握した。ウイルソンは市の至る所に日本の旗がはためいているのを見た。翌日、征服者の軍隊は市内の病院を接収し始めた。彼らは、外交部の敷地内にあり、赤十字の支部を組織していた安全区のメンバーの管理下にあつた、中国軍の主な病院に乱入し、中にいた何百人もの中国兵を捕虜にした。日本人は医師が病院内に入ることも、負傷した兵士に食物を送ることも許さなかつた。その後、負傷兵たちは連れ出されて、組織的に射殺された。四つの赤十字病院のうちの三つがこのような形で日本軍の手に落ちた後に、国際委員会はその労力を南京大学病院に集中させることにした。

占領直後の数日間、ウイルソンは日本兵が市を略奪し、放火するのを見ていた。日本兵が南京大学病院で略奪を行うのを見て、自分が彼らの窃盗行為を止められないのに苛立ち、看護婦からカメラを取り

上げようとしている兵士に対し、心の中で「すばやいケリ」を入れた。また、彼は兵士たちが通りで樂器を積み上げて火をつけているのを見て、こうした財産の破壊は南京の人々にあとで日本製品を買わせるための策略ではないかと疑った。

彼は自分の家が荒らされている場面も目撃している。損害を調べるようと危険を冒して家に戻ったときに、彼は三人の日本兵が家で略奪を行っている現場に遭遇した。彼らは屋根裏部屋に侵入し、大きなトランクを開き、中身を床いっぱい撒き散らしていた。ウイルソンが入ってきたとき、一人の兵士は顕微鏡を覗き込んでいた。彼を見ると、兵士たちは階段を駆け下り、ドアから外に逃げていった。「圧巻だったのは、二階のありさまだった。そこでは、一人の日本兵が便器から一フィートの便所の床に、名刺代わりとばかりに排泄物を出していた」。ウイルソンは書いている。「彼はそれに、部屋にかけてあったきれいなタオルをかぶせていた」。

しかし、どのような略奪も、彼が市内で目撃した強姦や殺人には比較できない。戦場の外科医として、いろいろなことに慣れていたウイルソンではあったが、残虐行為の激しさにはショックを感じた。

一月一五日 民間人の殺戮は凄まじい限りだ。私はほとんど信じがたい強姦と残虐行為を、何ページでも書きつづけることができる。

一月一八日 今日、ダンテ地獄篇の現代版の六日目だ。そこには膨大な流血と強姦の文字が綴られている。大規模な殺人と何千件もの強姦。残忍性、強欲、そして野蛮の突風は止まるこ

とがないようだ。最初、私は彼らの怒りを掻き立てないよう、彼らに対して愛想よく振舞おうとした。しかし、微笑は徐々に失われ、私の視線は彼らと同じように冷たく、疑い深いものになった。

一月十九日 貧しい人たちからすべての食料が盗まれた。彼らは恐ろしいほどに傷つけられ、狂乱状態に陥っている。いつ終わるのだ！

クリスマス・イブ 彼らは、安全区内にまだ二万人の兵士がいると我々に語り（その数字がどこからきたのか、誰も知らない）、彼らを狩り立て、全員を射殺するといっている。それは、市内にいる一八歳から五〇歳までの健康な男性すべてということになるだろう。今後、彼らは再び世間に顔向けができると思っっているのだろうか？

年の瀬になると、彼の手紙は宿命論的な雰囲気帯びるようになった。「唯一の慰めはこれ以上悪くなり得ないことだ」。二月三〇日に彼は書いている。「彼らはいなくなった人々を殺すことはできない」。

ウィルソンたちは、日本人が中国兵を駆り集めて、射殺し、死体を空襲に備えて掘られた土の防空壕に詰め込んでいるのを何度も見た。防空壕は巨大な墓穴になっていた。しかしウィルソンは、多くの中国人が、日本軍に何らかの脅威を与えたからでなく、その身体を実用的な目的に使用するために処刑されたのだと聞いた。南京陥落後、中国人が戦車の通行を妨害するために掘った大きな塹壕が一杯になるまで死体や負傷兵の身体で埋められた。その上を戦車が通過できるだけの死体を日本人が確保できない

ときに、彼らは近所の住人を射殺し、そこに投げ入れたというのである。この話をウイルソンに語った目撃者は、彼の証言を確認する写真をとるためにカメラを借りた。

これらの殺人を防ぐためにウイルソンができることは、ほとんど何もなかった。ウイルソンが立ち向かった日本兵たちは、ウイルソンや他の外国人たちを脅かすために、しばしば、これ見よがしに、銃弾を装填したり、それを抜き取ったりして、武器をもてあそんでいた。ウイルソンは背中から撃たれる危険をずっと感じていた。

南京でウイルソンが見た最悪の光景のひとつは、街路での一〇代の少女たちに対する大掛かりな輪姦だった。ウイルソンは一生涯、その光景を忘れることができなかつた。一五歳から一八歳までの若い女性の集団が日本人によつて一列に並ばされ、土の上で次から次へと、一連隊の兵士たち全員に強姦されていった。あるものは出血のために死に、他のものはその直後に自殺した。

しかし、病院内の光景は街路でのそれよりもさらに恐ろしいものだった。ウイルソンは緊急治療室で、腹部を切り開かれた女性たち、日本人が生きたまま焼き殺そうとして黒焦げになり恐ろしいほどに容貌のくずれた男性たち、あるいは彼が紙に描写することができなかった多数の恐怖を、次々と目にして心を痛めた。彼は、切り落とされかかった首が頸部でぐらついていた女性を決して忘れることはないと言った。「今朝、悲惨な窮状の恐ろしい身の上の女性がまた一人来た」。病院の医療ボランティアが、この女性のことを一九三八年一月三日の彼の日記に書いている。

彼女は日本軍の兵士が彼らの一医療部隊で使うために連行した五人の女性の中の一人だった。



昼間は彼らの衣服を洗わせ、夜には強姦するために。彼らの二人は一五人から二〇人の男を満足させることを強制され、最も可愛らしい女性は毎晩四〇人に犯された。私たちのところに来たこの女性は、三人の兵士に呼び出され、離れた場所に連れて行かれて、そこで彼らは彼女の首を切り落そうとした。首の筋肉は切断されたが、彼らは脊髄を切断することには失敗していた。彼女は死んだ振りをして、自分の力で病院までたどり着いた。こうして、彼女は兵士たちの蛮行を目撃した多数の証人の新たな一人になった。

ウイルソンは、苦痛と受難の渦中にある患者たちの中に強い精神力を持つている人がいるのに驚かされることもあった。一九三八年の元旦の日付の家族への手紙の中で、彼は生存者の信じがたい話を書いている。中国兵が南京の南郊の小さな村にある二九歳の女性の家を焼き払い、五人の幼い子どもたちを連れて徒歩で首都に向かうことを強いた。夜になる前に、日本軍の戦闘機が彼らに向かって急降下して家族に機銃掃射し、弾丸は母親の右目と頸を貫いた。彼女はショックで気絶したが、翌朝、血の海の中で意識を取り戻すと、横で子どもたちが泣いていた。彼女の最年少の子どもである三ヶ月の嬰兒を抱いていくには余りにも体力が弱りきっていたので、彼女はその子を空家に残してきた。なんとか力を振り絞って、残った四人の子どもたちと南京への苦しい道を進んで、ようやく病院にたどり着くことができたのだ。

ウイルソンとボランティアたちは、疲れ切つて倒れる寸前まで病院に残った。国際委員会は市外からの医療の援助を受けられるはずだったが、日本人は医師や医療ボランティアが南京市に入ることを

許さなかつた。そのために、病人の世話と安全区の管理の重荷は、包囲下にあつた二〇人ほどの人たちによる小さな委員会にのしかかつた。彼らは、毎日二四時間、少なくとも一人の外国人がいて日本人から病院を護つてゐる状態を維持するために交代で勤務した。彼らの何人かは風邪を引き、インフルエンザやさまざまな病気に冒された。大虐殺の間、ウイルソン以外の市内の唯一の西欧人の医師だつたC・S・トリマーは華氏一〇二度（摂氏三九度——訳者）の高熱に冒されながら奮闘してゐた。

ウイルソンは行き場のない患者の退院を拒否してゐたので、南京大学病院は急速にもうひとつの難民キャンプになつていつた。病院を出る患者たちは、自分の家に安全に戻れたことを確認するために、外国人が送つていつた。ジェイムズ・マッカラムは病院の専用運転手役を務め、塗装がはがれ、ぼろぼろになつた救急自動車で市内を走り回つた。大虐殺の生存者は、疲れきつたマッカラムが患者を家に運ぶときに、眠り込まないよう冷たいタオルを顔に当ててゐたのを覚えてゐる。しかし、冷たいタオルを使つても眼を開けていられなくなつたときに、彼は血が出るまで自分の舌を強く噛んだ。

南京の人々の中に、病院でのウイルソンほど強く自分を駆り立てて頑張つてゐた人はいなかつた。虐殺と強姦が徐々に収まつてきたときに、他の医師の何人かは、週末に緊張を解きほぐすために上海に行つた。しかし、ウイルソンは昼も夜も、時間を省みず、冷酷に見えるほどに、患者の手術を続けていた。ほぼ六〇年の後にも、生存者たちは彼の無私の態度を覚えてゐる。生存者たちは大きな尊敬の念を抱いてウイルソンを語る。少なくとも彼らの中の一人は、ウイルソンの手で行われた手術の準備やそれが成功した結果を詳しく話してゐる。彼は無償で手術を行つた。彼に金銭を払える患者は皆無に近かつたのである。しかし、手術は彼自身の健康を損なうという怖ろしい代償を課すものだつた。彼の家族は、結

局のところ、彼の敬虔なメソジストとしての信仰と中国に対する愛情が、南京大虐殺の中で生き続ける勇気を彼に与えたのだと、信じている。

### 南京の生きている女神

ウィルヘルミナ・ヴォートリン（またはミニー・ヴォートリン、ほとんどの人々は彼女をそう呼んだ）。占領当事、金陵女子文理学院教育部の教師で学部長だった彼女は、南京大虐殺の初期の教週間、市内に残っていた数少ない西洋人女性の一人である。後年、彼女は日本兵から数千人の女性を護った勇氣によってだけでなく、彼女が書いていた日記によっても、記念されることになる。ある歴史家は、この日記について、戦争によるホロコーストの時代を証言する精神を照らすという重要性において、アンネ・フラックの日記に匹敵するものであると信じている。

鍛冶屋の娘だったヴォートリンは、一九三七年当時五一歳だった。イリノイ州の小さな農村セコアで育った彼女は、六歳で母親が死んだときに、隣人の家に預けられた。その家で彼女は、しばしば召使いや作業婦に毛の生えた程度の扱いを受け、厳冬の季節に家畜たちの番をしていたという。少女時代の貧困にもかかわらず、彼女は進学の道を歩むことができ、一九一二年にはアーバーナ・シャンペーンのイリノイ大学を優等で卒業した。若い頃の彼女は、背が高く、容貌の優れた、黒い長髪の、陽気で気取らない女性で、多数の求婚者の心を奪った。しかし、イリノイの大学を卒業する前に彼女は結婚をしないことを心に決めた。その代わりに、彼女は連合キリスト教宣教伝道団に参加し、中国安徽省の合肥市に移り、そこで女子中学校の校長を七年間務め、中国語会話を学んだ。次いで、ヴォートリンは南京に移

り、大虐殺当時の職に就いたのである。

南京でのヴォートリンは間違ひなく非常に幸せだった。イリノイの故郷を訪れたとき、彼女は、いつまでも中国のことを話し続けた。その文化、人々、そして歴史。家族には蚕の繭を贈り、中国の食材の料理法と食べ方を教えた。日記の中で、彼女は南京の景観の美しさをとめどなく賛嘆し続けた。熱心な園芸家だった彼女は、金陵学院に薔薇や菊を植えた。中山陵の温室を訪れ、明陵の付近の芳しい桃李の並木道を散歩した。

一九三七年の夏、友人たちといっしょに青島の海岸沿いの行楽地で休暇を過ごしていたときに、ヴォートリンは、北京から南数マイルの地域の日本兵が姿を消したという話を聞いた。姿を消したことが引き金となり、その地域における中国軍と日本軍の間の戦闘が発生した。この状況に駆り立てられるように、彼女の友人の一人は、暗い表情で、一九一四年のサラエボでのたつた二人の人間の暗殺が、結果的に、一〇〇万人以上の人々の死を引き起こしたのだと評した。

それでもヴォートリンは、南京から去っていく他のアメリカ人たちに加わることを拒否した。そこで、アメリカ大使館は彼女に、九フィートのアメリカ国旗を貸与した。それは、金陵学院の芝生の中庭の中央に広げて、日本軍の飛行士からキャンパスを護るためのものであった。さらに、大使館職員は彼女と他の国際委員会のメンバーに縄梯子を結ぶための長い縄を与えて、大使館員が乗船するパネー号が出航し、中国軍が城門を閉じたら、脱出する唯一の望みは城壁を乗り越えることだと言った。

しかし、ヴォートリンは一瞬たりとも脱出のことなど考えなかった。ほとんどの職員が南京を去ったために（多くは家を放棄して、上海や成都のような都市に逃げていった）、今ではヴォートリンは学院長

の代理として行動していた。彼女はキャンパスに女性の難民を受け入れる準備と、負傷兵をその地区から撤退させることのために労力を費やした。兵士たちの身分を隠すために、彼らの軍人証と軍服を学院の焼却炉で焼いた。彼女の指揮の下、家具は屋根裏部屋に移され、金庫は空にされ学生寮は清掃され、貴重品は油紙に包んで隠された。同時に、南京安全区のポスター、標識、腕章が作られ、ポランティアに配られた。ヴォートリンは二つ目のアメリカ国旗の縫製も指示した。これは二七フィートの長さだったが布を縫い合わせた中国人の仕立て屋が間違つて、星のある青い部分を左上ではなく左下の角に縫いつけてしまった。一二月の第二週の前に、金陵学院の門は女性と子どものために開放された。数千人の人々がなだれ込むように入ってきた。難民たちは一日に千人の割合で市内を通り抜けてやってきた。疲れきり、混乱して、空腹だった彼らの多くは、衣服だけを背負つて安全区のキャンプに入ってきた。「今日は昼食の時間を除いて朝八時三〇分から夕方六時まで、続々と難民が入ってくる間ずっと正門に立っていた」。彼女は書いた。「多くの女性は怯えた表情をしていた。城内では昨夜は恐ろしい一夜で、大勢の若い女性が日本兵に連れ去られた」。

ヴォートリンは女性たちと子どもたちが自由に入ることを許したが、若い女性の場所を確保するため、年配の女性は家に残ってほしいと頼んだ。だが、彼女の希望を実行する女性は少なく、ほとんどは芝生の上に座らせてもらうだけでいいからと懇願した。一二月一五日の夜には、金陵学院のキャンパスの人口は三千人以上になった。

翌日、日本兵が学院に襲いかかってきた。一二月一六日の午前一〇時に、一〇〇人以上の日本兵が、隠れている中国兵を探すために建物内を検査するといつて、金陵学院のキャンパスに乱入してきた。彼

らはすべてのドアを開くよう要求し、すぐに鍵を持ってこない場合には、斧を持って立っている日本兵がドアを破壊してこじ開けると言った。ヴォートリンは地理科準備室の二階に保管している数百の衣類が見つけれないかと案じて心を乱したが、幸運なことに、日本兵の注意は二〇〇人の中国人女性と子どもたちで一杯になっていた屋根裏部屋のほうに引き付けられていたために、衣類に注意が向くことはなかった（あとでヴォートリンは日本人から隠すために衣類を埋めた）。

その日、日本人はキャンパス内の作業夫を二度襲撃し、連れ去ろうとした。ヴォートリンが助けに入り、「兵士じゃない、苦力」と叫ばなかったら、彼らは間違いなく殺されていただろう。日本人が六機以上の機関銃をキャンパスに向けていて、多数の兵士たちで外側を固めて、逃走しようとするものは誰でも撃ち殺そうと準備万端だったということをヴォートリンが知ったのは、あとになってからだだった。

その晩、ヴォートリンは運び去られる女性たちを見、彼女らの絶望的な嘆願の声を聞いた。一台のトラックに八人から一〇人の少女が積まれて走っていき、それが通るたびに彼女らの叫び声が聞こえた。

「救命！ 救命！<sup>チイウミン</sup>（殺さないで！）」

翌日の一九三七年一月一七日はさらにひどくなった。日本兵が市内に溢れると、金陵学院への女性たちの移動は激しくなるばかりだった。「なんとという痛ましい光景なの！」ヴォートリンは書いた。「疲れ果てた女性たち。怯えきっている少女たち。子どもたちを連れて、寝具と衣服の小さな荷物を持って、とぼとぼと歩いてくる」。入ってくる難民一人一人の話について書き取る時間がある人がいればいいのに。彼女は思った。特に、顔を黒く塗り、髪を切っている少女たちの話を。「きつい目付きの女性たち」の流れを收容するときに、彼女は日本人が、一二歳から六〇歳までの女性を強姦し、妊娠している女性

を銃剣で脅して強姦した話を聞いた。その日ヴォートリンは、難民のための食料を確保するために一日中走り回り、中国人の男性を安全区内の他のキャンプに移るよう指示し、キャンパス内で日本兵を見かけたという場所に向かって急行した。

しかし、その晩にヴォートリンを待っていた出来事に対しては、何の準備もしていなかった。二人の日本兵が中央校舎のドアをこじあけようとして、ヴォートリンにそこをすぐに開くよう要求した。彼女が鍵を持っていないし、中に兵士など隠れていないと言うと、日本兵は彼女の頬を平手打ちにして、彼女の隣にいた中国人男性を殴りつけた。次に、日本兵は学院から三人の作業夫を縛って連れて行った。彼女が彼らを正門まで追いかけていくと、日本兵が多数の中国人を道の脇に跪かせていた。日本人は学院の責任者と話をすることを要求し、それがヴォートリンだと知ると、跪かされている人たち全員を確認するよう命令した。仲間の一人の男が彼女を助けるために声を張り上げると、そのために彼は手ひどく叩かれた。

この騒ぎの最中に、委員会の三人のメンバーが駆けつけてきた。YMCA書記のジョージ・フィッチ、南京大学社会学教授ルイス・スマイス、長老派教会の宣教師W・プラマー・ミルズの三人である。兵士たちは彼らを一列に並ばせ、拳銃をもっていかどうか身体検査した。突然、彼らは叫び声と泣き声を聞き、日本兵が女性たちを通用門から引き摺り出していくのを見た。このときになって初めて、ヴォートリンは、尋問全体が外国人たちを正門に引きとめておき、その間に別の日本兵がキャンパス内で強姦する女性たちを捜索するための計略だったことを知った。「あの光景はけっして忘れることはできない」。そのとき憤激とやりきれなさを思い出して、彼女は書いている。「人々が道の脇に跪き、メアリーと程先

生と私が立っていた。枯葉がかさかさ音を立て、うめき声のような風の音、連れ去られていく女性たちの叫び声」。

その後の数ヶ月間、ヴォートリンは自分が一人だけで、金陵学院の難民キャンプを護っていることに気づくことがたびたびだった。日本兵たちは絶え間なく難民たちを苦しめ、処刑するための男性たち、あるいは軍事売春宿用の女性たちを連れ去ろうとした。ときには、彼らの徴収のやり方は厚かましいものだった。日本兵たちがキャンパスにトラックを運転して押しかけ、少女を要求するということが少なくとも一度はあった。しかし、ほとんどの場合には、強姦目的の女性拉致は密かに行われた。夜になつてから、兵士たちは竹の塀を飛び越え、あるいは通用門や裏門をこじ開けて、暗闇の中で手当たり次第に女性を漁った。人々の間に、この人狩りの探検は知れ渡り、「くじ引き」と呼ばれた。

一九三八年の元旦の日に、ヴォートリンは兵士によつて図書館の北側の竹林に連れこまれた少女を救った。こういう英雄主義的な行為は、しばしばヴォートリンの命を危うくするものだった。ほとんどの兵士たちは、彼女に対して「獐猛で常軌を逸して」いて、真新しい血痕が染みついた銃剣を振り回した。「ある場合には彼らは傲慢で、私を刃のような視線で睨みつけた。ある場合には、その手に刃を握っていた」。あるとき、彼女が日本兵の略奪を止めようとする、一人が彼女に拳銃を向けた。

ヴォートリンもときには、日本兵の扱いで誤りを犯すことがあった。ラーベや他の委員会のメンバーが日本人に騙されて、男たちを渡してしまい、処刑されたように、ヴォートリンも騙されて、無垢の女性たちを日本兵の手中に送りこんでしまったようである。一月二四日、ヴォートリンは事務所に呼び



出され、日本軍高官と年配の中国人通訳に会った。彼らはヴォートリンと、日本軍における売春婦の必要性について議論した。「彼らの要求は、私たちのキャンプの一万人の難民から売春婦の女性を選び出すことを許可してもらいたいというものだった」。後にヴォートリンは、その会合について日記に書いている。「彼らは一〇〇人ほしいと言った。彼らは、正規の許可を得た場所が始まれば、無垢の身持ちのよい女性たちを苦しめることはなくなると思う、と言う」。

非常に奇妙なことだが、ヴォートリンはこの要求を許可した。恐らく、彼女にはそのことについて別の選択肢がなかったのだろう。あるいは、日本人が売春婦たちを連れて軍事売春宿に去っていけば、彼らは難民キャンプの処女たちや立派な既婚の婦人たちを苦しめることをやめると本当に信じたのかもしれない。彼女の決定の背後にどのような理由があったにせよ、ヴォートリンが圧力の下でこれを行ったと考えて誤ることはないだろう。彼女は日本人が搜索するのを待っていた。長い時間の後、彼らは最終的に二人の女性を確保した。日本人がこれらの女性をどうやって売春婦であると見分けたかについて、ヴォートリンは語っていない。しかし彼女は、日本人はもつと多数の売春婦が安全区に隠れていると確信しているので、満足していなかったと述べている。「少女たちが次から次にやってきて、彼らは残りの七九人を身持ちのよい少女から選ぶのではないかと尋ねた。私には、私の目の黒いうちはそんなことはさせないと答えるのがやっとだった」。こう、彼女は書いている。

市の陥落から一週間後に、日本人は地域の活動を統制しようとする系統的な措置を取り始めた。日本軍の憲兵司令官は、一二月二四日発効の布告を出し、すべての市民が日本軍の事務所が発行するパスポー

ト（「良民証」とも呼ばれた）を取得しよう命令した。パスポートを代理で受け取ることは許されず、パスポートを持たない人は南京城内で生きることが許されない。軍は、登録しなければ処刑される危険があることを通知する掲示を街路に貼り出した。

二月二八日、男性の登録が始まった。金陵学院で彼らは四列に並んで登録用紙のコピーを受け取り、キャンパスの北西の角に進んで行った。そこで、日本人は彼らの名前、年齢および職業を記録した。ヴォートリンは、登録にやってきた男性たちのほとんどが老人か障害者であることに気づいた。すでにほとんどの若い男性たちは市から逃亡していたか、殺されていたのである。顔を見せに来た中でも、多くの男たちが元兵士と疑われて連れ去られ、後に残されたのは安全区の指導者の前で涙を流し、跪き、彼らの夫や息子たちの解放を請合ってくれるよう懇願する老人や女性だった。これに対する安全区の指導者たちの交渉はいくつかの例では成功したが、彼らは日本軍の将校たちが指導者たちによる介入に対して次第に苛立ちを隠さなくなっているのに気づいた。

男性を登録に駆り立てようとして、その結果に失望した日本人たちは、人々を脅迫して服従させようとした。二月三〇日に、彼らは翌日の午後二時までに登録していないものは全員射殺されると通告した。この出来事について、一人の宣教師が書いた。「これははったりに違いない。しかし、それは人々を震え上がらせた」。翌朝、従順にも、巨大な群集が登録地区に現われた。その多くは、登録する列に確実に並べるようにと、午前三時に起床してきた。日本人の苛酷な威嚇は大きな恐怖を植えたために、当局は一月一四日までに少なくとも一六万人の人々の登録に成功した。

女性の登録は二月三十一日の午前九時に始まり、数千人の中国人女性が金陵学院の中央校舎の前に集

まり、そこで日本軍将校が彼女たちに講義をしていた。演説は最初日本語で話され、次に通訳によって中国語に翻訳された。ヴォートリンは彼の演説を覚えていた。「君たちは伝統的な結婚の習慣に従わなければならない。君たちは英語を学んではいけないし、劇場に行つても行けない。中国と日本はひとつでなければならない」。そして女性たちは二列に並んで定められた枠の間を通つて行進して米を販売する場所に進みそこで券を与えられた。ヴォートリンは、日本兵が女性たちを家畜のように駆りたてていることにたいそう喜んでゐる姿を観察していた。ときに、彼らは女性の頬にゴム印を押した。日本兵は女性たちに、日本の新聞記者や写真家に向かつて微笑み、幸せそうにするようにと強いた。しかし、実際には登録のことを考えるだけで、文字通り恐怖のあまり寝込んでしまう女性たちもいるほどだったのである。

ときにヴォートリンには、日本人による中国女性の登録は、強姦する最も魅力的な女性を求めた大がかりな視察以外の何物でもないのではないかと思えた。女子登録のまさに最初の日に、日本人は安全区の特定の女性たちに目をつけ、彼女らを連れ去ろうとした。彼らは二〇人の女性を選別した。売春宿で使おうとしていたことに疑問の余地はない。彼女たちは髪をカールさせていたか、服装が良すぎたのである。しかし、全員が解放された。後にヴォートリンは書いている。「母親や他の人が彼らの保証人になつたからだった」。

登録が終わると、日本人は安全区自体を排除しようとした。しばらくして、日本人は、月末までに全員がキャンプから出て自分の家に戻ることを要求する通告を出した。二月四日が最終期限とされた。最終期限を過ぎたとき、日本兵が金陵学院を視察し、残っている少女たちと女性たちに立ち去るよう命令

した。ヴォートリンが視察官に、彼女らは他の市から来たか、あるいは家が焼かれてしまったので、立ち去ることはできないと言うと、日本人は憲兵が責任を持つて彼女らを保護すると主張した。ヴォートリンは彼らの約束を信じかねていた。日本人の意向を伝えるために日本人と一緒に来た中国人通訳さえ、若い女性は安全でないから、現在、彼女らがいるところを離れないほうが良いと囁く始末だった。

難民たちの度を越えた人数の多さは、ヴォートリンを圧倒した。何百人もの女性たちがベランダにすし詰めになり、足の踏み場もなかった。さらに多数の女性たちが夜に野外の草の上で眠っていた。金陵科学講堂の屋根裏部屋には二千人以上の女性たちが住んでいた。ヴォートリンの友人はこれらの女性たちについて書いている。「冷たい冬の月に、何週間もセメントの上で肩を寄せ合って眠った。建物のセメントの階段の一段一段が一人分の家だった。これらの階段は四フィート（約一二〇センチメートル——訳者）よりも長いものではなかった。化学研究所のテーブルの上に休息所を得ることができたものは幸せだった。送水管やその他の付属設備は全く気にならなかった」。

南京大虐殺はヴォートリンの健康を破壊していったが、彼女が毎日耐え続けた精神的な苦痛は肉体的消耗よりも遙かに彼女を害するものだった。彼女は日記に書いた。「神様、今夜は南京での日本兵による野獣のような残忍行為を制止してください。日本の女性たちがこのような戦慄の物語を知ったら、どんなに恥じるでしょうか」。

それほどの圧迫感の下でも、ヴォートリンが他人を慰めその愛国心の感情を保たせようとする気力を

失わなかったのは特筆すべきことである。あるとき、金陵学院の赤十字の台所に老婦人が来て粥を探していたとき、彼女は粥がもう残っていないことに気づいた。ヴォートリンはすぐに自分が食べていた粥を彼女にあげてから言った。「あなた方は悩むことはありません。日本は失敗します。中国は滅びません」。また、ある少年が身を護るために日本の国章である旭日の腕章をつけているのを見たときに、ヴォートリンは彼を叱りつけて言った。「あなたはそんな旭日の紋章を身につける必要はありません。あなたは中国人で、あなたの国は滅びていないのです。あなたはこんなものを身につけた日付を覚えておくべきで、決して忘れてはいけません」。ヴォートリンは、繰り返して、繰り返して、キャンパスの中国人難民に対して、未来に対する信念を失つてはいけぬのだと力説した。「中国は滅びていません」。彼女は言った。「中国は決して滅びません。日本は必ず最後には敗れます」。

他の人々は、苦しい状況の中で彼女がどれほど献身的に働いていたのかを見ていた。ある中国人の生存者は思い出した。「彼女は朝から夜まで眠っていませんでした。彼女は見張りをつづけていて、日本兵がきたときには……彼らを押し返すための最大の努力をし、彼らの上官のところに行つて、中国人の女性や子どもに酷いことをしないよう嘆願しました」「あるときは、乱暴な日本兵によつて彼女が何度も殴られたと聞きました」。別の人が、自分の南京大虐殺の目撃記録に書いている。「みな彼女のことを心配し、みな彼女を慰めようとはしました。それでも彼女は、強い勇気と決意をもつて、始めから終わりまで、中国人の女性を護るために戦つたのです」。

安全区を管理する作業は肉体的な負担だけでなく、心理的な消耗をも強いものだった。ナチ黨員で

国際委員会のメンバーのクリスチャン・クレীগーは、街路であまりに多くの死体を見たので、その悪夢にうなされるようになった。それでも、信じられないような悪環境の下で、委員会は多数の生命を救った。次に記すような、驚くべきような事実がある。

——略奪と放火により食物がほとんどなくなつたために、中国人難民は金陵学院に自生するエゾギクやセイタカアワダチソウなどの野草を食べ、市内で見つけたキノコを食べて生きていた。安全区の指導者でさえも十分な食事をとることができず空腹だつた。彼らは炊き出しで無料の米の食事を配給しただけでなく、その一部は難民の住居に直接配送した。安全区内の多くの中国人は、怯えきつていて、建物の外に出ることもできなかつたのである。

——上品な読書家たち。安全区の指導者の多くは、強姦者、殺人者、あるいは街路での略奪者の群れに対処した経験がなかつた。ところが、彼らは市内の中国人警察に対してさえ、その警護者として行動した。彼らはあたかも戦士のように、体力を振り絞り蛮勇を掻き立てて危険な場所に飛び込んでいった。あるときは処刑場で格闘して中国人を逃がし、あるときは女性の上にかぶさる日本兵を叩いて引き剥がし、あるいは、日本軍が構えている大砲や機関銃の銃口の前に飛び出して、発砲を防いだことさえあった。

——活動の過程で、安全区の指導者の多くは射殺されそうになつたし、日本兵が振り回す銃剣や日本刀で一撃されたものもいた。たとえば、南京大学の農業工学教授チャールズ・リッグズは、日本人将校が中国人の民間人を兵士だと誤認して連行しようとするのを阻止しようとして殴打された。激昂した日本軍将校は「彼の日本刀で三度にわたりリッグズを脅したが、最後には拳で彼の胸を強打した」。日本兵がマイナー・シール・ベイツを拳銃で脅したこともあった。別の事件では、三人の少女が寝ていたベツ

ドにもぐりこもうとした兵士をロバート・ウィルソンが病院から叩き出そうとしたときに、兵士は彼に向けて拳銃を構えた。別の兵士はジェイムズ・マツカラムとC・S・トリマーに向けて小銃を発砲したが、弾は当たらなかつた。兵士によって縛られ連れ去られた大学附属中学の生徒の状態を知るために、マイナー・シール・ベイツが日本軍の憲兵隊本部を訪れたときには、日本兵は階段の上から彼を突き落とした。ときには、護符としてのナチのハーケンクロイツですら襲撃を防ぐご利益がないこともあつた。一二月二二日にジョン・ラーベは書いている。クリスチャン・クレীগーとハッツというもう一人のドイツ人が、酔つ払つた日本兵によつて首を傷つけられた中国人を救おうとしたときに攻撃された。ハッツは椅子で身を護つたが、明らかにクレীগーは縛られ、殴られたようである。

——最終的に、安全区は二〇万人から三〇万人の難民を収容した。これは市内に残つていた中国人の半数近くになる。

後の南京大虐殺の研究を照合すると、最後にぞつとするような統計が得られる。南京の元の住民の半分は大虐殺の前に南京を離れた。南京にいた人々の約半数（市の陥落時にいた中国人の難民、以前からの居住者、および兵士の合計の六〇万から七〇万人のうちの三五万人）が殺された。

大虐殺の最悪の時期に、南京の人々の半数が安全区に逃げ込んでいたとするならば、残りの半分は、つまり安全区に避難しなかつた人のほぼ全員が、日本人の手によつて死んだのではないかということになる。